

Noisy Nose Knows

komit

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

イギリス、12歳の夏。

疎遠な両親から転校を言いつけられた少女は、新学期を前に憂鬱な夏休みを過ごしていた。

そこへ突然の来訪者、知らされた転校先はなんと——馬鹿馬鹿しいことに——魔法学校だった。

魔女ではなくマグルで居たいと望む少女の奮闘劇。

## 目次

愚かなる日々の終焉

- (1) 何の変哲もない水曜日 | 1
- (2) へんてこな街、へんてこな人々 | 9
- (3) 壁一面の棚 | 18
- (4) 猫と喧嘩と／旅立ちの朝 | 26

苦闘の幕開け

- (1) ホグワーツ特急 | 35
- (2) 組み分けの儀式 | 45
- (3) 宴の後 | 54
- (4) 吼えメール | 63
- (5) 初めての授業 | 72
- (6) 補習授業 | 80
- (7) 修辞学の棚にて | 87
- (8) 魔力検査 | 97
- (9) 退学届 | 108
- (10) 襲われた猫 | 119
- (11) 決別 | 127
- (12) クリスマス休暇 | 137
- (13) お喋りな紙切れ | 145
- (14) 万能吸水ペーパー | 155
- (15) 第四の事件 | 164
- (16) 秘密の部屋 | 172
- (17) 秘密の部屋② | 180
- (18) 秘密の部屋③ | 190

## 愚かなる日々の終焉

### (1) 何の変哲もない水曜日

何の変哲もない水曜日だった。制服を着て、鞆を持って、靴を履いて、『いつてきます』の声と共に慌てて家を出る必要はない。夏休みだ。

いつもより遅く起きたモアは、焦げ臭い香りの充満するリビングでいつもより遅い朝食を摂っていた。彼女は鼻を突く臭いに眉をしかめるでもなく、グリーンサラダをこれでもかというほどだらだら口に運んでいく。

テレビも点いていない家の中は閑散としたものだ。窓を見遣ればこの上なく天気は良いが、生憎、モアには出掛ける予定もなかった。やがて、空になったサラダボウルの上から、モアはトースターに手を伸ばす。時折聞こえる溜め息は、約束のない我が身や真つ黒に仕上がったトーストを憂うものではない。

先程から姿の見えない両親は、もうとつくに仕事へ出てしまったのだろう。

とは言え、いつもより遅く起きたのは他でもないモアだ。だから、顔を見れずとも仕方のないことだと、人はそう思うかも知れない。

だが、モアにしてみれば、彼らが昨晩ちゃんと家に帰ってきたかどうかすら怪しむべき所なのであった。

両親共に不在のことが殆どなこの家庭で、モアはここ数ヶ月に渡って誰かとまともに言葉を交わした覚えがなかった。最後に家族揃って朝食を摂ったのは、何時だっただろうか。モアはぼんやりと記憶を辿るも、すぐにそれが徒労だったと気が付いた。

モアは九月から別の学校へ転校することになっている。父親に言わせれば、今の勉強よりもっと必要なことを学ぶためには転校するしかないのだそうだ。だが一方的に教えられたのはたったそれだけの決定事項であり、記憶にある限りではそれが家族と交わした最後の会話だった。

モアは自分の両親が何を考えているのか全く理解出来ていなかった。そもそも、忘れた頃に顔を出しては、いつも適当な口だけ挟んですぐ居なくなるような奴らなのだ。当然、転校については断固反対したい所だったが、両親は姿を晦ましたようにまた不在を続けていた。そしてとうとう、その機会が訪れることもなく夏休みを迎えてしまったのだった。

「いつもいつも勝手すぎるわ。どうして私が迷惑してることに気付かないのかしら」

ぽつりと呟いてみた所で、応えてくれる者などこの家にはない。

ゆるゆると首を振ったモアはテーブルの上に置かれた写真立てを見遣る。中には送別会で撮った集合写真が収められていた。

家庭に幸福を見出せないモアにとっては、今の学校こそが心の支えだった。彼女の中でクラスメイトの皆は良い友人であると同時に家族だったのだ。けれど、この夏を境に、その支えさえ失われようとしている。

どうしようもない事実を噛み締め、モアは鼻の奥がつんと詰まる感じがした。徐々にぼやけ始めた瞳がテーブルクロスに染みを落としていく。

ヤンセンは誕生日になると袋一杯のチョコレートボンボンをくれた。クラスで三番目に頭の良いヒューイは分からない宿題を根気よく教えてくれた。お洒落好きのジョアンナはモアに一番似合うリボンを見付けてくれたし、お調子者のジャンはモアを怒らせることもあったけれど落ち込んでいる時には誰よりも励ましてくれた。ミルと顔を合わせれば喧嘩ばかりだったが、それでも送別会の日はモアのために一日中涙を流してくれた。

マイケルは、シャロンは、リチャードは、モニカは、キャシーは。

幼馴染で一番の親友だったアレイヤは、モアを何度もお家に招いては食事をご馳走してくれた。寂しくなって夜中に電話しても、嫌な顔せず話を聞いてくれた。モアが結婚する時は一番に招待状をちようだいねと言ってくれた。アレイヤの小鳥が亡くなった時には二人で大泣きした。

他にも、他にもたくさん。

「ううっ……アレイヤ、みんなあ……」

友達のことだと思い出せないことはない。一つ思い返せば思い出が芋蔓式にずるずるとリフレインする。そうしてモアがクラス全員の顔を思い浮かべた後、感極まつてとうとうしゃくり上げようとした、その時。

突如ドンドンと鳴り響いた豪音で、涙の海に沈みかけていたモアの意識は一気に引き揚げられた。

不意に部屋の明るさが陰ったかと思えば、電灯がちかちかと瞬き始める。まるで嵐が近付いてきた時のように、窓ガラスは割れそうなほどに音を立てて、ぶつかり合うサツシが高く鳴った。この部屋のみならず家全体が怯えるように震えている。

昨日の時点で悪天候の予報はなかった。第一、さっきまであんなに晴れていたのだ。これはまさか“地震”という奴だろうか。モアは何年前前にアースクエイクでアメリカの町に甚大な被害が出たことを思い出した。

「な、泣いてる場合じゃないわ、今すべきことは、避難経路の確保よ！」  
モアは窓を開けようと反射的に振り向いて、すぐさま後悔した。この家を襲っているのは嵐でも、地震でもなかった。なんと、大熊のようにどす黒く大きな影が窓にへばり付いていたのだ！

「ぐおおおおお!!」

「きゃあああっ!?!」

モアは戦慄して窓から飛び退いた。テーブルの写真立てが音を立って転がり落ちる。

黒い影は、低い声でしきりに唸りながらベランダに続く大窓を叩いていた。窓を叩くりズムに合わせ、食器棚の中で皿やグラスがカタカタと揺れている。天井から吊り下がった電灯は振り子の動きで宙に弧を描いていた。その力の強いことといったら、思わず家が倒壊しないよう祈るほどだった。

「ぐおおい、ぐおい(ぐ)がげ(ぐ)ぐえええ！」

「いやああああっ!!」

影はその体格に似合う、太い声で吼える。その大迫力に、モアは床の上で思わず身を縮めた。この町にこんな恐ろしい熊、あるいはそれに準ずる猛獣が棲んでいるなんて話は聞いたことがない！

大熊の建物を揺らす力が一層強くなり、遂に壁でぶらんぶらん揺れていたカレンダーが剥がれ落ちた。その異形がモアの目を、何がしかの切実さが入り混じった咆哮が耳を、釘付けにする。

「ぐおおーい……おおーい、ちよいとここを開けてくれ！ モア・クレイズ!!」

そうして改めて聞いた唸り声に、モアはふと気が付いた。もしかしなくとも今、あの大熊は人語を発してはいなかっただろうか。

モアは残り僅かな黒こげトーストを、短剣でもかぎすように構えてから立ち上がる。随分心許ない武器だが、何も持たないよりマシだと思っただのだ。テーブル伝いに窓へと近付き、とは言え手の届かない距離を保ったまま大熊を凝視する。

大熊の顔は髪とも髭とも分らないぼうぼうとした毛に覆われていた。逆光でよく見えないが、毛むくじやらの中からは年かさの窺える肌と、子供染みてきらきらした真つ黒の目が覗いていた。

少なくとも猛獣の、獲物を狙う様なぎらぎらした瞳ではない。歴とした人間の目だ。いくら人語を発するとは言えど、見た目からもオウムの類ではないように窺えた。

どうやら彼は新種の猛獣ではなく、ある種の人間であるらしい。そう気付いたモアは一気に身体力が抜けるのを感じた。

モアの名前を知っているならば取り敢えず泥棒ではないだろう。ただ残念ながら彼女はこんな大きな友達を持った覚えはなかったし、放任主義を盾にした両親に関しては友人と呼べる者が存在しているのかどうかすら怪しかった。

この見ず知らずの相手に対して窓を開けた方が良いのか、開けてはいけないのか、モアには皆目見当が付かなかった。

「あの、どういうご用件、ですか」

膠着状態が続くこと数十秒。つい好奇心に耐えられなくなったモアは、トーストを構える手もそのままに大男へ声をかけた。大男は疲

れたように肩を落とすと、ちよつと微笑み混じりに口を開いた。

「おまえさんのご両親に頼まれてな、転校のことで来たんだが」

なんだそのことか、とモアも肩を落とした。

素性は分からないがひとまずは信用しても良さそうだ。幾ら転校に反対とはいえ、わざわざ頼まれて来た人を追いつ返す訳にはいかない。

モアは手元で潰れたトーストを一口に放り込みながら窓を開けた。大男が、こりやどうも、と言いながら窮屈そうに上がって来る。立ち塞がれていた窓から陽射しが差し込んで、部屋全体に夏らしい明るさが戻って来た。

「あなたねえ、人の家を訪ねる時は玄関から来るものよ」

「おお、あの小さい扉を壊したらいかんと思つてな。仕方なく窓にした」

差し出された椅子にどっかりと座りながら大男が言う。粗忽そうな見た目は随分を通り越して完全に怪しいが、そう悪い人でもなさそうだ。

彼が家上がったお陰で、がらんとしていたリビングも一気に手狭に感じる。椅子は控え目に言つても悲鳴を上げており、こんなに大きな人間が世の中に居るものなのかとモアは感心した。考えてみればみるほど玄関から来てくれないで良かった、と思つた。

「おれはルビウス・ハグリッドだ、おまえさんのことは話に聞いたとる。とにかく色々準備せにやならんのだが……」

「えつ、準備つてなあに。まさか転校の準備つてこと!?!」

モアはショックを体現するように、よろけて壁に凭れかかった。

ハグリッドは真夏に似つかわしくないコートのポケットに手を突っ込むと、ごそごそとやり始める。彼がポケットの中を一掻きする度、フローリング張りの床へと変わった色のビسケットや何かの種のような物が撒き散らされた。

初めのうちはモアもその奇妙な様子を呆然と見詰めていた。が、突然リスの様な小動物や奇怪な形をした木の枝が頭を覗かせるものだから、びつくりするやら驚くやらでおちおち眺めても居られなくなつ



た。

そうしてしばらく漁っているうちに彼はお目当ての物を見付けたりらしく、徐ろに、黄味がかつた羊皮紙の封筒を引っ張り出した。

「詳しい事は全部その手紙の中に書かれちよる。転入許可証も入っている大事な書類だからな、失くすなよ、ちゃんと仕舞っとけ」

大事な書類。そう聞いた途端に、モアの表情が不自然なほどの笑顔へ変わる。

「あら。つまり失くしたら転校出来ないくらい困るってことかしら」

「つつても中身は許可証と学用品のリスト、それに列車の切符ぐらいだからな。心配せんでも、すぐにまた送られてくる」

その一言で、モアのささやかな期待は簡単に打ち砕かれてしまった。

むつとしながら封筒を受け取ると、ひっくり返しそっくり返し眺めてみる。エメラルド色のインクで書かれた宛名に、変わった紋章の入った紫の封蝋。一介の学校にしては中々小洒落た手紙である。かといって転校する気がそえられる訳でもない。

モアはその封筒を、封も切らず、ぞんざいにテーブルへと放ってやった。ハグリッドが訝しげに眉をしかめた。

「まあいい。とにかく、今日おれが遣わされて来たのはその手紙を渡すのと、学用品の買い出しに向かうためだ。準備さえ良ければすぐにも出発したいんだが……」

彼は物言いたげにテーブルの上を見た。空になったサラダボウルの中で、今しがた投げやられた封筒がドレッシングに浸って変色している。

モアは鼻を小さく鳴らすと、封筒を掴まみ上げて椅子の座面に落とした。それからグラスに半分残っていた牛乳を一気におおり、空の食器を次々重ねていく。

「そう。わざわざ訪ねてくれたあなたには申し訳ないけれど、私、新しい学校に行くつもりなんてないのよ」

吐き捨てながら、モアは重ねた食器を文字通り流しに投げ込んだ。ぎよつとしたハグリッドが驚いた声を出す。

「おまえさん、もしかせずとも転校が嫌なのか!？」

「当ったり前じゃない! 何の相談もなしに勝手に話を進められて、納得する子供が世の中にいると思う!？」

冷ややかな表情を浮かべて振り返るとハグリッドは押し黙り、困ったように眉を下げた。遣いとしてやってきた人に当たり散らすのは的外れな気もしたが、他に捌け口の無い今はこうでもしなければモアの気が済まなかった。田舎町の静けさが、余計に沈黙を際立たせる。「まあ、おまえさんの気持ちは分からんでもないがな、もう既に決まったことだ。それにおれも、このまま仕事半ばで帰る訳にやいかんからな……」

ハグリッドはどうしたものかと頬を搔く。

モアは、男の立ち姿を足元から頭の天辺まで見上げてみた。靴底の擦り減った靴、よれよれで冴えない色のコート、顔を覆う伸びっ放しの髭と髪の毛。一見するとただの山男だ。両親の遣いで来た、と言っていたが、どうみても普通の生活を送れているようには見えない。

ハグリッドの足元を睨みながら、モアは考え込む。もしこのまま彼の仕事を果たせなかったらこの大男はどうなるのだろうか。

あの冷淡な両親のことだ、きつとろくな報酬も与えずに放り出してしまいうに決まっている。そうなれば、この人の夕食は——下手をすれば、あのポケットに入っていたバスケットだけになってしまいかも知れないのだ。それでは些か、不憫が過ぎる。

「そうね、この件についてあなたに罪は無いものね。分かったわ。その買い出し、付き合っただけ」

「おお、そうか! いや良かった。なら善は急げだ、学用品を買うならこれからロンドンまで行かにやならんしな」

満面の笑みで膝を叩くと大男は立ち上がり、入って来た窓の方へと歩みを向けた。

「ええと、でも私、お金なんてそんなに持ってないわ」

「その点は大丈夫だ、始めに銀行に寄るからな」

「ならキャッシュカードが必要よね……どこに仕舞ってあったっけ」

「鍵ならおまえの親父さんから受け取ればええ。銀行員じやろうが」

「違うわ、あの人はただの偏屈な宝石鑑定員よ」

「ああ。これから行く銀行のな」

そうなの？ とモアは首を傾げる。てつきり胡散臭い質屋か何かで仕事をしているとばかり思っていたが、銀行勤めだったとはかなりの安定職ではないか。

それにしても自分の知らなかった肉親の一面を、今日初めて会ったばかりの大男から知らされるとは思ってもみなかった。改めて浮き彫りになった家庭環境の不遇さを思い、モアはむっとした表情を浮かべた。

とにかく、父親の職場を訊ねるのであれば、ついでに目一杯文句を言っただけでなければならぬ。そして、どうにかして転校を撤回させるのだ。

モアは気合を入れるかの如く、服に付いたパン屑を力一杯に叩き落とした。

「ほれ、何をしとる。早くせんと日が暮れちまうぞ」

「ああ。ごめんなさい、今行くわ」

モアは答えるなり椅子の封筒を取り上げ、少し逡巡した揚句、ドレッシングの染みたそれを尻ポケットに押し込んだ。既に外に出ているハグリッドを追いかけ、窓を潜る。人の居なくなつた屋敷内では流し台に積み重なる食器が音を立てて崩れ、そっと、彼女を送り出していった。

(2) へんてこな街、へんてこな人々

ロンドンまで連れて来られたモアは、どういう訳かみすばらしいパブの中に居た。

本屋とレコード店の間に挟まれたその店は、実に目立たない構えをしていた。小さな看板が掛かっているだけで、開店中を示すボードも文字が掠れて分かり辛い。

商いをする気があるとは到底思えない様子で、モアもハグリッドに教わらなければうっかり通り過ぎてしまふところだった。

そんな質素を究めたような外観に対して、店内は異様と呼んで差し支えない雰囲気にも包まれていた。

ハロウィン仮装のような高帽子を被った老爺に、ワイン色の長い外套を纏った女性。大して人数も居ない客の大半が、趣味の悪い歩行杖を携えたり、奇抜な編み模様のセーターを着るようなバッドセンスの持ち主で占められていた。

おかしいのは格好のみならず。どこから連れて来たかも分からないくろろを肩に乗せたままコーヒーを啜るような輩まで居たことに、モアは大きく眉を顰めた。

だが更に驚くべきは、その全員が全員、ハグリッドの知り合いらしいということだ。

何故このような怪しい店に来る羽目になったのか、と言えばもちろんこの大男、もとい、この大男に仕事を頼んだ両親の所為である。

モアの家を出たハグリッドは、あまり気の進まないモアを引き摺り、周囲から向けられる好奇の視線を一点に集めつつ、あれよあれよと言う間に彼女をこの場所へと連れて来たのだった。

当のモアはと言えば、ここまで来るともう大人しく付き合う他になんか気がして、最後まで買物に付き合うことを条件としてようやく繋いでいた手を離して貰えた所であった。

ハグリッドは気の良い顔で、マスターらしき男性や客達と二言三言挨拶を交わしながらモアを店の奥へ促していく。途中で品の良いおばあさんが手を振ってくれたが、彼女の帽子から這い出た何匹もの十

メクジが辺りを伝い始めたので、モアは微妙な笑みを返すことしか出来なかった。

そうして、二人は狭い中庭に辿り着いた。四方を高いレンガ塀に囲まれ、掃除用具でも置いておく他に使い道もなさそうな場所だ。

ハグリッドは不審げな表情を浮かべたモアを制して後ろに下がらせると、ゴミ箱の所を起点に、どういう訳か煉瓦の数を数え始めた。

「ねえ。ここ、行き止まりじゃない。何しに来たのよ」

「そんなに急かすな。ちいとばかり待つとれ」

「待てないわよ！ だってこの店の人達つてとっても変なんだもの！

服はとってもださいし、何て言うか衛生的じゃない人が多いみたいだし」

ハグリッドは顔に似合わないピンク色の可愛らしい傘を何処からともなく取り出すと、壁に埋まったレンガの一つを三度叩いて見せた。途端、壁ががたがたと震えだす。

突然の異変に驚いたモアは辺りを見回すと、さっと大男の影に隠れて身動きした。そのうち、壁の真ん中に細い隙間が生まれた。そして、瞬く間に煉瓦は入れ替わり組み換わり、小さな隙間は大きな穴となって目の前に現れる——これは、煉瓦のアーチだ。

「ちよつと、まるでインディ・ジョーンズじゃない！ こんなもの設置するなんて、やっぱりこのパブの店主つて凄い趣味だわ。ねえ、どういうカラクリになってるのかしら」

「あー、いいから、ついてこいや」

煉瓦の継ぎ目をじつと調べているモアを尻目に、傘をしまったハグリッドがアーチの中へと進んでいく。その大きな背中を追いかけるように慌ててアーチを潜り抜けると、モアは先に開けた道の、溢れんばかりの色に目を見開いた。

石畳の大通りが曲がりくねりながらぐんと伸びている。道の両脇には赤、青、緑の……何を売っているのか見当も付かないような店がびっしりと並んでいた。売り子の元気な声が右から左から響き合う。

ふとモアが頭上を見遣れば、そこには通りの名前を記した古い看板が掲げてあった。ダイアゴン横丁。これだけ賑やかな所ならば多少

有名でも良いはずなのに、全く聞き覚えがない。

「買い出しと言ったらこのダイアゴン横丁だ。ここに来りやあ大概のもんはみーんな揃っちゃうぞ」

まず目に付いたのは大勢の人だった。何処から来たのかと思うほど、お年寄りから子供まで性別や人種を問わず多種多様の人間が集まっている。思い思いにショッピングを楽しんでいるのか、みんな山のような買い物袋を抱えていた。ただ一つ問題があるとすれば、この町も先程のパブと同じかそれ以上に訳の分からない格好をした人で溢れていたということだ。

「ぎゃっ!!」

不意に聞こえた叫び声に左を向けば、一人のご婦人が買い物かごの代わりに持っていた大鍋を引っくり返してしまった所だった。中から零れるのは毒々しい色のお菓子や奇妙な形の雑貨、そして乾燥した蛇のような物。

この通りにあるどれもこれもが物珍しく目を引くものばかりで、モアはまるで異国に迷い込んだ気分だった。イギリスらしさの欠片は何処にも見られない。

「下手な観光地より余程賑わってるわね。なあに、まさかここがロンドンで今ブームのショッピング街だ、なんて言わないでしょう?」

「さあな、大体いつもこんな感じだが。それよりモア、リストには何と書いてある」

「リストって?」

「おまえさんに渡した封筒の中に学用品のリストが入つとるだろう」

はつとして思い出したモアはポケットに手を入れ、油染みの付いた封筒を引つ張り出した。移動中ずつと尻に敷かれていたものだから随分とよれて折れ曲がってしまった。散々な扱いを受けている封筒にハグリッドはまた眉を下げた。

モアがすでにぼろぼろ紫の蟬封を割って覗き込むと、中には幾つかの書面が折り畳まれて入っていた。彼女は、そのうち手前側にあった手紙の一枚を取り出すと、興味もないといった風で読み上げてみる。

「ええと、親愛なるクレイズ殿——」

——この度、ホグワーツ魔法魔術学校にめでたく転入を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに必要な教材のリストを同封いたします。新学期は九月一日より始まります。キングズクロス駅九と四分の三番線からホグワーツ特急にてお越し下さい。

敬具

副校長 ミネルバ・マクゴナガル

どうやら、取り出した紙は学用品リストではなかったようだ。街並みに圧倒されてすっかり忘れかけていたが、この横町に来る破目となったそもその理由を思い出したモアは、書類を睨むとぴらぴら振って見せた。

「ざーんねん。この紙、転入許可証だったわ」

「こらー！ そんなぞんざいに扱うもんじゃねえ」

慌てて伸ばされた太い腕を猫の素早さで交わしたモアは、往来の中に駆け込んだ。それからもう一度文面を見返す。転入許可証と云うのは今のモアにとって不機嫌を助長させる存在でしかなかったが、副校長の署名の下にまだ続きがあるのを見つけたので、そのまま読み進めていった。

——また、一年次の未履修授業につきましては、新学期開始後から補習という形で受けて頂きます。二年次の教材リストとは別に、そこから使う教材のリストを同封いたしましたので忘れずに——

「忘れずにご用意下さい、だって、ハグリッド」

「そうか、補習の分も必要になるのか。こりゃあ気付いて良かったな、危うく買い損ねるところだった」

「そりゃあなたにしてみればそうかもね。それにしてもホグワーツだなんて、ふふんっ、変な名前！」

小馬鹿にしたような笑いを漏らしかけて、モアははたと気付いた。不意にとある文字列が頭の中で引っ掛かった気がしたのだ。

モアは嫌な予感を胸に、折り畳み掛けた許可証を開き直した。そして記された文面を冒頭から丁寧になぞろうとする。が、しかし、早くも二行目でその正体を突き止めてしまった。

違和感の元凶は、他ならぬモアが転校させられそうになっている学校の名称だった。

「ねえ、魔法魔術学校」ってなあに」

モアがぼつりと呟いた。静かな怒りを含んだ声に、ハグリッドが首を傾げる。手紙を握ったモアの手が徐々に力を強め、羊皮紙に爪が食い込み、紙面に皺を作り出していく。

「何って、文字通りだが——」

「文字通りってどういうことよ！ わ、私に手品でもやれって言うの!?!」

悲鳴に近い金切り声を上げれば、大男はきよとん、とした様子で目をぱちくりさせた。

「まさか、おまえさん、ご両親から本当に何も聞かされとらんのか?!」  
「はあつ?!」 だから、勝手に話を進められたって言ってるじゃない!

あぐりと口を開け、ハグリッドはもう一度目をぱちくりさせた。それから大きな毛むくの頭に手を突っ込むと悩ましげに、あー、うーむ、と唸り始める。その、自分の方が驚いていると言わんばかりの様子、モアには非常に腹立たしかった。

両親はモアを手品師にするため、そんなことのためだけにわざわざ転校させようとしていたのだ。何が、もっとも必要なことを学ぶため、だとモアは憤った。こんな馬鹿な話があつて良いものか。

モアが許可証を手の中でぐちゃぐちゃに握り締めていると、渋い表情をしてハグリッドが顔を上げた。

「そういう大事なことはもっと早く言つて貰わにや……いや、仕方あるまい。モア、頼むからおれの話を持ち落着いて聞いてくれ」

モアは不機嫌丸出しの三白眼で毛むくじやらを睨み付けた。だが、ハグリッドは怯むこともなくモアに歩み寄る。腰を屈めて視線を合わせると、彼は今日一番の真剣な目をして、子供を諭すように、ゆつくりと口を開いた。



「単刀直入に言おう。おまえは『魔女』だ。そしてここは『魔法使いの町』だ」

「ええと、今、なんて言った？」

「だから、おまえさんが魔女だ、と。勿論、おまえさんのご両親もな」とんでもないことを言い放った大男は、実に平然とした顔でうんうん頷いた。モアは、たっぷり数十秒黙りこくってその顔を凝視した後、再度、再々度と彼の言葉を訊ね直した。

「——嫌よ、嫌ったら、絶対対に嫌！ 私、新しい学校になんて行かないわ、行かないっいたら行かないの！」

「ほーら、言わんこっちゃない！」

モアはハグリッドに引き摺られて銀行のホール内にいた。石造りの建物は広々としており声がよく響く。お陰で行き交う黒い小人達——聞く所によると子鬼という種族らしい——が二人の言い合いを聞き留めて幾度もこちらを振り返った。

よく磨き上げられた大理石の床はつるつると滑って、抵抗したくとも踏ん張りが利かない。大男が振るう力のままにモアの体はホールの奥へと誘導されていった。

「大体、魔法って何なのよ、頭おかしいんじゃないの!? そんなのってゲームのやり過ぎか、ファンタジー小説の読み過ぎだわ！」

「もう良い、とにかく買い物だけは済ませんといかん。ホグワーツに通うかどうかはそれから九月一日までにおまえさん自身で決めるとええ、分かったか！」

「絶対に、分かったりなんか、するもんですか！」

大男はカウンターの一番端に辿り着くと急に立ち止まり、モアはその広い背中へと鼻を強かに打ち付けた。彼は普通の人より頭二つはでかい図体で辺りを見回し、目の合った手隙の子鬼を手招きで呼び寄せた。

「お客様、今回はどういったご用件でしょうか」

「ああ、ここに勤めとるクレイズ氏に会いに来た、この子の父親だ。その後で金を下ろしたいんだが」

「はっ。」

予想外、といった様子でハグリッドの言葉を聞き直した子鬼は、奇怪そうにモアの全身を見回した。一寸眉をしかめるも納得したらしい子鬼は、かしこまりました、と言いつつ奥へと消えていった。

その姿を見送りながら、モアは口を開く。

「そう言えばあの、確か、ここに勤めてるって言ったわよね」

「親父さんのことならその通りだ。今から金庫の鍵を受け取りに行くぞ」

そう、とだけ返してモアは黙考した。

もしかするとこれは巡り巡って来た最後のチャンスかも知れない。ならば、まずはモアが魔法使いなんてばかげた者ではないことを父親に証言させ、それからホグなんたらへの転校を全面撤回させるのだ。

喧騒を掻き分ける様にカウンターの奥から現れた猫背の男は、片手で片眼鏡を目に当て、もう片方の手に持った小さな輝石をじつと見詰めていた。時折、角度を変えながら、複雑にカットされた透明の石を目利きしている。

「あら、父さん久しぶりね。長らく見ない間に少し若返ったみたい。で、これは一体どういうことなのかしら？」

「どうもこうもないよ、もう忙しくて忙しくて」

「そうじゃなくて！」

モアは思わず声を荒げた。だが、父親は意に介した様子もなく首を振って見せる。

「ロシア経由で入って来た宝石に偽物が多く混じっていることが分かってね。二日前から取り掛かっているが、量も多くて大変なんだよ。しかし、これがまたよく出来た美しさで」

「そんな話は聞いてないわ！ 私が聞きたいのはどうしてあなたが、私が、魔法使いだなんて——！」

今にもカウンターを飛び越えて掴みかかりかねないモアを、ハグリッドが羽交い絞めに制する。そんな娘には目もくれず、父親は溜め息を吐いて片眼鏡を下ろすと、胸ポケットから鍵を取り出してカウン

ターに置いた。その小さな黄金の鍵は長い革紐の輪に通してあった。ハグリッドはモアを宥めつつ鍵を取り上げると、失くさないように彼女の首へかけた。モアが嫌がって首を払う。

「じゃあ、私は仕事に戻るから。今後、学費と小遣いはその口座から自由に使ってくれて構わないよ、もう君のものなんだからね。ああ、ハグリッド、後は宜しく頼む」

彼は片眼鏡を取り上げながら確認したように頷くと、それだけ言い残してすぐさま踵を返した。彼の視線は最早、手元の宝石、その中心へと向けられている。その余りにも素っ気なく呆気ない応対に愕然としていたモアは、はつと気付くと慌てて叫び声を上げた。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！　まだ話は終わってないわ、逃げるつもり!？」

その声に引き留められたのか、父親がふと立ち止まった。やつとその気になってくれたらしい。モアはカウンターから身を乗り出して男の言葉を待った。

「……そうだ、転校祝いにペットでも飼うと良いさ。梟か猫か、あー、蛙なら学校に連れて行って良い決まりの筈だからね。ああ、あと薬瓶を買う時は不純物の混じっていない最上等なクリスタル製の物になさい。ルチルなどインクルージョンの入っている物も素晴らしいがね、あれは実用に向かないと昔、君の母さんに怒られた。理由は勿論、分かるだろう。それじゃあ」

「な、なんですって——はぐらかさないですよ！　この、バカ親、石あたま、無責任男、朴念仁!」

いそいそと奥へ戻って行く宝石鑑定士の背中にモアは思い付く限りの罵声を浴びせかけた。それでも引き返して来ようとはしない父親を目掛けて、カウンターの上にあった羽ペンを投げ付けてやったが、それは相手に届く間もなく床に落下してしまった。

石に謎かけるとは正にこのことだ。結局あの男は、手元の石から一度も顔を上げようとしなかったではないか。

「な、なんなのよあのクソジジイったら!」

「おいおい、モア、あんまり親御さんのことを悪く言うもんでねえぞ、

え？ 随分と忙しそうな様子だったじゃねえか。家族なら少しは氣遣つてやらにや」

まあおまえさんの気持ちも分からんではないがな、とフオローにならないフオローを入れながら、ハグリッドは怒りに震える肩をぽんぽん叩いた。

勿論、そんなことで氣の治まる話ではなかった。むしろその言動は火に油を注ぐようなものである。モアはあの男からろくな説明を、否、言い訳すら得られなかった悔しさに俯き、齒を食いしばった。

「なあ、モア」

「……ふん、分かってるわよ。早くお金を下ろして買い物を買ませたいんでしよう」

「ホグワーツは良い所だぞ。おまえさんもきつとすぐに氣に入るさ」

「そういう問題じゃないわ！ 全然違う、あなた全く事態を分かかってない！」

モアはハグリッドを怒鳴りつけて反論したい氣に驅られるも、すぐにそれは無駄なことだと氣付いた。所詮この男は両親の雇われなのだ、雇い主に楯突けるはずもない。

「あなたも父さんもこの人達も。みんな異常よ、とつてもおかしいわ」

ハグリッドはその言葉を意に介す様子もなく、近くで控えていた先程の子鬼を呼び付けた。

「確かに、マグルからすればそうかも知れんがな。だが、おまえさんはおれ達とおんなじ魔法族だ、そうだろう？ ほれ、こやつが金庫まで案内してくれるぞ、後を着いて行こう」

小慣れた様子で歩き出した大男の後に続けば、子鬼が恭しい態度で無数の扉の一つを開いた。奥には松明で照らされた薄暗い暗い洞穴が続いている。

モアにはそれがそのまま、これから待ち受ける自身の人生を暗示している様に思えてならなかった。

### (3) 壁一面の棚

「黒尽くめの制服に、謎の大鍋、父さん好みの薬瓶と他にも色々……で、今度は何なのかしら？ 正直もうたくさんだけぞ」

この魔法界とやらを訪れて、初めこそモアも貨幣単位のややこしい繰り上がりに混乱したり、魔法仕掛けの様々な物に驚かされたりしていた。

だが、横町を行ったり来たりして両腕が荷物でいっぱいになった今では、現金の支払いも何となく具合が分かって来たし、大概の物は顔を歪めて睨み付けるだけで見なかった振りが出来るようになっていた。

「次は教科書だな、量が多くてちいとばかり骨が折れるやも知れんが」  
「つてことは本屋に行くのね。全く、次こそ少しはまともな物が拜めそうだわ」

ただ一つ問題だったのは、ここが魔法使いの世界かと思うと吐き気がするのだが、自分がいま居るのは「テーマパーク風のショッピングモール」だと思えばまだ耐えられないこともなかった。モアは自身の適応力の高さに心の内で涙した。

「さあ、着いたぞ。フローリツシユ・アンド・ブロッツ書店だ」

ハグリッドに背を押されて店の中へ踏み入ったモアは、目の前に広がる光景に圧倒された。店内の壁一面が大きな書架になっており、色も形も様々な本がびっしりと詰め込まれている。

革張りに細工の細かな金箔押しは勿論のこと、表紙がカラフルな寄木細工になっている物や、パズルを解かなければ開けない仕組みなどの凝った装丁を見付けて、モアは僅かに色めき立った。

「おまえさん、何時になく楽しそうだな」

「どれも奇抜だけど、こんなに冴えてるデザインの本って初めて見るわ！ 魔法なんかなくなっちゃって普通に作れそうなのに、どうして誰もこういう物を思い付かないのかしら」

なんだ、まともな物だっちゃんとあるじゃないか。そう思ってたほっとしたのも束の間、近くに平積みされていた本を手にとってモア

は失望した。それは一見するとただのミステリー小説だったのだが、表紙を開いた途端、本がひとりでに喋り出して犯人とトリックについての解説を始めてしまったのだ。

大量の教科書を抱えて並んだレジの傍では、店員と思しき者達が指揮棒のような物を手に慌ただしく駆け回り、何がしかの舞台をがたがたと組み上げていた。その周りでは行列を作るためのロープが張られており、そこここにカメラスタンドが設置されている。店で何かイベントでもあるのだろうか、とモアは辺りを見回し、壁に貼られたポスターに目を留めた。

「このポスター、ええと……わたしはマジックだ”発売記念?”」

「ああ。今日は午後からその本の作者、ギルデロイ・ロックハートのサイン会なんだよ」

斜め後ろから若い男の声がかかり、モアは振り返った。濃紺のエプロンをかけた店員と思しき男は、服の袖で額を拭いながら愛想良く説明してくれた。

「始まるのは十二時四十分からだけど、今はその準備中でね。キミ、ホグワーツの学生さんでしょう。今年の教科書は彼の著作ばかりだから、良かったら後でサインを貰いに来ると良いよ」

「私は……いえ、ありがとう」

私は魔法学校の生徒なんかじゃないわ！ と声を大にして言いたかったモアだが、その店員の余りにも疲れ切った様子を見れば自ずと口は閉じられていた。

モアはもう一度ポスターに目を遣った。大きくプリントされた動く写真の中からは、ちよつと二枚目な男性がまるで映画俳優か何かのようにこちらへ笑顔を振り巻いている。

そのウインクにぐったり来たモアは、隣で教科書の半分を持ってくれている大男の腕を叩いた。

「ね、さっきの話聞いてた? この人ってそんなに有名なわけ?」

「ああ、サイン会だろう。あんな奴よりもっと有名な魔法使いならいくらでもおるさ。例えばダンブルドア——ホグワーツの校長だな。あのお方こそ誰もが認める偉大な魔法使いなのは間違いないね」

大男は納得したように一人でうんうんと頷き始める。誰もが認める、などと漠然としたことを言われた所で何処がどう偉大なのかモアには全く以ってピンと来なかった。が、このロックハートとかいう作家についての言及がないことから、取り敢えず奴が小物であることだけは汲み取った。

「偉大と言えば、〃例のあの人〃もある意味ではそうだったな」

「例のあの人？ それって誰のことよ、勿体ぶった呼び方しちゃって」  
「〃名前を言っってはならないあの人〃とも言う。闇の魔術に取り憑かれたそれは恐ろしい魔法使いだからな、つまりはそういうことだ。おまえさんも魔女になるならこれ位は知っていて損はないぞ」  
「だ・か・ら、私は魔法使いにはならないんだってば！」

その時、前の客の会計が終わってモア達の番になった。

カウンターに全ての教科書を置いた所、授業用と補習用の両方で山積みになってレジ係の顔が全く見えなくなってしまった。その上、ロックハートの著書は他の教科書より割高で金額がかさみ、仕方なくガリオン金貨を使って支払いをした所どうにも損をしたような気分させられた。

「モア。サイン会が気になるようなら、買い物も済んだ後で来てみるか」

「気になるってわけじゃないんだけど、まあ、気が向いたらね」

ずっしりした重みを腕に次の店へ向かう道すがら、ハグリッドが思い出したように口を開いた。

「そうそう、有名と言えばあと一人。忘れちゃいけない〃ハリー・ポッター〃がおるな」

シヨールウィンドウに飾られた光る花束に見惚れていたモアは、その声に慌ててハグリッドの隣へと並び直した。書店で買った教科書一式は相当な量だったが、ハグリッドはその半分以上を片腕一本で抱えてくれている。

「よく考えてみればモアはハリーと同年だったな。ハリーは去年入学して今度二年生になる。モアは二年に編入されるから、ほら、やっぱり同級生だ」

「同じ年なのにその子が有名なのって不思議な感じね。彼は魔法界の人気子役か何かかってこと？」

ちつちつち、とハグリッドが指を振った。彼はたつぷりと含みを持たせた微笑みでもって当ててみると言わんばかりにモアをせっつく。だが、魔法界のトレンドなど知ったこつちやないモアは肩を竦めて先を促した。

「ハリーは生き残った男の子、つまり例のあの人を倒した張本人なんだ」

とつておきのクイズを放棄されてしまったためか、ハグリッドはやや不服そうな顔で答えを明かした。

「あら、例のあの人がってつても恐ろしい魔法使いだったんじゃないの？　なのに子供にやられちゃうだなんて、相当な間抜けだったのね」

「そりやどちらとも言えんな。当時ハリーはまだ赤ん坊だったし、例のあの人が失脚した以上、何が起こったのかは誰にも分からん。とにかく、ハリーもおまえさんのようにマグル達の中で育ったんだがな。今じゃすっかり魔法族だ。そんな訳だから、おまえさんだつてすぐこつちの生活に慣れるさ」

言いながら、ハグリッドはモアの頭を宥めるようにぽんぽんと叩く。

ハリー、ハリー。その名を呼ぶ時、ハグリッドは何処か誇らしげに見えた。

次に連れて来られたのは杖の店だった。こちらも先程の書店同様に壁一面がびつしりと棚で埋め尽くされており、見上げると首が痛くなるのに変わりはない。だがこの杖の店の方が遥かにしんとしていて、思わずかしこまってしまうような空気に満ちていた。

カウンターに掛けていた店主のオリバンダー老人は、モア達が来店すると待っていたとばかりに席を立った。

「いらっしやいませ……ハグリッド、そちらのお嬢さんは？」

「モア・クレイズだ」



「なんと！あのクレイズですか、秘密主義の」

店主は驚いた様子でモアの全身を眺める。それからすぐさま動く巻き尺での腕などの採寸を進めると、壁一面の棚からいくつか細長い箱を見繕ってきた。

「こうしてまたクレイズ家の者の杖を選ぶことが出来るとは、これほど光栄なことはありません」

「杖を選べるのってそんなに光栄なことなの？」

「ええそうですも。魔法使いにとって杖は一生物ですからね。ああ、厳密には杖を選ぶのではなく、杖が持ち主を選ぶのですが」

箱を開けたオリバンダーは、中にしまわれていた細長い棒きれをモアに差し出す。モアは棒切れを受け取りながら、小首を傾げた。

「ねえ、この棒切れ、一体どうしたらいいのかしら？」

「難しいことはない。軽く振ってみればいいだけですよ、お嬢さん。あなたが杖に選ばれた時には火花が散ったり、光が発せられたりと、何かしらの現象が起こるはずですから」

しかし、オリバンダーが持つて来たどの杖を振ってみても、杖先が空を切るばかりでモアの身に何かが起こる気配は全くと言っていいほどなかった。かれこれ三十箱ほど試したが、どの杖もただの棒切れと同じく沈黙を続けていた。

オリバンダーは、壁掛けの梯子を上りながら大きな目玉で棚に収まった箱をぎよろぎよろ見回した。モア達が来店してからというもの、老人はもう散々箱を引っ張り出しては、中に納まっていた棒切れをモアに握らせる作業を繰り返していた。

「クレイズの家系は割合長めの強力な杖に好まれる者が多い。お嬢さんもきつと良い杖に選ばれることでしょうな」

気を取りなすようにオリバンダーが梯子の上から呼び掛ける。だが残念ながら杖の良し悪しなど分からないモアには、いままで握ってきた杖の違いなどは見た目の差異くらいでしか分からないのだった。

オリバンダーは棚のあちこちから箱を引き摺り出すと、それらを抱えたまま梯子を下って降りてきた。

「すまないがハグリッド、場所を開けてくれ」

そう言った所で既に店内は杖の箱だらけであり、人の居所などはほとんどない。仕方なく、ハグリッドはモアの傍を離れると壁際の丸椅子に腰掛けた。オリバンダーは先程までハグリッドが立っていた場所へ、また二十箱ほどを下ろした。

入店してから優に三十分が経っても、モアの杖はなかなか決まる様子がなかった。

すると、それまで隅に座っていたハグリッドが立ち上がって気まずそうな声を上げた。

「モア、オリバンダー。あー、悪いんだが、まだ時間がかかるようならちよいと買い物に出てもいいか」

モアは降ろした箱の開封に取り掛かっていた老人を窺い見る。

「おじいさん、これ後どれくらいかかるの？」

「杖次第だから何とも言えませんな」

「だって。私は構わないわよ、行ってきたら」

モアとしても丁度、この延々と棒切れを握ったり放したりする作業にハグリッドを付き合わせるのが申し訳なくなってきた所だった。ハグリッドは胸を撫で下ろすと、眉を下げて見せた。

「そうか、すまん。今年は畑に大量のナメクジが湧いてなあ、丁度強力な駆除剤が欲しかった所なんだ」

ナメクジと聞いて思わずモアは顔をしかめた。最初のパブで見掛けたおばあさんの様子を思い出してしまったのだ。帽子の中からはとぼととナメクジが零れ落ちる様は忘れようにも忘れがたい。

ハグリッドが店を出た後、モアは先程の二十箱を握る作業に向き直った。このまま杖が見つからなければ、自分が魔法使いじゃないと証明できるかもしれない。そう考えれば、自ずとやる気も出るというものだ。

十八箱目、十九箱目、さらに二十箱目も合わなかった。オリバンダー老人はうむうむ唸りながら店の奥へと入っていき、それからしばらく戻ってこなかった。

老人が店の奥へと消えて何十分経っただろうか。オリバンダーは、今まで見た中でもとびきり古そうな五箱を抱えて戻ってくると、これ

が最後の心当たりだとモアに告げた。

一箱、二箱、三箱目までは駄目で、杖は手にしてすぐにオリバンダーに取り上げられてしまった。残りは二本。モアは思わず生唾を飲む。「モミノキ、一角獣の尻尾の毛、三十センチメートル。軽くて振りやすい」

そう言っただけで差し出された杖は漆喰のように真っ白で、素朴だが優美な曲線を持つ一品だった。手にすれば羽根のように軽く、これまでのどの杖よりもすつと指に馴染む感覚があった。

店内はしんと静まり返っている。モアは息を呑んだ。促されるままゆっくりと白い杖を掲げ、宙へ弧を描くように振るってみる。すると――

――オリバンダーが、実に勢い良く両手を打ち合わせた。

「これだ、この杖で決まりです！」

断言するなり杖を奪い取り、怖ろしい素早さで元の紙箱にしまっていく。それから丁寧に包装紙を巻いてカウンターへ置くと、モアを手招いた。どうやら会計がしたいらしい。

そこではつとしたモアは、慌ててオリバンダー老人に詰め寄った。

「決まりつてあなた、何も起きなかったじゃないの!?! 本当なら火花が散ったり光が飛んだりするんでしよう!?!」

「いいえ、これです。あなたにはこれしかない」と杖利きの目が言っている」

「やめてよ、嘘でしょう。私、杖なんて欲しくないんだってば！」

何度訊き返してもオリバンダーはこの杖だと言い張って聞かなかった。モアにはそれが、魔法使いでないモアを無理矢理魔法使いにするための策略としか思えなかった。

杖店でハグリッドの帰りを待ちながら、モアは自分が困い込まれつつあることに危機感を覚えていた。買いた物がほとんど終わった今では、このまま両親の望み通りに魔法使いとやらへの道を歩まざるを得ない状況に陥っている気がしてならなかったのだ。

しばらくして戻ってきたハグリッドは、何があったのか鼻を膨らませていた。

「ハリーの奴が、ノクターン横丁なんぞにおったんだ！ 全く危ないところだった」

モアはハグリッドをどうどうと宥めながら、子細を聞き出す。

なんでも、先に話に上った魔法使いで一番有名な男の子が、魔法界で一番危険な街をうろついていたというのだ。そこを見つけたハグリッドが、その男の子の首根っこを掴んでダイアゴン横丁へ引っ張り戻してきた、ということらしい。

「俺がナメクジ駆除剤を買いに行かなかつたらどうなつてたことか！

考えただけでも恐ろしい！」

「ぶ、無事だったのなら良かったじゃない。ねえ、そんなことよりペットシヨップに行きましょうよ。私、可愛いペットが欲しいわ」

どうにかハグリッドの気を逸らそうと、モアは上目遣いでねだってみる。この大男は凶体がでかいだけあって、ちよつと語気を強めただけでもかなり怖く見えたのだった。

ハグリッドはまだぶつくさ文句を言っていたが、今度はモアが腕を引っ張ることで、なんとかオリバンダーの店先から引っ張り出すことに成功したのだった。

#### (4) 猫と喧嘩と／旅立ちの朝

その後訪れたペットショップを出てからは、モアはすこぶる上機嫌だった。

ハグリッドは先程からくしゃみやみをしてばかりで、ろくに言葉を発することが出来ていない。残り少ないティッシュペーパーのやりくりに忙しいお陰か、生き残った男の子への憤りはさっぱり何処かへ飛んで行ってしまったようだった。

「なあ、その子猫は、ぶえつくし！　どうにか、へつくし！　ならんのか！」

モアはにんまりと荷物でいっぱいレンタルカートを覗き込んだ。「ならないんじゃないかしら。だって今日から私の家族なんだもの。ねえ、ブーティ？」

黒い子猫はお腹が落ち着いたのか、キャリーの中ですっかり体を丸めている。綿のように真っ白な鼻先も、今は同じ色をした前脚の下だ。

先程ペットショップを訪れたのがちょうどお昼の時間で、モアは店員の厚意から一匹の靴下猫に餌をあげる機会を得た。そこで指先をふんふん嗅がれるうちにこの人懐っこい子猫を甚く気に入ってしまった、自分の家族として迎えることにした、という次第だ。

「そんなにくしゃみ続きじゃ、神のお恵みがいくらあっても足りないわね！　うふふ！　あ、この子を起こしたらかわいそうだから、くしゃみはなるべく静かにしてね」

「そんなこと分かつとる。くそう、目までかゆくなってきおった！」  
そう。だから別に、この大男が猫アレルギーだと聞いて当て付けに猫を買ったということではないのだ。あっても、それはモアが購入を決めた気持ちのうちの、ほんの二十パーセント少々しかなかったはずだ。

「フローリッシュ・アンド・ブロッツつてもうすぐよね」

「なあ、モア。例のサイン会には、へつくし！　長居せにやならんのか！？」

「ううん。別に興味があるわけじゃないもの。様子だけちらつと覗いて、すぐお開きにしましょう」

モアとしても、そろそろこの大男を連れ回して連射砲のようなくしやみを聞くのに飽きてきた……もとい、不憫になってきたところだった。そしてそれ以上に、早く家に帰って新しい家族のために色々設えてやりたかったのだ。

横町の石畳を進むにつれて、じわじわと黒山のような人だかりが近づいてきた。

フロリーツシュ・アンド・ブロッツ書店から溢れ出た人々が道端を大きく占拠している。大きなフラツシュが時折瞬くそこは、先ほどの準備段階と比べてもすっかりサイン会の会場に変貌していた。

ハグリッドが、首を伸ばしていたモアの背中をばしばし叩く。

「ハリー、ぶえつくし！ ハリーがおるぞー！」

そう言っ指差された方向をモアも見詰めてみる。が、モアの背丈では当然、店から溢れ出た色とりどりの背中しか見えない。

すると、ハグリッドが子犬でも拾うようにモアを腕に抱え上げた。驚いて声を上げるモアを肩に座らせ、それから彼は再び店内の方向を指差す。

モアはもじやもじや頭へ必死にしがみ付きながら目を凝らした。

顔は良く見えないが、黒髪眼鏡の男の子がなにやらハンサムな男性と一緒に写真を撮られている。拍手で沸き上がる会場の様子をなんとか数秒間凝視した後、モアはギブアップとばかりにハグリッドの右肩をタップした。

「ありがとう、もう降ろして貰えると嬉しいわ！」

「もういいのか。遠慮せんでもいいぞ」

「いいの、十分だからお願い降ろして！」

ハグリッドはモアの腰を掴むと、渋々といった風で地面に降ろしてくれた。やっと地上に返ってきたモアは大きく息を吐く。

「わ、私、肩車なんて初めてされたんだけど……すつごく高いのね。逆さまに落っこちるかと思ったわ」

「あんなもん、しつかり支えてりや落ちやせん。それより、おつと不味いぞー！」

言うなり、ハグリッドは書店の人ばかりに向かって一人で突進していった。シヨベルカーのような手が集まった人々を物凄い勢いで掻き分け、道が出来ていく。

ハグリッドが割り込んだ直後、人の波がさつと広がって、中から男性が転がり出てきた。それは赤毛の男性で、唇から血を流しているようだった。その様子をプラチナブロンドの男性が何やら見下ろしているが、彼の目元にも青痣が出来ている。どうやら店の中で喧嘩があつたらしい。

プラチナブロンドの男性は、赤毛の女の子に何やらぼろぼろの本を返すと、家族と思しき少年を連れて颯爽と店先を出ていった。

ハグリッドは赤毛の男性を立たせ直すと、男性が羽織っていたロブをほとんど吊るし上げる形で綺麗に着せ直そうとした。

「アーサー、あいつのことは放っておかんかい」

「分かっている。分かっているが度し難いこともある」

モアは赤毛の一団と黒髪のハリー少年、それからもじやもじや頭の女の子とその両親と思しき二人が店から出て来るのを眺めていた。ハグリッドはとぼとぼと帰路に就く彼らを途中まで見送りに行き、それからモアの所へ戻ってきた。

「待たせてすまんかったな、モア」

「いいのよ。私達も後は帰るだけだったんだし。それより喧嘩は大丈夫だったの？」

ハグリッドは困ったようにちよつと肩を竦めて見せる。

「大丈夫といえば大丈夫だ。仲の悪さはいつものことだもんでな」

それから、とびきりの失敗をしたとでも言わんばかりに大きな声を上げた。

「それより、しまった！ あいつらにモアを紹介するのを忘れとつた！」

「そんなことなら構わないわよ。元より転校するつもりなんてないわけだし」

モアがそう告げると、ハグリッドは残念そうに肩を降ろした。

「まだそんなことを言つとるのか。そんなに魔法界が気に入らないか、えっ?」

「気に入らないのは魔法界というよりもうちの両親ね。魔法使いだつて話にも納得はいつてないけど、あの人たちがもう少しちゃんとしてくれていたら、こんなに拗れることもなかったはずだわ」

それを聞くとハグリッドは押し黙った。モアと両親の間にあるわけかまりは、今日会ったばかりの他人であるハグリッドには到底分かりつこないことだ。それが分かっているからこそ、何も言えなくなつてしまったのだろう。

「だから今日一日案内してくれたハグリッドには悪いけど、私はぎりぎりまで転校には断固反対を表明し続けるわ」

「……俺が思うに、モアの親御さんはお前さんのことをちゃんと考えてくれているぞ」

「そうね、そうなのかも知れないわ。でも結果的に私の意見は無視されるのよ、いつもね」

それからロンドンを去り、家に帰るまでの道中、二人の口数はめつきり少なくなつた。ハグリッドは荷物のお半を持って家まで送ってくれたが、上がつてお茶を飲むように勧めても、畑のナメクジ駆除があるからと誘いを断られてしまった。

モアはハグリッドに言われた通りホグワーツ行きのお荷物の用意だけは済ませて、それからブーティのケージに歩み寄つた。

ケージの中で眠る子猫は、安らかにお腹を上下させている。ケージの置かれた床に屈み込んだモアは、子猫の様子を静かに眺めながら膝の上に頬杖を突いた。

「あなたは今日から私のたった一人の家族。ねえブーティ、あなたにもきつとお父さんやお母さんが居たのよね。小さな頃に家族がいな寂しさは私にもよく分かるわ。これからは二人で仲良くしましよ  
うね」

声が聞こえているのだろうか、子猫は少しだけ身動きして顔を前脚で擦つた。眠たげなその仕種にモアはくすりと笑みをこぼす。



「そろそろ夕食の支度をしなくちゃ。あなたのご飯も用意しないからね、ブーティ」

なるべく足音を殺しながらキッチンに向かい、子猫用のウエットフードを皿に入れる。ケージに戻ってそつとブーティの鼻先に置くと、暫くして餌の匂いに気付いたように子猫が目を開けた。

寝ぼけ眼でゆっくり起き上がると、ブーティはそのまま餌皿に頭を突っ込み始めた。むしゃむしゃと餌をむさぼる姿を見ていると、モアの胸に温かいものが込み上げてくる。

「そんなに急いで食べなくてもいいのよ、誰も取り上げたりなんてしないから。でも回数を分けて少しずつ食べましょうね」

ペットショップで店員に言われたのは、子猫のうちには胃袋が小さいから、一度に量を食べさせるのではなく、何回かに分けて餌を与えるようにということだった。

ブーティが成猫に育つまでのしばらくは、世話で忙しくなることだろう。転校のことを考えると憂鬱な気持ちになるモアにとって、これはうってつけの気晴らしに思えた。

「ねえ、ブーティ。私、やっぱり転校なんてしたくないわ。でも分かっているの、もう転校を取りやめるのは無理だって。どんなに意地を張っても、結局はあの人たちの思い通りになるしかないのよ」

モアは、グリーンゴッツ銀行で会った時の父親の様子を思い返す。

モアの両親はどちらも仕事一筋の人間だが、母親よりは父親の方がまだ物腰が柔らかいこともあり、モアは彼ともっと上手く渡り合えると思っていた。それが、ことこれに関してはある有無を言わせない態度だったし、モアも思わず頭に血が上ってしまった。大きな手落ちは悔やんでも悔やみきれない。

「ああ。魔法使いだなんて、馬鹿馬鹿しいわ！ 一体どうしたらいいのかしら」

それからモアは、ブーティが餌皿を空にするまでケージを眺めていたが、いくら悩んでも良い解決策は浮かばないのだった。

\*\*\*

これはきつと両親の陰謀だ！

モアは心の中で絶叫した。もしそうでないのなら、こんなふざけた出来事はどう考えたってあの毛むくじやらのハグリツドの仲間の仕業に間違いない。それ以外に考えられない。

朝、いつもより遅く目を覚ましてしまったモアは、身支度を済ませるといつものように新聞を取りに玄関先へ向かった。家の中の誰もを読まない物だとはいえ、毎朝欠かさず届く物をポストに溜めつ放しにしておくのは良くないからだ。

今日もこんがり黒いトースト片手に廊下を渡り、鼻歌交じりで扉を開け――途端、爆発的な騒音が耳に飛び込んできた。あまりの騒々しさに危うくトーストを手放しかけ、そして目を見開く。

扉を開けた先、どういう訳かそこは人の往来も激しい、見知らぬ駅のとど真ん中へと繋がっていた。

かつちりとスーツを着込んだビジネスマンが、モアには目もくれず前をかつかつと通り過ぎていく。向こうからは中国系旅行者と思しきおばさんの集団が、喧しい笑い声を上げながら歩いてきた。その騒がしさに掻き消されそうになりながらも、放送のアナウンスは毅然と三番ホームに列車の到着を告げている。

モアは啞然とした。

何処もかしこも老若男女入り乱れ、見渡す限りの人、人、人。まだ朝早い時間に程近いというのにこの混みようは何だろうか。いや、それより、この扉はどうなっている。

モアは唐突に二週間前の買い物と、おかしな入学許可証のことを思い出して青褪めた。

まさかの思いで慌てて玄関扉を鍵まで閉めてリビングに駆け戻る。一鳴きして近づいて来たブルーティを踏みつけないよう飛び越え、モアは脇の壁に目を向けた。

パッチワークの壁掛けに並んだカレンダーは八月、夏の爽やかな青空を描いた絵のままである。モアは小さく悲鳴を上げると、その一枚を破り捨てて床に叩き付けた。遊んで貰えるものでも思ったのかブルーティがさつと紙にじゃれつく。

顔を上げて新しいページを睨むと、ボールペンでぐるぐると赤丸が

殴り書かれた忌々しい日付が目には飛び込んだ。実りの季節を描いた稲穂の中でかかしが嘲笑うような笑みを浮かべている。

そう、今日は九月一日。忘れもしない転校の日だ。

「だからって、こんなのって有り得ない！」

しばらくの間、モアは苦々しげに唇を噛み、こぶしを握る力も強く敵意の籠った視線を壁の一点に向けていた。だが、はっと思い立つと彼女はよろけながらテーブルをかわして窓辺に走った。

玄関が駄目なら窓があるじゃないか。

大きな期待を込めて窓の棧に手を掛けるも、半分も開けないうちにすぐさま絶句する羽目になった。窓から覗く見馴れた住宅街の景色は、窓を開いた部分だけ駅舎の中に切り替わっていたのだ。

座りなれた椅子の隣にへたれ込むと、モアは文字通り頭を抱えた。転校からどうにも逃れられないどころか、これでは家からも出られない。

誰の仕業かは分からないが、余りにも周到すぎる。犯人はとてつもなく頭の良い人物か、あるいはとてつもなく性格の悪い人物のどちらかだとモアは感じていた。

目に見えて落胆したモアの元に、ブーツィが擦り寄ってくる。

子猫はふみやつと鳴いて、白長靴の足先をモアの膝に乗せた。まるで慰めるようなその仕草に、モアは頭を振りながら身体を撫でてやる。

手にしたトーストはすっかり冷め切っていた。力なく端を噛っていると、気持ち良さそうに喉を鳴らしていたブーツィがまた一鳴きする。先程とは少し様子の違う声にモアは子猫と顔を見合わせた。そのまま瞬き三回。そしてブーツィは不意に目を逸らすと、半端に開いたままだった窓の外を見つめた。つられてモアも外を見る。

相も変わらず、窓向こうの駅——恐らくキングズ・クロス駅——は多くの人でごった返していた。よく見ると、家族と思しき賑やかな集団があちらこちらに見られる。その中にはカートを押す年代か、それ以上の子供達の姿が多く混じっていた。

もしかしなくても、彼らはこれから列車に乗り込んで、あのホグな

んたらという妙な学校へ行く所なのだろう。一人一人の期待に胸を膨らませた楽しそうな顔を眺めながら、モアは夏休み前にクラスの友達が開いてくれたお別れ会のことを思い出していた。

あの時のモアはまだ何も知らず、ただ寂しきで転校を拒絶していただけだった。

でも、きつと今は違う。

突然、両親は魔法使いでお前も魔女だ、なんて馬鹿みたいな話を知らされ、だから転校して魔法を学ばなければならぬなんて、そんなゲームやコミックのような展開はずっとあり得ないと思っていた。けれど、モアは実際に毛むくじやらのハグリッドと出会い、よく分からない不思議で溢れかえるダイアゴン横丁に引つ張り出され、生き残った男の子と呼ばれるハリー少年の顔も拝んできた。魔法界の片端をしつかり覗かされてきたのだ。

だが、モアはまだ、自分が魔法使いだときつちり認めた訳じゃない。だからこそ、嫌なのだ。

普通の転校だったらまだ解った。でも訳も分からず勝手に話を進められ、今日だつてわざわざ家と駅を繋ぐような真似までされて、決められるがままにあんな変な奴らの仲間入りをさせられるのは、そんなのは絶対に嫌だった。

不意に泣きたくなつたモアは、くすん、と鼻を一啜りしてから鼻頭を擦った。

ブーティが、どうするんだと言わんばかりにモアを見つめている。けれど大丈夫だ。答えは、もう決まった。

モアが立ち上がって振り返ると、何故カリビングの入口にハグリッドの言いつけでまとめておいた荷物の山が転がっていた。物置にしまつて嚴重に鍵まで掛けてやったはずなのに、どういうことだろう。

これも、玄関と駅を繋げた奴の仕業だろうか。だが、気持ちを固めたモアにしてみれば、今更どちらでも良いことだった。

モアはマーガリンを吸い込んですっかり湿気たトーストを食い干切る。もしかするとこれで最後になるかも知れない慣れ親しんだ焼き加減を、しつかり奥歯で噛み締め、それから声を上げた。

「おいで、ブーティ、出掛けるよ」

パンくずのついた両手を払いながら、唯一の家族の名を呼ぶ。賢い黒猫は全て分かったように駆けてくると、自ら大人しく床のキャリーバッグの中に収まっていった。

その様子を見届けたモアは、一人で運んで行くにはいささか重量のあり過ぎる荷物を担ぎ、キャリーバッグを片手に下げ、リビングをずんずん横切って窓の前に立った。

ちよつと振り返って、静けさの澄み渡る家の中へ向き直る。改めて見ても、ほとんどの時間を一人で過ごすには随分と広い家だったと思えてくる。

「誰の仕業だか知らないけれど、お望み通りそのホグ……とかって奴に行つてやるわよ。そしてそこで、そんな訳の分からない学校が、私には全くもって必要ないってことを絶対に証明してやるんだから！」

決意に満ち溢れた表情と対照的に、モアが鞆を握り締める手元は僅かばかりの不安で震えていた。それでもモアは、これまで育てきた家に背を向けて、窓の外のキングズ・クロス駅へ一歩踏み出すと、もう、それ以上振り返ろうとはしなかった。

## 苦闘の幕開け

### (1) ホグワーツ特急

山盛りのカートに片手を乗せて、モアは困ったように周囲を見回す。決心して駅にやって来たまでは良かったはずだが、肝心のホームが見つからないのだ。

入学許可証の語感から、九番線と十番線の間にあることは辛うじて汲み取れるが、当のホームに赴いてみてもそれらしき場所は見当たらない。お陰でもう、かれこれ三十分は立ち往生を続けている。

一介の駅員に場所を訊ねた所で辿り着けるとは到底思えないが、誰かに聞かずに辿り着けるとも到底思えない。かといって、うっかり普通の人にそんなことを訊ねれば、怪しまれるか、頭がおかしいと思われるか——いずれにしても良いことは起こり得ないだろう。大きな荷物を抱えてここで長々と立ち尽していることですら十分怪しいというのに。

奇しくもその嘆きは的中で、駅員はそろそろモアを不自然に感じ始めたらしく、時折窺うような視線を送って来ていた。

それにしても九と四分の三番線とは随分ふざけた名前だ、区切り良く二分の一じゃない辺りがどうにもいやらしい。先程からホグワーツへ行くのだろう子供や見送りに来たらしい者達の姿をこの辺りでよく見かけるものの、追い掛けても気付くと皆ふつつり消えてしまっている。

声を掛けてみれば良いだけの話だが、万が一違っていたらと考えると恐ろしくてとても出来なかった。こうして彼らが消失すると思われるポイントで、じつと状況を観察する他ないのが現状だった。

駅の時計は十時四十分を指している。荷物を積む時間を考えても列車の出発まで余り時間はない。このまま乗り遅れたらどうなるのだろうか。あるいは、上手く行けばあの奇妙な学校に行かなくて済むようになるかも知れない。

けれど。

「みやあお」

そこまで考えてモアは頭を振る。そうだ、逃げては駄目なのだ。自分が魔法使いなんておかしな人種ではないということを、きっちり証明に行かなくてはならない。けれど、どうすればいいのかモアには全く分からなかった。

小さな黒猫は、退屈そうにキャリアバッグの中で寝転がっている。その呑気な様子と対照的に内心の焦りを加速させていると、また、一つの家族が目の前を通り過ぎて行った。

「見送りはもうここまでで良いわ。カートありがとう」

両親と気の強そうな女の子の三人組。鉄柵の前で立ち止まった女の子は、ホームの真ん中で両親と二言三言交わし合う。モアは憮然とした面持ちでその様子を眺めていた。

すると、両親と別れを告げたばかりの女の子が、カートを置いてこちらに向かって歩いてきた。ちよつと潰れた鼻が愛嬌を誘う顔立ちだ。

女の子はモアを頭の天辺から足の爪先まで見回すと、つんと澄ました様子で口を開いた。

「あなた、もしかしてホグワーツ？」

「ええ、そうだけど……どうして？」

「こんな所で何分も立ち止まってるような子なんて、ホグワーツの新入生以外に居ないわよ。来て、九と四分の三番線ホームへの行き方を教えてあげる」

女の子はそう言うと、わざとらしくゆつたりした歩調で鉄柵の前に戻った。置いてあったカートの取っ手を掴んで方向転換すると、大きく息を吐き、猛然と柵に向かってカートを押し始める。

「ちよつとあなた、何してるのよー」

モアの悲鳴を聞きとめる様子もなく柵に突っ込んだ女の子は、次の瞬間には荷物ごと柵に吸い込まれるようにして姿が見えなくなってしまう。

何が起こったのかしばらく理解出来ないうたモアだったが、モアの知る常識で計り知れないことが起こるのが魔法界だったと思い出

すにつれ、段々と得心がいくようになった。

つまりは柵に見えるものが実は見えない抜け穴になっているのだ。モアは大きく深呼吸をして自分のカートの持ち手を握り直すと、さっきの女の子が消えていった柵を見据える。それから二、三步助走をつけ、柵に向かって力一杯カートを押しした。

思わず目を瞑ってしまったモアだが、いくら待っても柵に激突する衝撃はやってこなかった。カートを押す速度を緩め、ゆるゆると目を開ける。

柱を抜けた先は、想像できないことに、ちゃんとプラットホームが広がっていた。

煙を上げる美しい真紅の列車が止まっており、方々で子供たちが乗り降りをしている。ふくろうや蛙、猫といった賑やかな鳴き声、人々のお喋りの合間に響き渡っていた。振り返ると改札口のあった場所には九と四分の三番線と書かれた鉄のアーチが掲げられており、隣を見ると先程の女の子が得意げな様子で腰に手を当てていた。

「どう、簡単でしよう?」

「こ、こんなの分かるわけないわ、柵に突進しろだなんて!」

「簡単に分かったらマグルが紛れ込むじゃない、当然の措置よ。こんなことも分からないなんて、あなた、まさかマグル生まれじゃないでしょうね」

女の子は、息を切らせているモアを穿った様子で覗き込む。

「違うらしいわ。聞いた話だと、両親とも魔法使いだって」

「なら良いけど。私はパンジー・パーキンソン、あなたの名前は何?」

「モア・クレイズよ。さっきは教えてくれてありがとう」

すると、パンジーと名乗った女の子は、驚いたように目を丸くした。

「クレイズ? クレイズってあのクレイズなの?」

「あなたが言うのがどのクレイズかは分からないけど、私は正真正銘のモア・クレイズよ」

パンジーは驚いた様子でもう一度モアの全身を眺め回したが、しばらくくしないうちに嬉しそうに表情を緩めた。

「なんだ、そうなの! そういうことは、もっと早く言いなさいよね」



「ねえ、パンジー。あなた、私の家のこと知ってるの？」

「知らない人の方が珍しいわよ。だって魔法界では一、二を争う旧家だもの。血を重んじる閉ざされた家系として有名よ」

「閉ざされた家系？」

「その話はあとで良いわ。時間もあまりないし、取り敢えず列車に乗り込みましょう」

二人は列車の手近な戸口から乗り込み、車内に荷物を引き上げようとしたが中々上手く行かなかつた。すると、近くにいた小柄なアツシユブロンドの男の子が、トランクを下から押し上げて手伝ってくれた。キャリーバッグの中のブーティは、手荒な扱いを非難するように鳴き声を上げた。

どのコンパートメントも子供たちがみっしり座っており、二人は開いている座席を探すのに苦労した。だがようやく列車の後ろよりのコンパートメントに開いている場所を見つけたので、モアとパンジーはそこに収まることにした。

「私ね、実は新入生じゃなくて転校生なの」

モアは、新入生と間違われたままだったことを思い出し、座席に着くなりそう切り出した。他の生徒たちに倣ってブーティをキャリーバッグから出してやると、可愛い子猫はやつと解放されたともいうように大きく伸びをしてから座席の隅に丸まった。

「転校生ですって？ 何年生に編入されるの」

「二年生よ」

「二年生なら同じ学年だわ。なんだ、同い年じゃない」

「本当に？ なら私達、きつと仲良くできるわね！」

「そうね、グリフィンドール以外に組み分けされたらね」

聞きなれない単語が出てきたことに、モアは目をぱちくりさせる。思わず聞き返すと、パンジーは愕然とした様子であんぐりと口を開けた。

「ホグワーツの寮の一つじゃない！」

「ごめんなさい、そういうの全然知らないの。私、魔法のない世界で育ったから」

それを聞いて、パンジーは悩ましげに腕を組んだ。

「じゃあまさか、今の今まで自分が魔女だったってことも知らなかったっていうの?」

「そうよ、全部つい二週間前に知ったばかりなの」

すると、パンジーは言葉を探しあぐねたように唸りを上げた。

「ええと、なんて言うか……さすがは秘密主義のクレイズだわ、身内にだって徹底しているのね」

「その秘密主義って言うのは何なの? 前にも一度言われたことがあるんだけど」

ふうつとため息を吐いてモアは尋ねる。前に杖選びのオリバンダー老人が秘密主義と言っていたのを聞いて気になっていたのだ。

パンジーは腕組みを解くと、居住まいを正して言った。

「クレイズはね、長いこと社交界でも家名を隠してきた一族なの。誰が一族かは一族にしか分からない。そうやって安易に擦り寄る輩を近寄せないことで家格を守り続けてきたのよ。ここ数代はそれも止めていたみたいだけれど」

「どういうこと?」

「ここ五十年余りは積極的に家名を明かしていたのよ。あなたのお母様、それからお祖父様はホグワーツに入る時から既にクレイズ姓を名乗っていたらしいわ。特にあなたのお祖父様の時は反響がそれともう凄かったそうよ」

「あなた、私よりも私の家について詳しいのね! 出来ることなら色々教えてほしいわ!」

モアが思わず称賛を込めてそう言うと、パンジーは得意満面になって口元を緩めた。

「魔法界に住む魔女として当然の知識だわ。あなたこそ、そんなに何も知らないなんて大丈夫なの?」

「どうかしら。大丈夫だと良いんだけど」

それからのモアはパンジーを質問攻めにすることで大半の時間を費やした。魔法界に馴染もうとするつもりはなかったが、何も知らないことで馬鹿にされるのを避けたい気持ちの方が強かったのだ。

パンジーの方も満更ではないようで、胸を張りながら様々なことを教えてくれた。

ホグワーツ魔法魔術学校の創設者と四つの寮のこと、特にパンジーの所属するスリザリンとグリフィンドールの仲が悪いという話。パンジーが一年生の時に受けた不思議な魔法の授業のこと。魔法界でメジャーなクイディッチと呼ばれるスポーツのこと。子供達に大人気のいたずらグッズのこと。魔法界で有名な家名や人物のこと。

お昼過ぎに車内販売が来たときは、魔法界のお菓子についても色々教えてくれた。モアはパンジーの勧めに従って、バーティボッツの百味ビーンズ以外のお菓子を一つずつ買うことにした。膝の上が大量のお菓子で埋め尽くされたが、今すぐ全部食べずとも毎日少しずつ食べれば良いと気にしないことにした。

パンジーは持参したランチを食べ終えると、身体に着いた食べかすをぱたぱたと叩き落として立ち上がった。

「さて、私、ちよつと他の車両に友達を探してくるわ。返したい雑誌があるの」

「そう、行ってらっしゃい。私はここでさつき買ったかぼちやのパイを食べてるわね」

「遅くてもホグワーツに着く前には戻って来るわ。それまでゆっくりしていて」

「ええ。ありがとう、パンジー」

モアは手を振ってパンジーを見送ると、かぼちやパイの包み紙を剥がしにかかった。パイの焼き加減はモアの大好きな真っ黒焦げではなかったが、一口かじるとかぼちやの甘さが口に広がって幸せな気分になった。

それからというものの、モアは他のお菓子を食べたり、バーティを撫でながら外を眺めることで時間を潰した。列車に乗った当初はのどかな田園風景が続いていたが、次第に景色は荒れ果てた木々が鬱蒼と生い茂るさびしいものになっていった。

魔法学校とやらはどれほど遠いのだろう。学校にこそまだ到着はしていないが、モアの過剰してきた日常からはもう随分と遠く離れた

場所に来てしまった気がする。

初めこそ以前ダイアゴン横丁でそうしたように、全てがテーマパークの出来事だと思つてやり過ぎそうとも思っていたが、パンジーから話を聞いているうちに、全てが現実のものなのだという実感が湧き上がってきていた。

パンジーは魔法界にやってきて出来た初めての友達だ。ちよつと得意になる所はあるけれど、親切にモアに色々教えてくれたのは本当だ。

こうやって新たに良い友達ができるなら、案外魔法界も悪くないかも知れない。そんな考えが一瞬脳裏を過つて、モアは慌てて頭を振つた。

「何を考えてるの私！ 友達が一人出来たくらい何よ！ 私は魔女なんかじゃないって証明しなくちゃいけないのに」

「誰が魔女なんかじゃないって？」

不意にコンパートメントの扉が開き、隙間から鮮やかな赤い頭が飛び出してきた。彼は座席を一瞥すると、大げさな溜め息を吐いて見せた。

「おいおい、ロニー坊やはこのにも居ないようだぜ」

その声に応じて同じく赤い頭がその上から飛び出すと、そっくり同じ顔が縦に二つ並んだ。二人はコンパートメントを覗き込んでぐるぐると周囲を見回す。

「プリンセス・ハリーも見当たらないしなあ……つまり僕らを残して二人で駆け落ちしたってことかい!？」

「そんな！ 我ら忠実な従者がこれほど探していると言うのに！」

「おお我らが弟め、なんと残酷な仕打ちを！」

壮絶な二人芝居に釘付けになっていると、赤毛のうち後から頭を覗かせた方とモアはぼつちり目が合ってしまった。

「おっと、こんな所に真正正銘のプリンセスが！」

「えっ!？」

二人が扉を跳ね除けてコンパートメントに飛び込んでくる。その勢いにびつくりしたブルーティが座席から飛び降り、扉の隙間から車内

の後方へと逃げて行った。

「やあ、プリンセス！ 突然だけど生き残った男の子を見かけていないかい？」

「生き残った男の子にはもれなく、こーんなひよる長の赤毛の坊やが一緒のはずなんだけど」

同じ顔の一人が、もう一人を指差して言った。

「生き残った男の子ってあれよね、ハリー・ポッター君のことよね？ 見てないわ」

すると、双子の片割れが近寄ってきて、首を捻りながらモアの顔を覗き込んだ。

「なあ、彼女、どっかで見た顔だぜブラザー」

「ああ。もしかして、フローリッツシュ・アンド・ブロッツでハグリッドと一緒にじゃなかったかい？」

モアはきよとんとしてダイアゴン横丁での買い物を思い返す。間もなく、書店で赤毛の一团を目撃した記憶がまざまざと蘇ってきた。

「サイン会の時なら居たわよ。あなた達、もしかして喧嘩の……？」

それを聞いて、奥にいた双子の片割れがぱちんと指を鳴らした。

「ジョージのご明察！」

「親父の喧嘩のことは忘れてやってくれ。本人も多分反省してるはずだからさ」

ジョージと呼ばれた方が、肩を竦めながらそう言った。名前の分からないもう一人は、もう一度モアの顔を覗き込んだ。

「君、ホグワーツでは見かけたことない顔だけど、もしかして新入生って奴かい？」

「あー、新入生って言うより、正しくは転入生ね」

「わお、何だって!？」

「マジかよ、そいつはラッキーだ!!」

二人は何故かハイタッチを決めると、それぞれモアの前と隣の座席へと滑り込んだ。

「何年に編入されるんだい」

「二年よ」

「つてことはロニー坊やと同じ年かよ、羨ましいぜ！」

名前の分からない方の少年が芝居がかった様子で拳を握り締めて悔しがった。モアは二人を交互に見比べながら、口を開く。

「あなたたちって双子なの？」

「そうともさ。凄いでプリンセス、よく一発で見抜いたな」

「一発も何も、何処からどう見たって同じ顔だわ。それより、そのプリンセスって言うのを止めてくれないかしら」

「そりゃ、名前を教えてくださいなきや無理だな。俺はジョージ」

「俺はフレッド……いや嘘だ、俺がジョージであつちがフレッドさ！」

「どっちでも良いけど、私はモアよ。モア・クレイズ」

モアが名乗るとジョージが驚いて両手を上げ、フレッドが口笛を吹いた。

「マジかよ、クレイズってあの秘密主義のクレイズじゃないか！」

秘密主義のクレイズ。またも秘密主義の語が出たことに驚いて、モアは身を乗り出した。

「私の家ってそんなに有名なの？ さつきも知ってる子に会ったんだけど」

「ああ。なんとって秘密主義だからな。みーんなよく知ってるぜ、家名だけはな！」

その時、雑誌を返しに行っていたパンジーがコンパートメントに戻ってきたのだった。

「ちよつと！ あなたたちどきなさいよ、モアにちよつかい出さないで！」

コンパートメントに入るなり、パンジーは虫でも払うように手を振り払って双子に突っかかった。さつと立ち上がった双子は二人してにやりと笑みを浮かべた。

「なんと、すでにパーキンソンのお手付きだったか。ずらかるぞ、ジョージ！」

「合点だ。またな、モア！」

「組分けの際は是非グリフィンドールへ！」

コンパートメントの扉が出る間際、双子の一人が振り返ってウィン

クを飛ばした。モアは思いがけないウィンクに面食らい、パンジーと顔を見合わせる。

「あの双子のことは気にしない方が良いわ、いつもふざけているみたいだから。それよりモア、もうすぐホグワーツに着くわよ。私が外を見てあげるから、あなた着替えた方が良いわ。それとこの子、あなたの猫よね」

パンジーは腕に抱えていたブーティを差し出し、キャリーバッグの中に戻すよう勧めた。聞き分けの良い黒猫はモアの腕を抜けると、それが定位置とでもいうように大人しく自らキャリーバッグの中に戻って行った。

## (2) 組み分けの儀式

パンジーと交代で着替えを済ませたモアは、パンジーの指示で通路に出た。スカートとセーターの上に丈の長いローブ。マントを羽織ってからその場でぐるりと回って見せると、真っ黒い裾がコウモリの羽根のようにふわりと広がって通路を占めた。

「うん、似合ってるわ。立派な魔女に見える」

モアの制服姿を見て満足げに頷いたパンジーと対照的に、モアは微妙な顔で俯いて肩を竦めた。

「そうかしら。そう言われてもあんまり嬉しくないわ。私、魔女になるつもりなんてないのに」

それを聞いたパンジーは、衝撃を受けたとばかりに両腕を振り下ろして憤った。

「なんてこと言うの！ あなたは魔女なのよ、それもクレイズの！」

「それなら毛むくじやらのハグリッドに何度も聞かされたわ。でも私はまだ納得してないのよ」

「ああ、きつとマグルの世界で過ごした時間が長すぎたんだわ！ 駄目よ、あなたはこれから魔女としてホグワーツに通うんだから！」

通路からコンパートメントに戻ったモアは、パンジーの向かいに腰かけながら大げさな溜め息を吐く。

「言っておくけど私、今の今まで魔法なんて使った例がないのよ。そんな私が魔女なんて馬鹿げた……んんっ、とにかく、魔女な訳ないじゃない」

「駄目よ、自信を持って！ 転入許可が出ていることは、魔力があるってことの証なのよ！ 心配しなくてもあなたなら立派な魔女になれるわ」

子犬のように吠えながら必死の様相で訴えるパンジーは、ほとんど泣きそうな顔をしていた。なぜ彼女がこんなに親身になってくれるのかは分からなかったが、モアはいい友人を得られたと思って少しだけ温かい気分になった。

ホグワーツ特急は徐々にスピードを落とし始めていた。モアがち



らりと窓を覗くと、木々が鬱蒼とする外の景色は夜の暗さを帯び始めてきており、雲の向こうには月も輝き出していた。

段々と魔法学校が近づいてくるにつれ、モアの心臓はその高鳴りを激しくしていった。

気分は今まさに敵陣に乗り込もうとする戦士そのものだった。モアはこれからホグワーツに乗り込み、どんな手段を使っても自分が魔女ではないという証明を得てこなければならぬのだ。

じわじわと景色の流れが緩やかになり、間もなくの到着を告げる車内アナウンスの後に列車は完全に停止した。アナウンスでは荷物を置いていくようにとの指示が出されたが、モアはブーティを一人残していくことに大きな抵抗を示してパンジーを困らせた。

パンジーに諭されてキャリーバッグを手放したモアは、可愛い子猫に暫しの別れを告げてコンパートメントを出た。通路にはすでに何人も生徒が溢れ出しており、列車の扉が開くなり生徒達は一斉に外へ流れ出た。

人の流れに沿って進んでいると、モア達の近くで聞き覚えのある声があった。振り返ると、二人のちやうど真後ろで毛むくじやらの巨体がランプを片手に一年生の誘導を行っていた。

「イツチ年生はこつち、イツチ年生はこつち！」

「ちよつとそこのあなた、ハグリッドじゃない！　こんな所で何をしているのよ？」

「ん？　おお、モアじゃないか！」

ハグリッドはランプを掲げたままモアの所まで歩いてくると、空いている方の手で背中をばしばしと叩いた。

「なんだ、おまえさん結局来る事にしたんじゃないか、え？　俺の本業は学校の森番でな。毎年こうして一年生を案内しとるんだ。お前さんも組み分けがあるはずだから、一緒に一年生の列に並んどくれ」

モアは一年生の列を一瞥すると、それから片眉を上げてハグリッドに詰め寄った。

「そんなことより、ねえ！　まさかとは思うけど、うちの玄関をキングズ・クロス駅に繋がしたのはあなたじゃないでしょうね」

「なんだそら、何の話だ」

「あなたじゃないの？ ……そう、違うのならいいわ。案内どうもありがとう！」

モアはハグリッドに礼を言っていると、パンジーに向き直ってその手を握り締めた。

「私達、ここでお別れみたい。また後で会ったら仲良くしてちょうだいね」

「ええ。組み分け頑張つて。あなたがスリザリンに入ってくることを願つてるわ」

「本当に色々ありがとう、じゃあまた」

パンジーはモアに手を振ると、人波に沿って馬車を待つ列に向かって行つた。

モアは一年生の列に混じつて、足場の悪い小道を進んでいった。何度か木の根に躓きそうになりながらもなんとか着いて行くと、やがて辺りが開けて大きな湖の岸边に辿り着いた。

真つ黒な湖面は月明かりを受けてきらきらと輝いている。湖岸には四人乗りのボートがいくつも繋がれており、新入生達は列の前の方から順番にボートに乗り込み始めた。やがて全員が乗り終えると、ボートの一団は湖面をすべるように走り出した。

モアの乗ったボートには、女の子二人の他、カメラを携えた少年が乗っていた。少年は、目にした全てを写真に収めるとでも言わんばかりに、フラッシュを焚きながら落ち着きなく周囲の景色を撮り続けていた。

暗いトンネルを潜つて地下の船着き場に着くと、みんなは順番に船を降りた。ハグリッドは、忘れ物などがないか一艘一艘確認した後、一行をぐつぐつとした岩の道に誘導した。

「足元が悪いから気を付けろ！ ほれ、お前さん、カメラなんぞ覗いてたら転んで怪我するぞ！」

ハグリッドは時折みんなに声を掛けながら、ランプを高く掲げた。真つ暗な道の中ではハグリッドの持つランプだけが目印だった。

岩の道を上つていくと、行く手に城が見えてきた。湿り気を帯びた

草むらを抜け、建物の石段を上った新入生たちは巨大な木扉の前で立ち止まった。

ハグリッドは一度だけ新入生たちを振り返ると、それからランプを持っていない方の手で静かに扉を三回ノックした。間もなく扉が開いて、黒髪の背の高い女性が現れた。すみれ色のローブを纏ったその女性は、厳格な表情で新入生たちを見回した。

「イツチ年生をお連れしました、マクゴナガル先生」

「お疲れさまでした。では、後はこちらで引き取ります。みなさんは私に着いてきてください」

新入生達はマクゴナガル先生の指示に従って順番に玄関ホールへと上がっていった。玄関ホールを横切り——どこからか大勢の人のざわめきが聞こえたが、ホールに反響して音の出所は分からなかった——ホールの脇にある小さな空き部屋に押し込められると、途端に新入生の間で不安げな気配が漂い始めた。

マクゴナガルが前に出ると、ざわつき始めた新入生達を鎮めるように一つ咳払いをした。

「ホグワーツへの入学、おめでとうございます」

硬質な声が投げかけられると、新入生達は水を打ったように静まり返った。

「これから新入生の歓迎会が始まりますが、その前に皆さんを組み分けの儀式が待っています。これはホグワーツで学校生活を送る上での寮を決める大事な儀式です。授業の多くは寮生と一緒に受けるようになりますし、就寝のみならず、みなさんは自由時間も寮の談話室で過ごすことになります」

それからマクゴナガルは四つの寮の説明をし——これはパンジーに聞いた内容と概ね同じものだった——、寮生は学生生活における家族のようなものだと言った。それから、寮對抗杯なる制度の説明をして、寮の得点を伸ばすべく学生生活の中で良い行いを心掛けるようにと言ひ添えた。

「まもなく組み分けの儀式が全校列席の場で行われます。それまでは身なりを整えて、静かに待っていてください」

マクゴナガル先生が部屋を出て姿が見えなくなると、室内は俄かにざわつき始めた。

「組み分けの儀式ってどんなことをするんだろう、試験か何かかな」

「僕、母さんから帽子を被るだけって聞いたよ」

「帽子を被るだけ？ そんなので寮が決まるわけないじゃないか！」

モアは周りに溢れ始めたおしゃべりを出来るだけ聞き流しながら、どうにか転入を取りやめにすべく策を練っていた。組み分けの儀式を台無しにしてみることも考えたが、何をやる儀式なのか分からない中では対策の取りようもないというものだった。

何も思いつくことがないまま時間だけが過ぎていき、やがてマクゴナガル先生が戻ってきた。

「皆さん、組み分けの儀式が始まります。一列になって着いてきてください」

モアは新入生たちを先に行かせ、自分は列の最後尾に着いて部屋を出た。そうすることで少しでも時間を稼ぎたい気持ちがあった。

先程の玄関ホールに戻って右手に進むと、先程も聞いたざわめきが一層近づいてきた。マクゴナガル先生の手で二重扉が開かれると、その先には煌びやかな大広間が広がっていた。

広間の奥に向かって長テーブルが四つ並んでおり、その上には無数の蠟燭の明かりが宙に浮かんでいた。建物の中に居たはずなのに頭上には夜空が広がっており、雲の間に星が輝いていた。テーブルのそれぞれには既に在校生達が着席しており、広間の一番奥には教職員用のテーブルが横に伸びていた。

マクゴナガル先生は新入生達を教職員席の前まで連れてくると、全員を一列に並ばせて在校生達の方を向かせた。

それから新入生達の前に一脚のスツールを置くと、その上に所謂魔法使いの被るようなとんがり帽子が載せられた。モアの見た限り継ぎ接ぎだらけのぼろぼろで、一度か二度洗った方が良さそうな代物だった。

帽子が置かれると大広間の中は静まり返り、皆が帽子に注目した。そのうち帽子が小刻みに震え出したかと思うと、つばの縁がぱっくり

と開いて、まるで口でも動かすようにぱくぱくと動き始めた。

やあやあ皆様これなるは  
組み分けの儀の始まりだ  
君に告げるは行くべき寮  
被れば選んで伝えよう

どうやらこのおんぼろ帽子は歌を歌っているらしい。どこから出ているのか分からないが大広間いっぱい聞こえる音量に驚き、モアはぎよつと目を見開いた。

グリフィンドールは勇気の暖炉  
勇猛果敢で無鉄砲

けれども誰より頼りになる  
ハッフルパフは親愛の居間  
誰もが公平勤勉で

ひよつとすると最も居心地良い  
レイブンクローは知恵の塔  
アカデミックでクリエイティブ  
こぞって自立の個人主義

スリザリンは怜悧の地下牢  
保守的だけど狡猾で  
知略に長けた野心家さ  
示してごらん、才能を  
私が見つけ選ぼうぞ  
さあさあ恐れずお任せを  
だって私は考える帽子！

歌い終わるや否や、割れんばかりの拍手が大広間を満たした。拍手喝采を受けて満足そうにお辞儀をすると、帽子はスツールの上で大人しくなった。

モアも周りをきよろきよろ見ながら遠慮がちに拍手を送っていたが、マクゴナガル先生が巻紙を手に歩み出たのではつと両手を下ろした。

「それでは、アルファベット順に名前を呼びますから、帽子をかぶって椅子に座ってください……アンドラス・ケイン！」

名前を呼ばれた男の子は一瞬訳が分からないという顔をしていたが、慌てて小走りで前に出て来ると、本当に帽子を被ってスツールに座り始めた。

「ハツフル・パー！」

帽子が叫び、右側のテーブルから歓声が上がった。男の子は歓迎されるがままに右側のテーブルへと歩いていき、そのまま空いている席に収まった。どうやら本当にあのおんぼろ帽子が入る寮を決めているらしい。モアは訝しむ気持ちで帽子を睨んだが、どう考えてもインチキにしか思えなかった。

「ブレア・ローズ！」

次の女の子が出て来ると、これまたぐいつと帽子を被って椅子に座った。今度はしばらく沈黙が続いたが、やがて高らかな声で寮名が宣言された。

「スリザリン！」

スツールの上でどうしたものか戸惑っていた女の子は帽子を脱ぐと、右から二番目にある緑のネクタイを締めた一団のいるテーブルへと足早に駆けていった。

「クリービー・コリン！」

マクゴナガル先生は次々に名前を呼び上げ、新入生達は次々に帽子を被って組み分けされていった。新入生の並んでいた列はみるみる疎らになっていった。

「ラブグッド・ルーナー！」

女の子はゆったりした歩調で歩み出ると、労わるような丁寧な手付きで帽子を取り上げた。それから帽子を頭に載せると、間もなく帽子が声を張り上げた。

「レイブンクロー！」

左端から二番目のテーブルで歓声が沸き、女の子はまたゆったりした歩調でテーブルまで移動していった。

それから呼ばれたのは、ロビンソン・コリーナ、スコット・ローレン、他にも何名も。最後に赤毛のウィーズリー・ジニーが呼ばれ、教職員席の前にはモア一人が取り残された。モアは体の横で拳をぎゅつと握り締めた。

「さてここで皆にお知らせじゃが、今年は一学年に一名、転入生が……」

その時、大広間の扉が開いて、真つ黒なローブを纏った男性が入ってきた。その男性ときたら立派な鉤鼻の持ち主で、髪も瞳も鴉のように真つ黒だった。

鉤鼻の男性は教職員席まで真つ直ぐに突き進むと、マクゴナガル先生の前で立ち止まり、耳打ちする格好を取った。

「ポッターとウィーズリーが例の空飛ぶ車で登校し、暴れ柳に激突しました。今は我輩の研究室で待機させていますが、早急に来ていただきたい」

耳打ちとは思えない声で用件が伝えられると、マクゴナガル先生はその表情をみるみる厳しいものに変えていった。大広間に集った生徒たちが俄かにどよめき始めた。

「今の聞こえたか？ ポッターが空飛ぶ車で暴れ柳に突っ込んだって！」

「マジかよ！ 汽車で見かけないと思ったら空飛ぶ車でご登校とは！」

「皆さん、静粛に！ まずは組み分けの儀式を続けます。クレイズ・モア、組み分け帽子の前へ！」

マクゴナガル先生がモアの名前を呼ぶと、大広間のどよめきが一層激しくなった。

モアは深々と深呼吸をすると、硬い動きでスツールの前まで移動した。目の前にあるのは見れば見るほど汚らしい、おんぼろの帽子だ。モアは摘み上げるようにして帽子を取り上げると、しばらく逡巡して、それから嫌そうに頭の上にちよこんと帽子を乗せた。

「ほう、君はクレイズか」

帽子を乗せた頭の中に、何やら低い声が聞こえてきた。

「ふむ。君の才能が花開く寮は、そうだな、スリザ——」

モアは帽子の裁定にとっさに口を挟んだ。

「ちよつと待って、帽子さん！ 初めに言っておくけど、別に私、魔女になりにきたわけじゃないのよ」

「ここまでやって来て、それでもまだ魔法使いになる意思を持たないとは！」

帽子は——帽子に目があるのならきつと——片目を顰めて唸りを上げた。モアは開き直った気持ちになって、帽子のつばを力強く握り締めた。

「悪いかしら。私はね、証明しに来たのよ。自分が魔法使いなんかじゃないってことをね！ だから組み分けなんてしなくていいから、さっさと私がただのマグルだって、ここへ来たのは間違いだって言うてちようだい！」

そう言つてモアが懇願すると、帽子はたつぷりと沈黙した。

「ちよつと、言いなさいってば！」

「モア・クレイズ、世の中には逃れ難い事実という物もあるのだよ。それがどんなに認めたくない物だとしてもね」

帽子はそこで一呼吸置くと、高らかに声を張り上げた。



### (3) 宴の後

「だが、それに対して真っ向から立ち向おうとする勇氣はある意味において称賛に値する。ならば君が与するべきは——グリフィンドール！」

大広間に並んだテーブルの一つからわあっと歓声が上がった。マクゴナガル先生は巻紙を纏めるとそれを教職員席に置き、急ぎ足で大広間を出ていった。鉤鼻の男性はにやりと笑うと、マクゴナガル先生に続いて大広間の扉を潜った。

モアは帽子を脱いで立ち上がると、憤懣やるかたないとはかりに座っていたスツールの上に帽子を叩き付けた。

それから大きな足音を立ててグリフィンドールのテーブルまで移動すると、苛立ちを尻に込めてどすんと腰を下ろした。すると、さすが隣に座っていた体格の良い男子生徒が、モアの前のゴブレットになみなみと冷製かぼちゃジュースを注ぎながら言った。

「グリフィンドールへようこそ、転入生。なんだよ、機嫌が悪そうじゃないか」

「おい、ウッド。もうクイディッチチームへの勧誘の目星を付けたのかい」

「そんなんじゃないよ。なあ、君は他の寮が良かったのかも知れないが、グリフィンドールは良い寮だよ。去年は念願の優勝杯もスリザリンから取り返した。僕は自分の寮に誇りを持っているんだ」

モアはかぼちゃジュースを受け取りながら、大きな溜め息をこぼした。

「慰めてくれてありがとう、でも悪いけど見当違いなのよ。ああ、なんでもこうなっちゃったのかしら！ 私は魔女なんかじゃないのに！」

「魔女じゃないだって？ 魔女じゃないならどうしてホグワーツにいるって言うのさ」

近くに腰かけていたドレッドヘアの男の子が身を乗り出して聞いた。

「私にだって分からないわよ、でも何かの手違いには違いないわ。だ

からそれを確かめるために来たのよ」

「僕知ってるよ、スクイブはホグワーツには入れないんだ」

丸顔のおどおどした男の子がテーブルの向こうから口を挟んだ。モアは聞き慣れない言葉に首を傾げる。

「スクイブって何かしら、マグルとは違うの？」

すると二席向こうに座っていた黒髪のエキゾチックな女の子が説明してくれた。

「スクイブっていうのは魔法族に生まれながら、魔力を持たない人のことを言うのよ。例えばそのネビルは純血の生まれで、魔法はとっても下手だけど、下手なだけでは別にスクイブとは言わないわ」

丸顔の男の子は引き合いに出されて恥ずかしそうに首を竦めた。

教職員席の真ん中に座っていた白髭の老人が立ち上がり、ぱんぱんと両手を打ち合わせた。

「えー、話が盛り上がつとるようじゃが、一言言わせていただきたい」  
みんなはおしゃべりを止めて老人の方を向いた。

「新入生、おめでとう！ ホグワーツでの最初のディナーを是非楽しんでいただきたい、以上！」

それだけ言い残すと老人は足早に教職員席から降り、帽子の歌の時よりも盛大な拍手に見送られながら、テーブルの間を抜けて大広間から出ていった。モアはきよとんとした表情で疎らに手を打ち合わせた。

「今のご挨拶をなさったお爺さまはどなたなのかしら、お偉い先生とか？」

隣のウッドが驚いて答えた。

「ホグワーツの校長、アルバス・ダンブルドアだよ。君、本当にクレイブかい？ 魔法界のことを全然知らないんだな」

「悪いけど、自分が魔女だなんて馬鹿げた話を聞かされたのが二週間前なのよ。全然知らないどころじゃないわ」

「本当かい？ 冗談じゃなくて？」

「これが冗談ならどんなに良いか！ そもそも私はこの転校にだって納得してないんだから！」

するとウツドは明るく笑ってモアの背中を叩いた。

「はははっ、難儀してるんだな！ まあそのうち慣れるさ。さつきも言ったけどグリフィンドールは良い寮だからな、きつと気に入るよ。まずはダンブルドアの言う通りデイナーを楽しむ所からだな」

その時、モアは目の前の大皿にぱつと食べ物が見れるところを目撃したのだった。

先程まで空っぽだった金の大皿の上にはローストビーフやラムチョップ、ソーセージ、マッシュポテトなどが所狭しと盛り付けられている。モアにはやや肉料理の種類が多めに感じられたが、若者の多い学校のことだ、周りを見れば育ち盛りらしく喜んで皿に取り分けている皆の様子が見受けられた。

料理はどれも美味しそうだったが、旺盛に食べる気にはなれず、モアは先程注いでもらったかぼちゃジュースをちびちびと啜ることで食事の時間を過ごすことにした。皆の話題は専ら、空飛ぶ車で登校したポッターの話題で持ち切りだった。

「しかし、暴れ柳に突っ込むとかよくやるよな」

「ポッターはスネイプに睨まれてるからな。あの嬉しそうな顔見ただろ、退学にされるんじゃないか」

暇つぶしに皆の食事風景を眺めていたモアは、自分と同じように食が進んでいない女の子を見つけた。ぼさぼさ頭の彼女は、先程からフォークで茹でた人参を転がしながら憂鬱そうに頬杖を突いている。モアはジュース片手に席を立つと、その女の子の隣にそつと腰を下ろした。

「ねえ、あなたは食べないの？」

「ええ、ちよつと。あなたこそ、さつきからジュースばかり啜っているわ」

「私はいいのよ。それよりあなた、顔色が悪いわ、大丈夫？」

女の子はそこで深々と溜め息を吐いた。

「ええ、平気よ。さつきのスネイプ……先生の言葉、聞いたでしょう？ 空飛ぶ車で登校したって話。友達が退学させられるって噂が立っていて心配で」

モアは小首を傾げた。

「ごめんなさい、よく分からないうちだけど、車を魔法で飛ばしたらいけない決まりでもあるのかしら」

「いいえ、違うわ。魔法使いは、魔法を使っているところをマグルに見られちゃいけないの。……ねえ、あなた、彼女に新聞を見せてあげて」  
ぼさぼさ頭の女の子に頼まれて、近くに座っていた少年が新聞を差し出してくる。そこには大々的な見出しで「空飛ぶフォード・アングリア、いぶかるマグル」と書かれており、雲間に浮かぶ車の写真——それも静止画でなく空中でぶかぶか揺れている——が映し出されていた。

「まあ、今回のことはちよつと軽率だったけど、空飛ぶ車を運転だなんて真似したくても真似出来ないよな！ 実にクールだ！」

「そうね……見せてくれてありがとう」

モアは新聞を少年に返すと、ぼさぼさ頭の女の子の方に向き直った。

「例のポッターって、生き残った男の子ことハリー・ポッター君のこと？ 彼っていつもこう……その、目立ちたがる場所があるのかしら」

「どうかしら。少なくとも周りが放っておかないってのはあるわね。ハリーはクイディッチでも優秀なシーカーだし、常に目立つところにいるってことは確かだわ。それにしたって今回のことはあんまりだと思っのー！」

「そうなの。残念だけどポッター君とはあんまり仲良くできそうにないわね。大事な友達に心配をかけてまでこういうことをするなんて、ちよつとどうかしてるわ」

ぼさぼさ頭の女の子は、ちよつとだけ眉尻を下げると弱々しく微笑んだ。

「私のことを心配してくれてありがとう。でもハリーもロンもあなたが思ってるより良い奴なのよ。私はハーマイオニー・グレンジャー。宜しくね、モア」

「私の名前を覚えていてくれたのね」

「ええ、同じ学年だったから。勉強のことで分からないことがあったらきつと力になれると思うわ」

「ありがとう、ハーマイオニー」

その時、半透明の何かがモアの視界を横切って、モアはゴブレットを取り落としそうになった。半透明の何かは、一度通り過ぎてから戻ってくると、モアの向かいに浮かんで止まった。おっかなびっくりよく見れば人の形をしており、仄かに真珠色をしている。

「驚かせてしまい申し訳ありません。私はグリフィンドールの寮付きゴースト、ニコラス・ド・ミムジー・ポープイントン卿です」

ニコラス卿はそう言うと、丁寧にお辞儀をして見せた。その姿は紳士そのものだったが、モアは彼の全身を見回し、ニコラス卿の脚が透けているのを見付けてしまった。

「ゴースト!? ゴーストつてもしかして、やだ、本当にゴーストじゃない!」

モアがほとんど半狂乱になって叫ぶと、ハーマイオニーが宥めるようにモアの腕を掴んだ。

「大丈夫よ、モア。ゴーストといっても何か悪さをするわけじゃないから」

「待ってよ、だってゴーストなのよ!! まさかとは思うけど、こんなのが他にもたくさん居るわけ!」

「お嬢さんは我々がお気に召さないようですね」

ニコラス卿はひだ襟を摘みながら悲しげに言った。

「私からゴーストの皆に呼び掛けて、あなたを極力驚かさないよう気を付けましょう。特に血みどろ男爵などは刺激が強いですから……それで宜しいですか?」

モアはおずおずと頷くと、それから気分を鎮めるように長い溜め息を吐いた。

「気を遣わせてしまって、その……ごめんなさい」

「お気になさらず。毎年居るのですよ、我々のようなゴーストを苦手とする生徒が」

ニコラス卿はそう言うと、もう一度お辞儀をしてふわふわと他の生

徒の所へ飛んで行った。

モアが騒いでいる間に、いつの間にかテーブルの上の皿はデザートでいっぱいになっていた。ゼリーに、糖蜜パイ、フェアリーケーキ、カスタード・タルト、サマープディング、トライフル、キャロットケーキ、他にも色々。アイスクリームは様々な味が取り揃えてあったし、フルーツの盛り合わせもあって、モアは少しだけ食欲をそえられる気がした。

モアがサマープディングを一切れ取り分けて突くと、パンに染み込んだベリーの瑞々しい果汁が口いっぱい広がって幸せな気分になった。

しばらくして皿の上のデザートがすっかり消えると、いつの間にか教職員席に戻っていたダンブルドアが立ち上がって話を始めた。

「そろそろお開きにしなくてはならんのだが、全員よく食べたかう。よろしい、では最後に二言三言。毎年の注意になるが、構内にある森には入ってはいけません。ちよつとしたスリルを味わうには危険すぎる森なので、一年生も上級生も心しておくように」

ダンブルドアは集まった全員に目を配りながら言った。

「それから、校内での悪戯グッズの使用はほどほどにするように。毎度後始末をする管理人のフィルチさんのことも考えてやってほしい」それからダンブルドアは、校内クイディツチリーグの予選について案内をし、選手として参加したいものはマダム・フーチに申し出るようにと言いつ添えた。

「では最後になるが、皆で校歌を歌いましょう！」

ダンブルドアが杖を振ると、杖の先端から金色のリボンが流れ出してきた、空中に文字を描き始めた。モアが目凝らして読んでみたところによると、どうやらこれは校歌の歌詞を描いたものらしかった。

リボンを自在に操って全ての歌詞を書き終えたダンブルドアは、杖を指揮棒のように構えた。

「各人好きなメロディで——さん、はい！」

途端、大広間は見事な不協和音に満たされた。

面食らったモアは歌うことも忘れてきよろきよろと周りを見回し

た。モアの隣ではハーマイオニーが大真面目な顔をして唱歌風のメロディを歌っているし、先ほど新聞を貸してくれた少年は行進曲風に歌っているようだった。

すっかり歌い出しを逃したモアは、適当に口をぱくぱくさせながら歌っている風を装うことにした。好きなメロディで歌えと言われても、然程音楽に興味のないモアにとってはそれはとても難しいことだと思えた。

全員がばらばらに歌い終えた所で、ダンブルドアは大きな拍手を送った。

「今年も実に素晴らしい歌じゃった。では、全員就寝、駆け足！」

それを合図に皆は席を立ち、大広間の扉の方へと流れていった。モアも人の流れに沿って大広間を出た。

グリフィンドール生の一団は大理石の階段を上がり、動く廊下を抜けると、何度かタペストリー裏の隠し扉を抜けて進んだ。壁に掛けている肖像画が動いて、中に描かれた人物がこちらを指差したり囁き合ったりしているのを見て、モアは何となく落ち着きのない気分になった。

更に何度か方向の変わる階段を上った後、一団は廊下の突き当たり一枚の大きな絵が掛けられているところに差し掛かった。モアが辿り着いた時にはもうすでに大きな絵が扉のように開いた後で、皆が順番に絵の裏にある丸い穴によじ登っているところだった。

穴によじ登る順番を待ちながら、モアはブルネットの上級生が黒人の友達に何か話しかけているのを聞き留めた。

「寮に入る時の新しい合言葉を聞いていたかしら。ミミダレミツスイよ」

「どうやら寮に入るには合言葉が必要らしい。モアがハーマイオニーと顔を見合わせると、ハーマイオニーは人波に逆らう方向を向いて四苦八苦し始めた。」

「私、ハリーとロンを探してくるわ。彼らきつと合言葉を知らないはずよ。モアは先に寮に戻っていて、あの穴を上ったら談話室だから」  
「分かったわ、道中気を付けてね」

モアに手を振ると、ハーマイオニーは人の間を縫って来た道を遡り始めた。一体どういう状況で合言葉が必要になるのか今のモアには見当も付かなかつたが、取り敢えず記憶に留め置いてモアも丸い穴によじ登ることにした。

やっと辿り着いたグリフィンドールの談話室は温かな空気に満ちていた。ふかふかとした絨毯の敷き詰められた円形の部屋で、壁に大きな暖炉が備え付けられていた。組み分け帽子の歌っていた「勇気の暖炉」とはこれのことなのだろうとモアは思った。

周りを見れば、多くの生徒が談話室に残っているようだった。聞こえた話が暴れ柳に突っ込んだ車の話で持ち切りだったことから、ここに残っている誰もが英雄の帰還を待っているのだということが分かった。

これから何年も語り草になるだろう大事件に然程興味のなかつたモアは、ぐるりと談話室を見回した後、手近な女子生徒に声をかけた。「ねえ、あなた、女子寮はどっちにあるのかしら」

「女子寮なら右の扉の向こうよ。螺旋階段を上った先に各部屋があるわ。扉に看板が掛かっているはずだから、それで自分の部屋を探して」

「ありがとう、そうするわ」

部屋の場所はすぐにはわかつた。扉には二年生と書かれた小さなプレートが掛かっていた。

モアは二年生の部屋に上がると、すぐさまブルーティの入ったキャリーバッグを探した。キャリーバッグはすぐに見つかった。トランクと一緒に二段ベッドの脇に置かれていた。

自分の荷物を解くより先に、モアはブルーティをバッグから出してやることにした。

「何だか随分と長い間離れていた気がするわ」

モアは可愛い子猫を抱き上げながら呟く。

それもそのはずだ。夏休みの間、ほとんど何処にも出かけずに家に籠っていたモアは、その間ずっとブルーティと一緒に家に居たのだ。ホグワーツ特急を降りてから歓迎会を終えるまでの数時間でさえ、こん



なに長い間離れていたことはなかったという訳だ。

「お腹空いたでしょう。待っててね、今ご飯の用意をするから」

モアはブルーティを床に下ろすと、自分のトランクを開けて餌皿を探し始めた。床に降りたブルーティは大きく伸びをすると、部屋の中をゆったりと散策し、フンフンと辺りの匂いを嗅ぎ始めた。

その時、談話室で歓声上がるのが遠くに聞こえた。暴れ柳なる古木に突っ込んだという二名が寮に帰ってきたのだろう。喧騒を遠くに感じながら、モアは自分がこれまでの日常からかけ離れた所に来てしまったことを思った。

明日からはいよいよ魔法使いになるための授業が始まってしまう。一体何を学ぶのかなど見当も付かなかったし、自分に魔法が使えるなどと言われたところで、モアには全く自覚がなかった。組み分けが済んでしまった今でさえ、これは何かの間違いに違いないと思っている。

今、モアの心の中には不安が暗雲のように立ち込めていた。

ブルーティはしばらくして部屋を一周して戻ってくると、ちょうど用意の出来た皿に頭を突っ込んでウエットフードをぺろぺろ食べ始めた。

モアにとつては、このまだ小さな子猫だけが唯一の味方だった。いくら自分が魔女じゃないと訴えた所で、モアの望むように取り合ってくれる者は誰一人としていなかった。

「このまま流されるように魔女になるのだけは絶対に嫌だわ。何とかしてでも前の学校に戻る方法を見つけなくちゃ」

全ては明日からが勝負だ。明日から始まる授業を通じて、この転校が間違いだったことを証明しなければならぬ。

「よし、やってやるわ！ まずは魔女なんかじゃないって絶対に証明して見せる！」

気持ちを奮い立たせるように声を上げると、呼応するようにブルーティも鳴き声を上げた。モアは可愛い子猫の頭を思いつきり撫でてから立ち上がり、気持ちの整理も兼ねて解きかけだった荷物の片付けを始めることにした。

#### (4) 吼えメール

次の朝、モアが目覚めは最悪だった。

何より、見た夢の内容が良くなかった。モアが見た夢は、親友のアレイヤに魔女だということがばれて絶縁を切り出された挙句、火刑にされるといふものだった。怒ると怖いアレイヤがモアを糾弾するさまは壮絶で、炎に巻かれる息苦しさに目を開けると、モアの胸の上でブーティが丸くなっていたというわけだ。

すやすやと寝息を立てる子猫にちよつと心が癒されたのはともかく、すぐさま胸の上から降ろすと、モアは天蓋付きベッドのカーテンを捲った。視界の端ではぼさぼさの後ろ頭が机の前に座り込んでいた。

「ようやく起きたわね。おはよう、モア」

カーテンの開く音で気が付いたのだろう。ハーマイオニーはこちらに背中を向けたまま朝の挨拶を述べた。モアがベッドの上から覗き込むと、ハーマイオニーは机の上に頬杖を突きながら本を読んでいるところだった。

「朝食は昨日の歓迎会があった大広間で食べるのよ。昨日の今日じゃあまだ道を覚えてないだろうと思って待ってたの」

「ごめんなさい、待っててくれてありがとう。すぐに支度するわね」  
ベッドから降りながらきよろきよろと室内を見回してみるが、ハーマイオニーの他に人の姿はない。同室になったパーバティ・パチルやラベンダー・ブラウンはもう既に朝食を食べに出てしまったようだった。

急いでパジャマから制服に着替えて髪を梳かしたモアは、ロツクハートの教科書を小脇に抱えたハーマイオニーを伴ってグリフィンホール寮を出た。

モアが大広間に辿り着いた時には、半数近くの生徒がすでに席に着き、朝食を食べているところだった。手近な席に収まると、すぐさまモアは皿の上で山積みになっているきつね色に仕上がったトーストに手を伸ばした。

「この学校の料理は焼き加減が甘いものばかりね。パンもベーコンももつとこんがりさせないと」

「そう？ 普通じゃないかしら」

ハーマイオニーは近くにあったミルクピッチャーを引き寄せると、持って来た教科書を立てかけて読み始めた。タイトルは『バンパイアとぼつちり船旅』だが、ふざけたタイトルからして、モアにはそんなに真剣な顔で読むような本には思えなかった。

「ねえ、ハーマイオニー。食事時くらい本を読むのを止したらどうかしら」

「でもモア、私達今日から授業なのよ。少しでも多く頭に入れないと」

その時、大広間の入り口の方から黒髪眼鏡と赤毛の男の子が連れ立ってやってきた。二人は立てかけた本の向こうに栗色のぼさぼさ頭を見つけると、まっすぐにこちらへと歩いてきた。

「嘘だろ、ハーマイオニーが女の子の友達を連れてる！」

赤毛の男の子はモアの姿を認めると、朝の挨拶も忘れてハーマイオニーに問いかけた。

「それも見たことない顔だ、どういうこと？」

ハーマイオニーは本から視線だけを上げると、ちよつと棘のある口調で紹介した。

「昨日の歓迎会に居なかったあなたは知らないでしょうけど、彼女、転入生のモアよ」

歓迎会に居なかったという話から察するに、彼らが空飛ぶ自動車の二人組らしい。

言われて見れば、黒髪の方はフローリツシュ・アンド・ブロッツで見たと同じハリー少年だし、赤毛の方もどこかで見覚えのある顔をしていた。モアは二人の姿を見比べながら、出来るだけ淡々とした調子で挨拶することにした。

「モア・クレイズよ、よろしくね」

すると、驚いた赤毛の男の子が席に着くなりオートミールの皿に思いつ切り肘を突っ込んだ。

「クレイズって、おいマジかよ。秘密主義のクレイズだ！」

「ロン、秘密主義ってどういうこと？」

椅子に座るタイミングを逃したハリー少年が赤毛のロンに問いかけた。

「クレイズは代々純血主義で有名な家だったんだけど、社交界にもクレイズの名では出て来ないし、誰が家の一員かは家の人間にしか知られていないんだ。でも、ここ五十年くらいは名前を明かすようになって聞いてたけど、本当だったんだ！」

「たっぷり驚いていただいたみたいで光栄だわ」

モアはちよつとうんざりしながらそう言った。ロンは興味津々といった様子押し隠しもせずモアの顔をじろじろ見回した。

「で、そのクレイズがどうして転入を？」

「今まで普通の——つまり、マグルの学校に通っていたんだけど、今年の春先、急にこつちに転校しろって言われたのよ。私は出来れば前の学校に戻りたいんだけど」

「マグルで居たいだなんて、君、相当変わってるね！」

ロンは珍しい物を見たそばかりに目を丸くしてトーストにかぶりつく。傍で話を聞いていたハリーは、ようやく席に腰かけながら左右に首を振った。

「僕はマグルの間で育ったけど、今じゃ魔法のない生活に戻りたいだなんて微塵も思わないよ」

「私は普通の人間なのよ。魔法なんて使えないし、使いたいとも思わないわ」

ハリーはモアの言葉に深く頷いて答えた。

「僕も最初はそう思ってた、自分に魔法なんて使えるわけないって。でも違ったんだ。ホグワーツで授業を受けて、僕にもちゃんと魔法が使えるって分かった。今は自分は魔法使いなんだ、僕の居場所はここなんだって思ってる」

「残念だけど、私には分かりかねるわ。魔法なんてなくても十分豊かな生活は遅れるし、何より、私は前の学校で築いた居場所をこの転校で奪われたんだもの！ 考えてみてよ、あなただって今すぐこの学校から転校しろだなんて言われたら嫌でしょう？」

ハリーは不意打ちを喰らったようにちよつと言葉を詰まらせた。

「それは……絶対に嫌だけど、でも多分転校したって皆との繋がりがなくなるわけじゃないよ。ふくろうを使えば手紙のやり取りだってできるし、居場所だってまた新しい学校で作れるかも知れない」

モアは耳を疑うとばかりに目を見開くと、テーブルに拳を振り下ろした。

「あのね、自分が魔法使いだなんて馬鹿げた話、親友にだって言えないわ！　ねえモア、最近何してるの？　ええ、小鳩をシャワーヘッドに変える練習をしてるわ！　だなんて、こんな馬鹿な話がある!?　それに居場所は作れるだなんて、簡単に言わないで！」

ハリーは慌ててしどろもどろになると、弁解するように再び首を振るった。

「ごめん、君を怒らせるつもりはなかったんだ」

「ふん。別にいいわ、あなた達に理解を求めた私が間違ってたのよ！」  
失望を口にしたモアは、手にしていたきつね色のトーストの端っこをかじった。

「ああ、やつぱり生焼けだわ！　もっとこんがり真っ黒にならないと全然香ばしくないじゃない」

すかさずハリーが口を挟んだ。

「真っ黒になったトーストなんて、食べられた物じゃないよ」

「うるさいわね、放っておいてよ」

ハリーはロンと顔を見合わせてちよつとだけ肩を竦めると、オートミールの皿に向かった。

その時、大広間の扉から大量のふくろうが広間に舞い込んできたのだった。モアは飛び散る羽毛から片手でトーストを庇うと、何かとばかりに頭上を見上げた。

「一体全体何が起きてるの!?!」

「郵便配達の間だよ。ふくろうが皆に手紙を運んでくるんだ」

ハリーは戯れるように頭上に手を伸ばした。次の瞬間、ハーマイオニーが本を立てかけていたミルクピッチャーの中に大きな灰色の塊が落ち、辺りにミルクと羽毛が飛び散った。ハーマイオニーと共に

ろにミルクの飛沫を浴びたモアは、苛立ち交じりに足をむんずと掴むと、ピッチャーの中からびしょ濡れになったふくろうを引っ張り出した。

「もう！ 一体何なのよ！」

モアが気絶したふくろうをゆっくりとテーブルの上に降ろすと、ロンが覗き込んで息を呑んだ。

「大変だ——」

「大丈夫よ。エロールはまだ生きてるわ」

ハーマイオニーがふくろうを指先で軽く突きながら言った。

「そうじゃなくて——あっち」

ロンが指差したのはふくろうの口に咥えられた赤い封筒だった。ミルクを吸ってぐっしよりと濡れた封筒は水気でてらりと輝いている。斜向かいに座っていた丸顔のネビルが、何か気の毒な物を見る目で赤い封筒を眺めていた。

「どうしたの？」

ハリーが聞いた。モアも分からないとばかりに赤い封筒を見詰めた。

「これの一体何が問題なのかしら？」

「ママが——ママったら僕に『吼えメール』を寄越した」

ロンが絶望的なものに直面したかのように封筒を凝視して項垂れた。ネビルが心配そうに身を乗り出してきた。

「ロン、開けた方がいいよ。というより、開けないともっと酷いことになるよ」

怖ず怖ずと言ったネビルは、過去に祖母から吼えメールを受け取ったことがあるのだと明かした。思い出したくないかのように深くは語らないネビルに対して、煮え切らないとばかりにハリーは語気を強めた。

「『吼えメール』って何？」

ロンはハリーの質問など耳に入らない様子で、赤い封筒を一心に見詰めていた。濡れそぼった封筒の四隅から煙が上がり始めると、ネビルが慌てた様子でロンの腕に取り纏った。

「開けて！　ほんの数分で終わるから……」

ロンは意を決したように嘴から封筒を取り外すと、封筒を開きにかかった。訳知り顔のネビルがすぐさま指を耳に突っ込んだのを見て、モアも右に倣った。すぐさま女性の声が爆発のように封筒から溢れ出し、大広間の空気を目一杯震わせた。

「……車を盗み出すなんて、退校処分になっても当たり前です！　首を洗って待ってらっしゃい、承知しませんからね！　車がなくなっているのを見て、私とお父さんがどんな思いだったか、お前はちよつとでも考えたんですか……！」

それは、酷く傍迷惑な手紙だった。どうやら吼えメールとは大音量の怒鳴り声を封じ込めて届けるための代物らしい。

モアは鼓膜が破れるんじゃないかと思うほどの大声をやり過ぎしながら、少しでも音から逃れようとテーブルの下に避難した。手紙をもらったロンは顔を真っ赤にして、椅子の上で縮こまっていた。

余りにも過ぎる大声で正確に聞き取れたかモアには自信がなかったが、吼えメールの内容をまとめるところだった。こんな危険なことをする子供に育てた覚えはないということ、ロンの父親が役所で尋問を受けたこと、次に規則を破ったらすぐにロンを家に連れ帰るということ。

手紙はそれだけ言い残すと、有り余る怒りを燃やすかのよう燃え上がり、灰になって掻き消えた。耳の奥に止まない残響だけが残り、モアは深い息を吐くとテーブルの下から這い出した。

ハリーとロンは、手紙がもたらした衝撃に椅子の上で放心状態になっていた。凄絶な音声に静まり返っていた室内は、次第におしゃべりの声を取り戻していった。ハーマイオニーは集中できないとばかりに教科書を閉じると、ロンの頭の天辺に向かって声をかけた。

「ま、あなたが何を予想していたかは知りませんが、ロン、あなたは……」

「当然の報いを受けたって言いたいんだろ」

ロンはうんざりしたように言った。

大広間に居た誰もが今の衝撃的な出来事を囁き合っており、ホグ

ワーツ史に残る英雄だった男の子達は、一瞬でただの恥晒し者に変わってしまったようだった。先程の言い合いで機嫌を損ねていたモアは、ちよつとだけ小気味良い気分になった。

「やあウィーズリー、良い気味だね」

吼えメールの出来事から落ち着く間もなく、頬の青白い、顎の尖つた男の子がスリザリンのテーブルから歩いてきた。左右には体の大きな男の子二人を従えており、三人はニヤニヤと笑みを浮かべながら今だ不貞腐れているロンを見下ろした。

「グリフィンドールのテーブルに一体何の用だ、マルフォイ」

ハリーが突つかかった。

「ふん、お前達に用はない」

そこで言葉を区切ると、マルフォイと呼ばれたスリザリンの男の子は丁寧な物腰でモアに向かい合った。

「初めまして、ミス・クレイズ。僕はドラコ・マルフォイと言います」

男の子は紳士的な態度で会釈をした。モアは食べかけのトーストを皿に降ろすと、きよとんとしながら会釈を返した。

ドラコはモアと一緒に座っている面々の顔を見回すと、気に食わないというように鼻を鳴らした。

「訳あってマグルの間で育った所為で、魔法界の事柄には疎いとパーキンソンから聞いたよ。なら仕方がないのかも知れないが、ミス・クレイズ、付き合う友達を選んだ方が良い。そのポッターと忠実なご学友のウィーズリーは規則破りの常習犯だし、頭でっかちのグレンジャーときたらマグルの生まれだ。ロングボトムに至ってはスクイブすれすれだし、こんな連中と付き合っていたら君の家名に傷が付く」

一人一人を指差しながら、ドラコは小馬鹿にしたように理由を述べていく。モアは皆の顔を見回しながら、納得したように頷いた。

「そうね、家名に傷が付くかどうかはともかく、その意見には少なからず賛同するわ」

すると、ドラコは拍子抜けしたように瞠目した。

「君、話が分かるじゃないか」



「ハーマイオニーはともかく、その二人とはちよつと分かり合えそうもないと思つていたところよ。そう、規則破りの常習犯なのね」

モアが横眼を向けると、ハリーは反論するかのように口を開きかけたが、思い当たる節があるのかすぐさま口を噤んだ。ドラコはこの展開に満足したようで、嬉しそうな笑みを浮かべると一歩モアに詰め寄った。

「クレイズ家は噂では優秀な魔法使いを何名も輩出していると聞く。だから、ミス・クレイズ、君もさぞかし優秀な魔法使いなんだろうと期待しているよ」

これが気に食わなかったのはモアの方だった。

「ちよつと待つて！ パンジーから話を聞いているなら分かつてると思うけど、私は魔法使いなんかじゃないのよ！」

「おつと、可哀想に。パーキンソンの言う通り、マグル界での洗脳がまだ抜けないらしい」

微かに冷笑を浮かべながら、ドラコは後ろの二人に視線を送った。凶体の大きい後ろの二人も同調するように薄ら笑いを浮かべた。

「ホグワーツに招かれた以上、君は間違いなく魔法族だ。そのことがきつと分かる日が来るはずさ」

「お生憎様だけど、そんな日は来ないわ！ 絶対にね！」

その時、マクゴナガル先生がテーブルを回って時間割表を配り始めたのが見えた。ドラコはマクゴナガル先生を視界に収めるとスリザリンのテーブルを振り返り、鉤鼻のスネイプ先生が同じように時間割を配り始めているのを確認した。

「機嫌を損ねてしまったようだね。今日の所は失礼するよ。君がスリザリン生になれなかったこと、非常に残念に思うよ」

「そうね、私も残念に思うわ！ パンジーに宜しく伝えてちょうだい」  
ドラコはモアに向かつて片手をあげると、お供を引き連れてスリザリンのテーブルへと戻っていった。ロンは自分の皿に玉子を取り分けながら、ドラコ達の背中を気味の悪いものでも見るような眼で見送った。

「うえー。モア、君ってやっぱり変わってるよ。あんな嫌味な奴らと

も普通にやれるなんて」

「あなた達の場合は嫌味というより事実を指摘されただけなんじゃないかって？ それと言っておきますけどね、あなた達魔法使いの方がよっぽど変わってるわよ！」

ロンは全く分からないとでも言いたげに首を傾げると、玉子を口一杯に詰め込んだ。

## (5) 初めての授業

朝食を済ませたモアは、ハリー、ロン、ハーマイオニーと一緒に城を出た。野菜畑を横切った向こうにある温室の前にはもうすでに多くの生徒が集まって、先生が来るのを待っている様子だった。

ポモーナ・スプラウト先生はすぐにやってきた。だがどういう訳か腕一杯の包帯を抱えたスプラウト先生は、ギルデロイ・ロックハートを伴っていた。トルコ石色のローブをまとったロックハートは、不機嫌そうなスプラウト先生に気付かない様子で生徒達に笑いかけた。

「やあ、みなさん！ スプラウト先生に『暴れ柳』の正しい治療法をお見せしてしましてね」

暴れ柳と言えば、ハリーとロンが突っ込んだという古木のことだ。どうやら木は治療が必要なほどに傷んでいるらしい。ちらりと隣を見ると、ハリーは気まずそうに頭を引っ込めている所だった。

ロックハートの長話を纏めると、旅の途中で出会った『暴れ柳』に関する浅薄な知識を元に、スプラウト先生という専門家を差し置いて出しゃばりに来たということのようだった。

モアが興味なさげにロックハートの一人語りを聞き流していると、スプラウト先生から三号温室に入るようにとの指示が出された。モア達は同じく授業を受けに来たハツフルパフ生達と交じりながら三号温室に流れ込んだ。

「あれっ、ハリーは？」

ロンの声がして振り返ると、ハリーは温室の外でロックハートと何やら立ち話をしていた。サイン会の時もそうだったが、ハリーはロックハートに目を掛けられているらしい。

モアにとつての初めての授業は、ぎゃあぎゃあ泣き喚くマンドレイクの根っこを別の大きな鉢に植え替えることだった。マンドレイク、別名マンドラゴラは強力な回復薬の材料になるが、泣き叫ぶ声を耳にすると命を落とす危険がある代物だった。

今回の植え替えで使うのはまだ苗の状態のマンドレイクだったが、

それでも鳴き声を聞けば数時間気絶するなど危険なことには変わりないという。魔法学校の授業がこんなに危険を伴う物だなんて知らなかったモアは、暫くの間呆然と先生のお手本を眺めていたが、慌てて我に返ると誰よりも先に耳当てを付け直して身の安全を確保した。植え替えは四人一組になって行うことになっていたが、モアたちの所には四人組からあぶれたハツフルパフの男の子が一緒になり、五人一組で植え替えを行うことになった。ハツフルパフの男の子は何やら自己紹介をしていたようなのだが、耳当てを付けていたモアには何を言っているのか聞き取れなかった。

マンドレイクの植え替えは、見た目ほどそう簡単なものではなかった。

土から引つ張り出した途端、薄緑色の醜い赤ん坊——マンドレイクの根っこは喚くわ暴れるわで中々新しい鉢に収まろうとしなかったし、耳当てを付けた何も聞こえない状態の中で皆との連携を取ることが非常に難しかった。土から出たら泣き喚く癖に、大人しく土に戻ろうとしないとはどういうことかとモアは苛々しながら作業を進めた。

結局五人がかりでマンドレイクを鉢に収めた時には、全員が全員泥だらけで、ぐったりと疲れた状態になっていた。

薬草学の次の授業は変身術だった。今日の課題はコガネムシをボタンに変えるという下らないものだったが、いざ杖を使う段になってからモアはあることに気付いて声を上げた。

「あつー！」

「どうしたの、モア？」

「大変よ、ハーマイオニー。私、ベッドルームに杖を忘れてきたわ！」

ハーマイオニーはそれを聞くと、信じられないとばかりに口をあんぐりと開いた。

「モア……あなた、なにやってるの!? 魔法使いなんだから、杖は常に身に付けておくべきものなのよー！」

「そうなのね、今の今まであの棒切れを必要としたことがなかったから分かったわ! それにしても困ったわ、このままじゃあ授業

が受けられないわね！ うふふ！」

モアは良いことを閃いたとばかりに心底嬉しそうに言った。偶然が招いたことだったが、完璧な思い付きにモアは今日一番の笑顔を浮かべた。

だが、話を聞いていたのだろう、マクゴナガル先生が教壇から降りてモアの傍までやってきた。

「杖を忘れたのですか、クレイズ。本来ならグリフィンドールから五点減点するところですが、まだ魔法使いになって初めてのことでしょから大目に見ます。急いで寮に戻って杖を取ってくるように。道は分かれますか」

「申し訳ないけれど、さっぱり分からないわ！」

モアははきはきと答えた。マクゴナガル先生は毒気を抜かれた様子で、モアの隣に座っていたハーマイオニーに目を向けた。

「ではグレンジャー、着いて行ってあげなさい。出来るだけ急いで戻ってくるように。良いですね？」

ハーマイオニーは呆れる気持ちを押し隠しもせず立ち上がると、モアの腕を引っ張って教室の外に出た。

教室を出るなり立ち止まると、ハーマイオニーはモアに人差し指を向けた。

「ねえ。まさかとは思うけど、あなた、授業を受けたくなくてわざと杖を忘れたんじゃないでしょうね」

「そんなことないわ、本当に偶々なのよ。腕時計なら絶対に忘れないんだけど」

そう言いながらモアは左腕に付けた腕時計を見て——思わず二度見した。

「嘘でしょう、針がぐるぐる回ってるわ！ この時計、アレイヤから貰ったお気に入りだったのに！」

モアの腕時計はベルトがハートを模った細身のチェーンになっていて、文字盤にキラキラ光る透明のガラス石が埋め込んであるファンシーなものだ。その時計の針が、まるで時間合わせをするときのように反時計回りにぐるぐると回っている。

モアががっかりとばかりに肩を落としていると、ハーマイオニーが慰めるようにモアの腕をさすった。

「モア、残念だけどホグワーツの中では、マグルの道具の多くは使い物にならないのよ。もしかしなくてもその時計、電池式でしょう?」

「今時、機械式時計の方が珍しいわ……ああ、嘘でしょう!」

「仕組みの複雑な機械だと壊れてしまう場合もあるらしいけれど、時計なら、一時的に誤作動しているだけだと思うわ。素敵なデザインの時計だし、そんなに大事なものでないなら、アクセサリと思って身に付けていれば良いじゃない。さあ、杖を取りに行きましょう。出来るだけ急いでね」

ハーマイオニーの励ましは、気持ちの整理を付けるのにあまり役には立たなかったが、モアの傷心に染みるものがあった。確かに時計としては使い物にならないが、時計を貰った時の思い出はずっと身に付けていられるからだ。

グリフィンボール寮から杖を取ってきたモアは、教室に戻ると早速コガネムシをボタンに変える練習に取り掛かった。はつきり言って何の役にも立たない馬鹿馬鹿しい授業だとは思ったが、早々に課題を終えたハーマイオニーが熱心に指導してくれるものだから真面目に取り組まざるを得ない状況に陥っていた。

「ああ、駄目よ。この呪文で杖を振るときはもっと手首のスナップを利かせないと」

「ごめんなさい、もう一回やってみるわ」

「あと発音も直した方が良いわね、母音をもっとはっきりと言うのよ」  
「ああ、待ってハーマイオニー。コガネムシが逃げちゃうわ!」

ハーマイオニーのオーダーに応えながら這い回るコガネムシをテーブルの上に留めておくのは至難の業だった。呪文を唱えているうちにコガネムシは杖先から離れた所に移動してしまうし、何なら透明で小さな翅を羽ばたかせて飛び去ろうとしてしまうからだ。

ハーマイオニーは一度ボタンを変えたコガネムシを元に戻すと、モアの前で見本を見せるように再び呪文を唱えた。動きを止めたコガ

ネムシはみるみるうちに黒色の大きな脚付きボタンに変わっていき、マクゴナガル先生によつてグリフィンドールは十点を獲得した。

結局、授業を通して課題を成功させたのは、ハーマイオニーを含めて片手で数えられる人数に留まった。勿論モアはこの片手の中には入っていない。

目の前で魔法を見せ付けられてみて、正直マクゴナガル先生やハーマイオニーのことは凄いと思つたモアだが、かといつて自分で魔法を使いたい気持ちが湧いたかと言われれば全然だつた。それにモアは、自分のコガネムシを授業時間一杯散歩させてやつただけで、自分に魔法が使える気配などはまるで感じられないのだつた。

授業を終え、昼休みを迎える頃にはモアはすっかり疲れ切つていた。実習を伴う授業が続いた所為で、消耗は普通の学校に居た時よりももっともつと激しかった。

昼食の席でハリーが聞いた。

「どう、少しは魔法使いつていう自覚は出てきた？」

「全然。まだ魔法使つたことないし……使えるはずもないんだけど」

ハムとレタスのサンドイッチを摘まみながらモアはドライに言つた。

「今日の変身術は凄く難しかったから仕方ないよ」

「ハーマイオニーはいとも簡単にやつてのけたけどね」

ロンが機嫌悪く、テーブルの上に散らばるボタンを爪で弾いた。ハーマイオニーはロンが弾いたボタンを片手でキャッチすると、綺麗に並べ直しながら小首を傾げた。

「正直モアは良いところまで行つたのよ。杖の振り方もスペルもほとんど完璧だつたのに、どうして上手く行かなかつたのかしら」

「それは勿論、私が魔女じゃないからよ！」

「モアの奴、まだ言つてるよ。頑固だなあ」

「他の授業を受けたら案外気が変わるかも知れないよ。午後の最初の授業はDADA——闇の魔術の防衛術だ」

ハリーの言葉を確認するようにロンがハーマイオニーの時間割を

覗き込もうとした時、唐突にモアが大きな声を上げた。

「大変だわ……私、ブーティにご飯をあげないと！」

モアはサンドイッチの残りを急いで詰め込みながら立ち上がった。

「寮に戻るのね。道は分かるかしら？」

「流石にもう分かるわ、心配してくれてありがとう」

「僕達は多分次の授業まで中庭に居るから、餌やりが終わったらおいでよ」

「そうさせてもらうわ。じゃないと次の授業の教室が分からないものね。まあ、授業に出られなくても私は別に困らないんだけど」

大急ぎで大広間から出ようとした時、向かいからやって来るスリザリンの一团に見覚えのある顔を見つけたモアは、腕を目一杯伸ばすと左右にぶんぶん振った。

「あら、パンジー！ 会いたかったわ」

パンジーは一瞬だけぎくりと身体を強張らせると、観念したように肩を降ろして立ち止まった。

「うっ……あら、モアじゃない。昨日振りね」

「何だか元気がない気がするんだけど気の所為かしら」

「そうね、ごめんなさい。私、昼食がまだなの」

「あら、それは引き留めて悪かったわ。是非ランチを楽しんでね」

「ええ……ありがとう」

歯切れ悪く礼を述べると、パンジーは逃げるようにスリザリンのテーブルへと駆けて行った。モアはパンジーの背中を見送ってからグリフィンドール寮へ急いだ。

女子寮の寝室に入るなり、モアはブーティを探した。ベッドの下、トランクの陰、机といすの間などをくまなく覗き、最後にモアは窓際のカーテンに辿り着いた。

「こんな所に居たのね」

ブーティは窓とカーテンの間に座ってじっと外を見詰めていた。視線の先にはホグワーツ城を取り巻く雄大な自然が広がっている。モアはブーティの隣に座って視線を追いながら、小さな黒い頭を撫で



た。

「外に出たいのかしら。でもあなたはまだ子猫だから駄目よ。もう少し大きくなったら出してあげるわね」

夏休みの間はモアと一緒に家に籠りつきりだったブーティだ。ペットシヨップにいた頃と比べても体重は増えてきたようだし、外に興味を持つなど順調に成長しているらしい。そろそろふやかしたカリカリをご飯にあげ始めても良いかも知れない、と思いながらモアは餌やりの支度を始めた。

ブーティに餌をあげ終えたモアが中庭に出た時、辺りはちよつとした騒ぎになっていた。人垣に囲まれた中でドラコとロンが向かい合っており、ロンがドラコに杖を向けていた。二人は見るからに険悪な雰囲気、今にもロンが呪文を唱えそうな勢いだった。

モアが誰か先生を呼びに行った方が良いかと悩んでいたところ、トルコ石色のローブをなびかせてロックハートが大股でやって来た。

「一体どうしたかな？ サイン入りの写真を配っているのは誰かな？

聞くまでもなかった、ハリーだ！」

ロックハートは何か言いかけたハリーの肩に腕を回すと、カメラを持った少年に向かって笑い掛けた。

「さあ、撮りたまえクリービー君。最高のツーシヨットだ。二人のサインも付けよう」

ロックハートに呼ばれたのはモアが昨日の船で一緒だったカメラ小僧の男の子だった。男の子はもたついた手でカメラを構えると、これ以上ないほどの光栄だと言った表情で写真を撮り始めた。

午後の始業を告げるチャイムが鳴り響いた。ロックハートは皆に解散を告げ、ハリーの肩を抱いたまま城の中へと戻っていった。モアは散らばり始めた人垣から出ると、教科書を抱えて立ち尽くしているハーマイオニーに声を掛けた。

「あなた達、一体何をやってたの？ ハリーがサイン入り写真を配ってたって本当？」

「それがちよつとした問題があつて、マルフォイが……」

ハーマイオニーの視線を辿るが、すでにドラコはどこかに消えた後だった。モアは肩を竦めると怒りの矛先を持って余っていたロンの背中を叩き、人の流れに沿って一緒に城の中へと戻った。

ロックハートの授業についてモアが言えることは何もなかった。初めの小テストでは好きな色だの、好みの女性のタイプだのといった知性を欠片も必要としない問題が五十四問も続いたし、その後はピックアップ小妖精なる群青色の喧しい生き物を、授業時間一杯放し飼いにして教室内に混乱を招いただけだった。

「今の勉強よりもっと必要なことを学ぶため」に転校させられたはずのモアだが、今の所、モアに必要そうな授業はこれと見比べて見当たらなかった。それどころかあまりにもくだらない授業が続いた所為で、モアは初日にしてうんざりし始めていた。

終業のチャイムが鳴った後、モアは教科書を揃えているハーマイオニーに小声で耳打ちをした。

「ねえ、この学校って、本当に大丈夫なの？」

「何を心配しているのか分からないけど、大丈夫よ。ロックハートは素敵な先生だわ」

顔だけ見れば確かに素敵かも知れないが、モアはことロックハートに関してはハーマイオニーの見識が当てにならないということに密かに認識した。

## (6) 補習授業

大広間での夕食も終わりに近づいた頃、マクゴナガル先生が硬質な靴音を響かせながらモアの元にやってきた。

「クレイズ。以前手紙で予告した通り、あなたは補習授業を受ける必要があります」

マクゴナガル先生は補習用の時間割表をモアに手渡した。

「補習は早速今夜から始まり、毎日行われます。まずは変身術の授業です。夕食を終えたら私の研究室にいらつしやい。持ち物は杖と一年生用の教科書、以上です」

昼間の授業とは違って、補習授業は一年生用の教科書に沿って行われるということのようだ。フロアリッシュ・アンド・ブロッツで高いお金を出して買った教科書がいよいよ日の目を見ようとしているのだった。

デザートのフルーツ・フルを突いていたハーマイオニーが心惹かれた様子で言った。

「先生達と一対一で授業を受けられるなんてモアが羨ましいわ」

「晩御飯の後も勉強がしたいだなんて君、正気じゃないよ」

ロンはまるで自分が補習を受けるかのように嫌な顔を見せた。

モアがマクゴナガル先生の研究室を訪れると、先生はにこりともせずモアを迎え入れた。この研究室には無駄なものが一切なく、書類なども綺麗に整頓されていて、厳格なマクゴナガル先生らしい部屋となっていた。

「初めに聞いておきますが、夏休みの間に教科書に目を通したりしましたか？」

「いいえ、全く」

ダイアゴン横丁で買った荷物は全て纏めて物置に押し込んでいたモアだ。教科書に目を通すだなんてハーマイオニーみたいなことをやっている訳もなかった。

「では、これからはまめに目を通すようにしてください。一年分の遅

れを取り戻すことは容易ではありませんから、心しておくように」

「はい、先生」

モアは気のない声で相槌を打った。

それから二人は隣の教室へ移動した。誰も居ない教室は昼間授業を受けた時とは異なっていてしんと静まり返っており、モアは何となく落ち着きのない感じに襲われた。

「変身術は基礎の積み重ねが肝要、一年時の授業を受けていないあなたが上手く行かなくても当然です。昼間のことはともかく、これから補習できつちりと学んでいきましょう」

「はい」

「生物を別のものに変身させたり、逆に何かを生物に変える呪文はとても難しいものです。二年生の授業ではこうしたものも扱いますが、昼間の授業で実感した通り、今のあなたにはとても難しいことでしょう」

モアは机の上で逃げ回るばかりだったコガネムシのことを思い出した。追い掛けても追い掛けてもコガネムシは止まってくれないし、やっと止まったと思ったら、今度は翅を広げて飛んで行ってしまった。そういう意味で言えば、生きている物を自分の思い通りにすることの難しさはたつぷりと実感していた。

マクゴナガル先生の難解な板書きをノートにとった後、ついに実習が始まった。

「では、まずはマッチ棒を針に変えるところから始めましょう」

そう告げるなり、マクゴナガル先生は机の中からマッチ箱を取り出し、モアの目の前に置いた。モアは箱から赤い燐の付いたマッチを手にとると、指示を待つように背の高いマクゴナガル先生を見上げた。「肝要なのはしっかりと完成形をイメージすることです。どんな長さの針なのか、太さはどれくらいか、どれほど鋭いのか。ディテールに至るまで想像し、正確に再現するのです。こうしたプロセスはとかく軽視されがちですが、特に変身術では想像力が物を言うと言っても過言ではありません。まずは私が手本を見せます」

マクゴナガル先生はモアの持っていたマッチに杖先を向けると、呪

文を唱えて杖を一振りした。すると、どういうことだろう。赤い燐の部分が見るみる鋭くなつていき、木の部分も細い銀色に変わり、瞬間にマツチ棒は六号サイズの刺繍針に変化した。

「まあ、まるでマジックだわー！」

モアは驚いて手の中の刺繍針を見詰めた。

「そうでしょうとも、マジックなのですから。さあ、次はあなたの番です」

凄い手品を見て感激しても自分でやりたいと思わないのと同じように、凄い魔法を見てもモアにはちつとも自分でやってみたいとは思えなかった。それでも補習授業は進んでいくもので、杖の振り方が良くないと直され、発音が良くないと正され、イメージが足りないと思われる、気づけばモアは三十五回目のトライも失敗したところだった。

マクゴナガル先生は昼間のハーマイオニーに負けず劣らず熱心に指導してくれたが、マツチ棒はいくら待てどもマツチ棒のまま、銀色に代わりも鋭くなりもしなかった。

これに見かねて、マクゴナガル先生は口を出した。

「もう一つ大切なのは、出来ると信じてやることです。術者の自信は魔法の成否に大きく影響します」

「でも、先生。私は魔女じゃないので出来なくて当然だと思います」

モアが口を挟んだ。マクゴナガル先生はモアの言葉を受け止めるように深く頷いた。

「そうですね。あなたの言う通り、今はまだ魔女と呼べる状態ではないかも知れません。ですが、あなたはちゃんと魔女の卵ですよ。 Hogwarts の入学許可証が届いたことが何よりの証です。今後は出来なくて当然などと言う考えは通用しないと思ってください」

マクゴナガル先生は厳しい目でモアを見詰めると、気持ちを切り替えるように手を叩き合せた。

「さあ、練習を続けましょう」

それから四十回、五十回と失敗が続き、そうして何回杖を振ったか分からなくなり始めた頃、マクゴナガル先生が補習授業の終了を告げ

た。結局のところ、モアはマツチを銀色にすることも尖らせることも出来ずに練習を終えた。

「マクゴナガル先生が言った。」

「今日の練習に使用したマツチはお貸しします。空き時間などによく練習しておくように。何か分からないことがあれば聞きに来てかまいません」

「はい、先生。ありがとうございます」

「魔法が上手く行かなくてもあまり気を落とさないように。この一時間であなたは随分と成長しましたよ」

「そうですね、そうだと良いんですけど」

モアは心で思っていることと全く逆のことを言った。魔法などという訳の分からないものがまるで使えない今の状況は、モアにとつて願ったり叶ったりというところだった。術の掛け方に関しては確かに著しい成長を遂げていたが、何度やってもモアの術は効果を発揮しなかったのだ。

グリフィンドールの談話室に戻ると、モアはウィーズリーの双子に掴まった。

「よう、モア。聞いたぜ、補習授業はどうだった？」

「さっぱりよ。まあ、当然と言えば当然なんだけど」

「一体何を練習したんだい？」

「マツチ棒を刺繍針に変える練習」

モアはうんざりしながら言った。

「ああ、あれか。俺たちも一年生の時にやらされたな」

「マツチ棒を刺繍針に変える必要性なんてあるのかしら」

すると双子の片方が考える素振りを見せた。

「そうだな。ちよつと縫い物をしたんだけど手持ちに裁縫道具がない時なんか便利だぜ」

「そんな限定的な状況、そんなになんもないんじゃないか？」

「ま、難しく考えないことだ。折角ホグワーツに来たんだ、もっと楽しまなきゃ勿体ないぜ」

確かに、魔法学校に通うなんて経験は早々出来るものではないのか

も知れない。モアは知らないことだが、ただでさえホグワーツは選ばれた者しか通うことが出来ない学校なのだ。双子の言うことは尤もだったが、生憎ながらモアはこれを楽しめるほどの余裕は持ち合わせていなかった。

次の日の最初に行われた授業は呪文学だった。今日の課題は肥大呪文と呼ばれる、対象物を大きくさせるための呪文だった。担当教諭のフリットウィック先生は大きな熱意を以ってモアの面倒を見てくれたが、矢張りモアの呪文で魔法の現象が起きることはなかった。

その後を受けた魔法史の授業は思ったより楽しめた。先生がゴーストだったので初めこそモアはびくびくしていたが、授業中にこれといってモアの生命が脅かされることはなかったし、奇想天外な魔法界の出来事自体は滑稽で、まるでユーモア小説の内容だと思えば面白くも感じられた。もつとも、ビンズ先生が教科書を読み上げる様は単調で退屈なものだったが。

午後は一年生に混じって飛行術の授業を受けた。モアがいくら上がれと命じても箒はころりとも動かず、次々に飛び立つ一年生達を尻目に、ただただ声を発し続けて喉が疲れただけだった。

この日の補習授業は魔法薬学だった。魔法薬学はモアがまだ受けたことのない授業で、モアが地下牢を訪れると鉤鼻のスネイプ先生が陰気な表情で出迎えた。先生は今日も喪に服したかのように全身真っ黒で、顔は内臓か何処かが悪いみたいにし気色だった。

スネイプ先生は地下牢に染み渡るような声で語った。

「魔法薬学は杖を振り回したり、呪文を唱えたりする授業とはまるで違う。もつと繊細で緻密なものだ。材料の切り方、入れるタイミング、鍋の加熱時間、それら細かな要素が複雑に絡み合う深遠な学問である」と心してもらいたい」

「はい、先生」

モアの相槌に胡乱げな視線を向けると、スネイプ先生は一つ咳払いを挟んで言った。

「まずはおできを治す薬から始める。この薬の材料はなんだ、クレイ

ズ」

「先生、分かりません」

モアは平然と答えた。スネイプ先生は片眉を吊り上げた。

「事前に教科書を読んでくるようなことはしなかったのかね？」

「ごめんなさい、していないわ」

「簡単な労すらも惜しんだグリフィンドールから一点減点。では教えてやろう、教科書を開け」

モアが教科書を開くと、スネイプ先生は地下牢をゆっくりと練り歩き始めた。

「必要な材料は四つ。干しイラクサ、蛇の牙、角ナメクジ、山嵐の針……何をぼさっとしている。ノートを取れ、クレイズ。グリフィンドールからさらに一点減点」

それからのモアは先生の説明に耳をそばだて、必死になってノートを取り続けた。魔法薬の原料が持つ性質、下拵えの方法、調合の手順、出来上がる薬の効能、そして副作用。そうしてノートのページが真っ黒になった頃、モアの頭にばちんと閃くものがあった。

「分かったわ、つまりこれってお料理みたいなものなのね！」

ホグワーツに来る前は毎日自分で食事を用意していたこともあって、モアは調理実習なら自信があった。スネイプ先生は苦虫を噛み潰したように顔をしかめた。

「幽玄な魔法薬の世界を料理と一緒にするなど、愚かな」

「でも材料を切ったり煮込んだりして作るんでしよう？　ならきつと近いものがあると思うの、上手くやれる気がするわ！」

「浮かれるのは結構だがそれほど容易いものではない、甘く見るな」

だが、モアは宣言通り上手くやった。確かに慣れない材料を扱ったこともあり刻み方や火加減などは難しく感じたが、こまめに質問をしながら下手なアレンジをせずレシピ通りに作れば良いだけなので、モアにとってはそれほど難しいものではなかった。

スネイプ先生はモアの作った薬を見て苦渋に満ちた顔を浮かべたが、最終的にはグリフィンドールに二点の加点をくれた。

誰かに料理を教わったことのないモアにとって、人に教わりながら



作る薬品というのはとても興味深く、楽しいものに思えた。

談話室に戻ってこの話をする、ハリー達は大層驚いた。

「マーリンの髭！ あのスネイプがグリフィンボールに加点するなんて、明日は槍が降るんじゃないかな」

「よっほど出来が良かったのね。私だってスネイプから加点を貰ったことなんて一度もないもの」

「僕はモアが積極的に鍋を焦がしにかかるんじゃないかって心配してたんだけど」

ハリーが少し茶化して言った。

「私だって課題通りに作らなきゃいけない時はちゃんとやるわ！

……そうでなければ自分の好み通りに作るけど」

「でも、これで分かったよ」

ロンが得意げに言った。

「スクイブは簡単な魔法薬も作れないんだ。スネイプの課題を成功させたモアは間違いなく魔法族だよ」

「全然嬉しくないわ！ 思い切って失敗すれば良かったのかしら」

「馬鹿なことを考えていないで、ほら、呪文学の復習をしましょう。今日習った肥大呪文はきつと小テストがあると思うの」

「うえー、告知もされてないテストのことなんて考えたくないよ。僕はハリーとゴブストーンの続きをやるから、復習は君たちだけでやりなよ」

結局ハリーとロンは肥大呪文の復習には参加しなかった。モアはハーマイオニー指導の下、また不毛な杖振り練習に打ち込む羽目になった。モアが練習に使った林檎は肥大することも縮むこともなく、当然のようにただあるがままの林檎の形を保ち続けた。

## (7) 修辞学の棚にて

授業・授業・授業で日が暮れて、補習で夜更けを待ち、補習の後はハーマイオニーの指導を受けるといふ日々が何日も続いた。一週間も経てば、モアは勉強漬けの生活サイクルにもすっかり慣れてきた。

相変わらず杖を振る授業はからつきしだったが、実技科目以外はそれなりにこなせることが分かると、ハーマイオニーは安心して息を吐いた。二年生の魔法薬学の授業では加点こそ得ることは出来なかったが、めげない質問攻撃を経て、モアはスネイプ先生を黙らせるに足る出来の薬を作ることが出来た。

そうして迎えた金曜日の朝、朝食を摂っていたモアの元に一羽のふくろうが飛んできた。ふくろうはモアの皿の上に小さなカードを落とすと、上空をすーっと旋回してまた飛び去って行った。

モアが皿の上でスクランブルエッグに塗れたカードを拾い上げると、カードには丸っこい走り書きでこう書かれていた。『今日の昼休み、図書室、修辞学の棚で』

「ねえ、これって呼び出してことかしら」

すると、隣でオレンジジュースを啜っていたラベンダー・ブラウンが色めきだった。

「モア、それってもしかしたら愛の告白じゃないかしら」

「ひよっとしたらひよっとするかも知れないわ。差出人は書いてないの？」

ラベンダーの向こうでソーセージを切り分けていたパーバティ・パチルも身を乗り出してきた。だが、裏返してみてもカードには誰の名前も書かれていない。

ラベンダー達に呼び出しの結果を教えるとの念入りな約束を結ばされて、モアは呪文学の教室に向かった。

人生の役には立ちそうもない授業を幾つか終えて、昼休みになった。モアは手早く昼食を済ませると、例のカードを片手に一人で図書室に向かった。ホグワーツの図書室に来るのは初めてだったが、事前

にハーマイオニーに地図を書いてもらっていたお陰で難なく辿り着くことが出来た。

修辞学の棚は図書室の奥の方にあつて、誰も立ち寄らないのか本棚には薄らとした埃が積もっていた。

本棚に寄り掛かりながら十分ほど待たただろうか。誰かの小さな足音が聞こえて、モアは顔を上げた。おかつぱ頭を揺らして現れたのはパンジー・パーキンソンだった。

「来たわね、モア」

「パンジー！ わざわざ手紙で呼び出したりしなくても普通に話しかけてくれれば良かったのに！」

「そういう訳にはいかないのよ、大声出さないで！」

パンジーは素早く周囲に視線を走らせた。そうして自分たちの他に誰も居ないことを確認すると、ほっとしたように息を吐いた。

「前に話したと思うけど、スリザリンとグリフィンドールは……ちよつと色々と障りがあるのよ」

「ねえ、パンジー。私、あなたのことは友達だと思ってるわ」

これを聞くとパンジーは急に興奮して言った。

「私だつて出来ることなら友達だと思いたかつたわ！ あなたは聖28一族じゃないけどクレイズだし、本当なら穢れた血のグレンジャーなんかじゃなくて私が魔法界について色々レクチャーしたかつた。でもあなたは、グリフィンドールなのよ！」

幾つかの気になる言葉を無視して、モアは落ち着かせるかのようにパンジーの両手を握り締めた。

「グリフィンドール生とスリザリン生が仲良くしたらいけないなんて誰が決めたのかしら。私達ならきつと寮の対立を超えて仲良く出来ると思うの」

だが、パンジーは無理だとも言うようにぶんぶんと首を横に振つた。

「ねえ、今からでも遅くないわモア、スリザリンに来ない？ 私、スネイプ先生に相談してみようと思うの」

「相談つて、まさか寮を変われないかつてこと!？」

「そうよ。スネイプ先生はスリザリンの寮監だもの」

ちよつと冷静に戻りながらパンジーが言った。パンジーは少しだけ上がった息を鎮めるように一度大きく深呼吸をした。

「モアは杖を使う授業は駄目だって聞いたけど、代わりに魔法薬学が出来るみたいだから、先生もきつと良くしてくださいるわ」

魔法界で出来た最初の友達と同じ寮になる。これはモアにとって少なからず魅力的な誘いだった。グリフィンボールではハーマイオニーに随分と世話になっているが、公平な彼女ならモアがスリザリンになつてもきつと仲良くしてくれるだろう。

モアが迷っていると、パンジーは駄目押しのように言葉を重ねた。

「あなたの前のクレイズ、つまりあなたのお母様はスリザリンだったのよ。それにあなたの組み分けの時、帽子がスリザリンって言いかけたのを私、しつかり聞いてたんだから！」

モアは耳を疑った。

「待って、私の母さんもこの学校に通っていたの!?!」

「当たり前じゃない。イギリスに住む魔法使いの子供は皆ホグワーツに通うのよ。多分、あなたのお父様もホグワーツのはずよ」

パンジーはさも当然とばかりに言った。

家族について知らなかったことがまたもや他人の手によつて一つ判明してしまつたが、これはモアにとつて驚くべき情報だった。母親とこんな話はしたこともなかったし、あの冷徹な母親に子供時代があつたなんてモアは考えたこともなかった。

モアは母親がかつてスリザリンに居たと聞いて、転寮に傾きかけた自分の気持ちが急速に冷めていくのを感じていた。

「パンジー。お誘いは嬉しかったけど、やっぱり転寮は止めておくわ」

「どうして!?! スリザリンは身内に篤い、団結力のある素晴らしい寮よー!」

「簡単な話だわ。私、母さんと同じ寮は嫌」

正直な気持ちを告白すると、パンジーが息を呑んだ。

「もしかして、モア、お母様との仲が悪いの」

「仲が悪いなんてものじゃないわ」

モアはちよつとだけ皮肉に笑って言った。

「私と母さんの間にはね、そもそも悪くなるほどの仲が存在しないのよ。私が小さい頃から母さんはずっと仕事漬けで、私はずっと無視されてきたの。今更母さんの背中を追いかけるような真似なんてしたくないわ」

これを聞くと、パンジーは言葉を失くしたように黙り込んだ。

始業式の日に関親が見送りに来ていたことから考えて、恐らくパンジーは円満な家庭環境で育ったのだろう。だから、モアの複雑な気持ちとは分らないに違いない。

モアは少しだけ寂しい気持ちに駆られたが、気を取り直すように笑顔を浮かべた。

「あなたの気持ちは本当に嬉しかったわ、パンジー。私のことを気に掛けてくれてありがとうね」

パンジーは納得がいかないという表情を浮かべながら、モアに窺うような視線を向けた。

「本当にグリフィンドールに留まるつもり？ 気持ちは固いの？」

「別にね、グリフィンドールに拘りがあるわけじゃないの。正直なところ、あの人と同じ寮じゃなければ何処でも良いわ。それにいつまでもこの学校に留まっているつもりはないわけだし」

「そう、それは残念だわ」

パンジーはがっかりしたように肩を落とすと、モアに背中を向けた。

「本当に残念だけど、さようなら、モア」

「パンジー？」

パンジーはモアの声が聞こえなかったかのようにずんずんと歩き出した。そうして書架の横を曲がると、その姿はすぐに見えなくなっってしまった。

取り残されたモアは、何か重大なミスをしてしまったような気持ちに駆られていた。さようならを言った時のパンジーは何か決意をしているように見えたし、何より、モアの呼びかけにも応えずに行ってしまったからだ。

パンジーを引き留めるべきだったんじゃないかと後悔しながら、書棚の間を出ようとして——モアは誰かにぶつかって尻餅をついた。

「うわっ」

「きやつ、ぐめんなさい」

モアが立ち上がるとうすると、目の前にすらりとした白い手が差し出された。モアは思わず手の主を見上げる。相手はアツシユブロンドの小柄な男の子だった。

裏地が青いレイブンクローのローブを羽織った彼は、モアの顔を見るなり、あつ、と小さな声を上げた。

「君、俺のこと覚えてる？ 始業式の日、ホグワーツ特急に荷物を載せるのを手伝った……」

正直なところすっかり忘れていたが、モアはすぐに思い出したような振りをした。

「ああー。あの時はありがとう、助かったわ」

モアは白い手に引つ張り上げられて立ち上がる。それからローブの裾ををばたぱたと叩いて、レイブンクローの男の子を見詰めた。明るいブルーの瞳がこちらを見詰め返した。

「あなた、修辞学の棚に用があるの？」

「用があるってほどじゃないよ。暇つぶしに面白そうな本を探してるところなんだ」

「面白そうな本……修辞学の本なんて面白いのかしら」

「さあね。読んでみてから考えるよ」

男の子は本棚に積もった埃に指を滑らせると、ふうつと息を吐いて指先の埃を舞い散らせた。

「俺はエミール・モア、二年生」

「私はモア・クレイズよ」

「知ってる。組み分けの時に見てたから」

「そうなの。よろしくね、エミール」

「あのさ、ちよつと小耳に挟んだんだけど、君が魔法を全く使えないって本当？」

エミールは淡白な調子で問いかけた。モアは自分の噂が知らない

男の子にまで出回っていることにちよつとびっくりしながら返した。

「そうよ。何か問題でも?」

エミールは驚いたように目を見開くと、疑わしいとばかりにモアの顔を覗き込んだ。

「悔しくないの?」

「全然悔しくないわ。だってそもそもこの学校に居ること自体が間違いないんだもの」

するとエミールは大層驚いた顔を見せて、それから論外だとも言うように鼻を鳴らした。

「俺だったら悔しくて夜も眠れないよ。はつきり言つて、今の君、相当格好悪いよ」

「格好悪いですつて!?!」

モアはここが図書室だということも忘れて大声を上げた。エミールは何てことないとばかりに頷いた。

「そうだよ。出来ないのが当たり前で、そこに胡坐を掻いているなんて格好悪いよ。君はもつと必死になってみるべきじゃないかな」

「でも私は、魔法使いになんてなりたくないの!」

「魔法使いの学校を出たからって、必ず魔法使いにならなくちゃいけない訳じゃない。卒業してから魔法を使わない生活に戻るっていう選択肢だつてあるんだ。でも今の君は、ただ嫌がつて目の前の問題から逃げているようにしか見えない」

「なんですつて!?!」

モアは、このままホグワーツを卒業するなんてことは一ミリだつて考えたことはなかった。モアは自分が魔女なんて馬鹿げたものじゃないことを証明して、それから前の学校に戻るつもりだったからだ。それを目の前の問題から逃げているなどと言われるとは思つてもみなかった。

モアは憤然としてエミールに噛み付いた。

「どうしてあなたにこんなこと言われなくちゃならないの!」

「どうしてつて……君のことが気になってたから。ホグワーツ特急に乗る時、新入生は本当なら皆嬉しくて堪らないはずなのに、君はあんな

まり嬉しそうじゃなかった。だからかな」

「エミールはモアの怒りなど素知らぬ様子で悪びれずに言葉を継いだ。」

「これがお節介だつてことは分かつてる。でも折角ホグワーツに来たんだ。君は、もう少し前向きに頑張つてみるべきだと思ふよ」

言うだけ言うとエミールは平然と書棚に向かい始めた。前言通り、面白そうな本を探しているのだろう。そのあまりにもあっけらかんとした調子に、モアは言い返す気持ちがだんだんと削がれていくのを感じた。

エミールを残して図書室を後にすると、モアは自分の胸の中にもやもやしたものが残っていることに気が付いた。冷静に考えてみるとエミールの言うことにも一理あるように思えて、それが更に胸の中のもやもやを複雑な物に変えていった。

こんな気持ちのまま談話室に戻る気にはなれなくて、モアは階段を一気に下まで降りると、校舎の外に出た。金曜日の午後は空き時間だから、一人でゆつくりと考え事するには最適だった。湖の方まで足を伸ばすと、大イカが頭を出して日光浴しているのが見えた。

湖畔に腰を下ろすと、穏やかな水面の揺らめきが目に入った。じつとして眺めていると、この水面のように気持ちが穏やかになっていくような気がした。

正直なところ、ホグワーツがモアが転入前に思っていたほど悪い学校ではなかった。確かに授業内容は下らないし、何の役に立つのか分からない技術ばかり学ばせられている気はするが、先生たちは皆、一向に魔法が使えるようにならないモアにも熱心に指導してくれていた。

仲のいい友達も出来た。ハーマイオニーはよくモアの面倒を見てくれているし、規則破りの常習犯だというハリーとロンも、初めに思っていたよりも気さくで話しやすいタイプだった。尤も、ハリーに關してはサイン入り写真を配ったり、仲が良いはずのロックハートを避けていたりとよく分からないところがあつたが。

でも、ホグワーツでの生活に慣れてきても、モアの心は、やはり前



の学校で過ごした日々のごとで一杯なのだった。ふとした時に考えるのはいつも、ここにアレイヤが居たらどんなことを言うだろう、とか、ヒューイならきつと授業中にここで手を挙げるだろう、とかそんなことばかりだった。

ホームシックにも似た気持ちに駆られながらしばらくそのまま座っていると、校舎の方から無遠慮な足音が近づいてきた。

「おっと、そこにいるのはスクイブのモア・クレイズじゃないか？」

何処かで聞いた声がして、振り返る。そこにいたのはドラコ・マルフォイだった。何度か授業では顔を見かけていたが、今日は子分だかボディーガードだかの二人は連れていないようだった。

ドラコは腕組みをすると挑発的な眼差しでモアを見下ろした。

「君のことはちよつとした噂になってるよ、スクイブだなんてクレイズの恥晒しだって。がり勉のグレンジヤーと必死になって杖を振らなくて良いのかい？」

「今はそんな気分じゃないの。悪いけど放っておいて。それにスクイブは魔法薬が作れないみたいだから、私はスクイブじゃないらしいわ……残念だけど」

「ちよつと魔法薬が作れるからってなんだい、杖が使えないんじや魔法使いなんて言えないよ。僕だったら恥ずかしくてすぐにでも学校を辞めさせてもらうね！」

あからさまな嫌味を聞いて、モアは今気づいたとばかりにドラコを見上げた。

「あなた、もしかして私を怒らせたいの？　なら無理よ、だって学校を辞めたいのは本当のことだもの」

「自分が恥晒しだって自覚があるのかい、そりやいいことだ」

「違うわ！　前の学校に戻りたいのよ！　魔法なんて知らない、穏やかで温かい生活に！　でもどうしたらいいか分からないの！」

思わず叫ぶとモアの目からは一筋涙がこぼれた。ドラコはちよつとぎよつとしたように周りを見回すと、ほとんど反射的と言っていい速度でポケットからハンカチを差し出した。

モアはハンカチを受け取りながら、しかしそれを使わずにぎゅつと

握り締めた。

「私の父さんと母さんも魔法使いなんですって」

「魔法使いの家に生まれたんだ、当たり前だろう」

「でも私、何にも知らないの。碌に話したこともないし」

「話したことがないだって？ 両親と？」

「そうよ」

「僕の父上と母上は魔法界についてのあらゆる知識を与えてくださった。僕がマルフォイ家の跡継ぎとして恥じないように。君は違うのか？」

「ええ。とっても良いご両親なのね、羨ましいわ」

モアは心からの羨望を込めて言った。ドラコは難しい顔を浮かべていたが、やがてはたと気付いた様子でモアが握り締めていたハンカチをひったくった。

「ねえ。前の学校に戻りたいって思うことはそんなにおかしなことかしら」

「当たり前だろう。魔法使いの子供は皆ホグワーツに通いたがる」

「私はただ、アレイヤや皆と同じ学校に通いたいだけなのに……」

モアの育った地域では地元の公立校に通う子供が多かったこともあり、小さい頃から馴染みの面々がそのままモアのクラスメイトだった。それこそ皆が皆、竹馬の友と言って差し支えないだろう。家族よりも長い時間を一緒に過ごしてきた友達と離れたくないという思いは、ホグワーツに來た今でもモアの心に強く根を張っていた。

「でもエミールに言わせると、私は目の前の問題から逃げているだけなんですって」

「知ったことか。言いたい奴には言わせておけ。どうせ君はスクイブなんだ、何処へ行っても何か言われるに決まってる」

ドラコは口に出してから、しまったというような顔をした。

「相談に乗ってくれてありがとう。あなたって意外と良い人ね」

「相談に乗ったつもりはない。君が勝手にぺちやくちや話してただけだろう！」

「そうね、そうだったかも」

くすくすと笑いが込み上げてくる。ドラコは奇妙な物でも見るようにモアを凝視した後、やっていられないとでも言うように深々と溜め息を吐いた。

「なんだか少し話したら楽になったわね。付き合ってくれてありがとう、ドラコ。ハンカチを皺くちやにしちやってごめんなさい」

「ふん、こんなもの魔法でどうにでもなるさ」

「ありがとう。やっぱりグリフィンドールとスリザリンで対立するなんて馬鹿げてるわ。パンジーともちゃんと仲良く出来るように、頑張らないと」

「せいぜい頑張ればいいさ、僕は無駄だと思うけどね」

ドラコは背を向けると、校舎の方に向かって歩き始めた。遅れて立ち上がったモアは、その後ろ姿を追いかけながら校舎へと戻っていた。

## (8) 魔力検査

モアがホグワーツに転入して最初の土曜日がやってきた。今日のモアは、午前中にハーマイオニー達と一緒にハグリッドの小屋を訪れる約束になっていた。何となく目が冴えて珍しく早起きをしていたモアは、徹夜明けのブーティと談話室で戯れることで朝食までの時間を潰していた。

動き回る猫じやらしに飛び付こうとしたブーティが盛大なジャンプを披露した時、モアは見たことのない深紅のローブをまとったウッドが男子寮から出て来るのを見た。

「あら、こんな朝早くからどうしたの、オリバー」

ウッドがこちらに近づいてきた。

「おはよう。クイディッチの練習だよ。ちょうど良い所に居た。アリア達を起こしてきてくれないか?」

「アリアアって?」

「アリア・スピネット、四年生。クイディッチのチェイサーだよ。ほら、男子は女子寮には入れないから」

モアは猫じやらしを動かすのを止めながらこっくりと頷いた。

ウッドは早口で言葉を継いだ。

「それから同じく四年生のアンジェリーナと三年生のケイティも頼む」

「待って待って、一度に言われても覚えられないわ! 四年生が二人と三年生が一人で良いのよね」

モアは再三の確認を取ると、女子寮に戻って三人を探し始めた。間違えて何名か別の人を起こしてしまったが、十分も経たないうちに無事目的の三人を眠りから覚ますことが出来た。

モアが談話室に戻るとウッドは既におらず、男子寮からウィーズリーの双子が出て来るところだった。ウッドと同じ深紅のローブをまとった双子は、モアに朝の挨拶を述べると、重たげな足取りで談話室から出て行った。どうやら彼らもクイディッチの選手らしい。

程なく先程モアが起こした女の子達も女子寮から出てきたが、皆が

皆まだ夢うつつといった様子で、今まで会ったクイディッチの選手でしやつきりしていたのはウッドただ一人だけだった。

モアが一旦ベッドルームに戻って猫用ブラシを取ってくると、談話室の入り口ではハリーが前にも見たカメラ小僧の男の子に捕まっているところだった。ハリーはウッド達と同じ深紅のローブの上に黒いマントを羽織っていた。

「ごめんね、コリン。急ぐんだ——クイディッチの練習で」

肖像画の穴をよじ登りながら告げるハリーにコリンが追い縋った。

「うわっ、待ってよ！ 僕、クイディッチって見たことないんだ！」

そこで、困ったように振り返ったハリーとモアはぼつちり目が合った。

「やあ。おはよう、モア」

「こんな朝早くから大変ね、ハリー」

ハリーは寝ぼけ眼を擦りながら大きな欠伸をこぼした。顔の上では眼鏡が盛大にずれている。

「ロンには書置きしたんだけど、今日の午前中はハグリッドの小屋には行けないかも知れない。それじゃあ」

「ねえ、君ってここ百年間で最年少の寮代表選手なんでしょう！  
ねっ、ハリー！」

小バエのように纏わりつくコリンにうんざりした様子でハリーは肖像画の穴に入った。コリンは瞳をキラキラと輝かせながらその後続き、談話室を出て行った。

そういえばハーマイオニーの話によれば、ハリーはクイディッチというスポーツで、シーカーと呼ばれる重要なポジションを担当する優秀な選手なのだった。彼もウッドが言っていた練習とやらに行くところだったのだろう。

尤も、モアはクイディッチについてはルールなどをパンジーから聞きかじった程度でしか知らないの、ハリーがどれほど優秀な選手なのかは想像するしかなかったのだが。

クイディッチの選手達が談話室を出て行ってからしばらく、ロンが

男子寮から降りてきた。ロンはブルーティを毛繕いしていたモアを見つめるなり、挨拶も抜かして話しかけた。髪の毛にちよつと寝癖が付いている。

「君って早起きなんだね、モア」

「今日はたまたまよ。それよりハリーの書き置きは見た？」

「クイディッチの練習に行つたつて奴だろ？ ウッドもよくやるよな」

そこへハーマイオニーが女子寮からやってくると、三人は肖像画の穴を抜けて大広間に向かった。休みの日だから皆の出足が遅いのか、大広間はまだ閑散としていた。グリフィンドールのテーブルには名前を知らない上級生が陣取っており、皿に山盛りにしたマッシュポテトを幸せそうに頬張っているのが目に付いた。

席に着くなり、ハーマイオニーはトーストにたっぷりのマーメイドを塗りつけながら言った。

「折角だから、今から朝食を持ってハリーの練習でも見に行きましょうか」

「そりゃ良いや！ モアはクイディッチを見たことないよね？」

ロンはとっておきの思い付きだとばかりに膝を打ち鳴らすと、ハーマイオニーに倣ってマーメイド・トーストを作り始めた。

モアが皿の上の料理を寄せ集めてサンドイッチを拵えていると、教員用のテーブルからマクゴナガル先生がやってきた。マクゴナガルはモアの顔を見るなり、何かを心配するように眉根を寄せた。

「クレイズ、今日の午後ですが魔力検査をしましょう」

「魔力検査ですって？」

モアは素つ頓狂な声を上げた。ロンとハーマイオニーは顔を見合わせた。

「そうです。あなたが転入してきてもう一週間が経ちますが、どれだけ練習を重ねてもあなたの魔法は一向に効果を発揮する気配を見せません。幾らなんでもあなたのそれは異常と言っていいほどです。保健室でしっかり検査して、心身に不調がないことを確かめるべきだと私は考えます」

きつぱりと言うマクゴナガルには有無を言わせぬ勢いがあった。気圧されたモアが無言で頷くと、マクゴナガルはほつとしたように息を吐いた。

「検査の結果によっては何らかの対策を考えなければならぬかも知れません。十三時に保健室へ。良いですね」

遂にこの機会がやってきた、とモアは思った。

魔力検査が如何なるものかは分からないが、この検査の結果によっては、モアが魔法使いじゃないということが証明出来るかも知れない。モアは立ち去るマクゴナガルの背中に向かって小さくガッツポーズを決めた。

ロンはすっかり驚いた様子であんぐりと口を開けた。

「僕、魔力検査なんて久々に聞いたよ」

「ねえ、一体何を検査するのかしら」

モアは食い気味にロンに問いかけた。

「文字通り、魔力の検査さ。と言っても、基本的には健康診断と変わらないけど」

ロンはミルクピッチャーからグラスにミルクを注いだ。ハーマイオニーは教科書を誦んじるように目を閉じた。

「確か、ホグワーツでは組み分けの儀式が魔力検査を兼ねているから通常は実施しない、って『ホグワーツの歴史』に書いてあったわ。もしかしたら何十年ぶりの実施になるんじゃないかしら」

大広間から朝食を持ち出したモア達は、連れ立ってクイディッチ競技場に出た。スタンド席に上ると、芝生で埋め尽くされた競技場全体が見渡せた。競技場の両端にはそれぞれ三つのリングが設置されており、あれがボールを投げ込むゴールなのだ。モアは理解した。

競技場にはまだ深紅のローブ姿はなかった。芝生の上に朝靄が薄らと残っており、日の光にきらきらと輝いてとても美しい光景を作り出していた。

モアはサンドイッチをかじりながら、朝のひんやりとした風を心地よく感じていた。誰も居ないグラウンドはとても広く感じられ、あの

芝の上に寝転がったらどれほど気持ち良いだろうかと考えた。

しばらくかかって選手たちが更衣室から出てきた。ウッド以外の誰もがまだ眠気を引き摺った顔をしていた。

ロンが立ち上がってハリーに声を掛けた。

「まだ終わってないのかい？」

「いや、まだ始まってもないんだよ。ウッドが新しい動きをレクチャーしてくれてたんだ」

眠たげな表情とは対照的に、ハリーの声はしつかりとしていた。

選手達はそれぞれ箒に跨るとすぐに舞い上がり、ウォーミングアップとばかりに競技場を一周し始めた。皆飛び方は上手いもので、箒に上がれと命じてもコロリとも動かなかったモアとは大違いだった。

「ハリーー、こつちを向いて、こつちだよー」

子供特有の高い声と共に連続するシャッター音が響き渡った。モアがきよろきよろと音の出所を探すと、スタンドの後方でカメラ小僧のコリン少年が次々に写真を撮り続けているのが見えた。

確か彼はハリーと一緒に談話室を出たはずだから、朝食も食べていないだろうに、よくあそこまで元気が出せるものだともアは感心した。コリンはこの間もロックハートとハリーのツーショットを撮っていたし、余程ハリーのことを好きなのだろう。

グリフィンドールチームのウォーミングアップはしばらく続いた。選手の誰もが反時計回りに競技場を回るばかりでモアが退屈し始めた時、グリーンズのユニフォームを纏った、体格の良い男子生徒達が更衣室から出てきた。あれは恐らくスリザリンチームだ。

これを見つけるなり、ウッドと思しきシルエットが上空から急降下して地面に着地した。ウッドは緑の団の先頭を歩いて一人に詰め寄ると、何やら言い合いを始めたようだった。

不穏な空気を察して、ハリーや赤毛の双子、女子選手達も次々と地上に降りてきた。両チームは向かい合って、今にも一触即発しそうな雰囲気だ。

「ねえ、あそこに居るの、マルフォイじゃないかな」

ロンがスリザリンチームの後方を指差した。



短く刈り込まれた六つの頭の中に、日差しを受けて輝くプラチナブルンドが混じっている。他のメンバーに比べて二回りは小柄なドラコは、胸を張って前に歩み出た。

ロンはスタンドの塀を飛び越えて競技場に降りると、小走りで選手たちの集まっている所へ向かった。サンドイッチを詰め込んだモアとハーマイオニーも慌ててこれに続いた。

「どうして練習しないんだい？ それにあいつ、こんな所で何してるんだ？」

選手たちに合流するなり、ロンが刺々しい口調でドラコを睨み付けた。

「僕はスリザリンの新しいシーカーだ。そして今は、僕の父上がチーム全員に買ってくださいだった箒を皆で称賛していたところさ」

ドラコは自慢げな様子で箒を前に突き出した。見せ付けるように差し出された『ニンバス2001』との銘が入った箒は見るからにぴかぴかで、グリフィンドールチームの携えている年季の入った箒とはまるで大違いだった。

ロンは七本の特上の箒を前にして、言葉を失くしたようにぽかんと口を開けた。

すっかり箒に見惚れているロンを押し退けて、ハーマイオニーが前に出た。

「何か勘違いしてるんじゃないかしら。言っておくけれど、グリフィンドールのメンバーは皆、お金じゃなくて才能で選手になったのよ」  
「誰もお前の意見なんて求めてない、生まれ損ないの穢れた血め！」

ドラコがそう叫んだ途端に、双子はドラコに飛びかかろうとしたし、女子選手達は可愛い顔を歪ませて非難の声を上げた。中でも一番怒っていたのはロンで、何時ぞやの時のようにドラコに杖を差し向けた。

「マルフォイ、思い知れ！」

大きな破裂音が競技場一杯に響き渡り、緑色の閃光が杖の先ではなく根元から迸った。閃光がロンの腹部を直撃すると、ロンはその勢いに押されて芝生の上へあたり込んだ。

ハーマイオニーがロンに駆け寄った。

「ロン、ロンってば！ 大丈夫!」

ロンは何か言いたげに口を開いたが、そこから言葉が出てくることはなかった。次の瞬間、モアは半月前に三本の箒で見たおぼあさんのことを思い出す羽目になった。ロンが大きなげっぷと共に、ぼたぼたと大きなナメクジを吐き出し始めたからだ。

モアは——モアだけでなくその場に居た大半の人間が、思わず後ずさりした。スリザリンチームだけは笑い転げて、今にも酸欠になりそうなほどだった。

盛大な笑い声に負けないよう、ハリーがハーマイオニーに向かって叫んだ。

「ここから一番近いハグリッドの小屋に連れて行こう!」

二人はロンを両脇から抱え上げると、ロンをほとんど引き摺るようにして歩き始めた。

いつの間にグラウンドに降りてきたのだろう、またも纏わり付き始めたコリンをハリーが叱り付けると、芝生の上に点々とナメクジの跡を残しながらロンたちは競技場から退場した。

コリンだけは遠ざかるハリーの後ろ姿に向かってめげずにカメラを構え続けていた。

スリザリンの面々はロンが居なくなっただけで後もげらげらと笑い続け、腹が振れるとばかりに地面に転がった。

モアは小声でケイティに話しかけた。

「ねえ、穢れた血って何なの?」

「マグル生まれに対して一番言っちゃいけない言葉よ。あんな酷いこと、よく言えたものだわ」

ケイティが怒りを噛み締めるように拳を握り締めながら言った。モアが疑問符を浮かべていると、ウィーズリーの双子の片方がフォローを入れた。

「先祖代々魔法使いの生まれのことを純血って呼ぶのに対して、マグル生まれのことを悪く言う時に使うんだ。まともな親なら自分の子供にそんな言葉使わせないんだけどな」

モアは、この間パンジーが図書室でハーマイオニーのことを穢れた血と呼んでいたのを思い出した。何となく悪口だということも分かってはいたが、そこまで酷い差別的な意味を持つとは思ってもみなかった。

モアはちよつとだけ、パンジーがこれまでにしてくれた親切を疑いそうになった。

「スリザリンが居るなら新しいフォーメーション練習は出来ない。ハリーも居ないことだし、このまま競技場を譲るのは癪だけど練習は中止にせざるを得ない」

ウツドが力なく言うのと、グリフィンドルチームは肩を落として更衣室に戻り始めた。スリザリンチームはにやにやした笑いを浮かべてこれを見送ると、練習開始とばかりに散開し始めた。

一人残されたモアがどうしたものか迷っていると、箒を片手にドラコが近づいてきた。

「君、クイディッチを見に来たんだろう？　なら僕たちの練習を見て行くと良い」

「えっ？」

ドラコは今まさに飛び立たんとしていたスリザリンチームのキャプテンを呼び止めた。

「マークス！　彼女が見学していつでも別に構わないだろう？」

マークスは箒に跨ったままモアを振り返ると、

「我々の箒の性能を見せ付けるいい機会だ。好きにさせておけ」

とだけ言っただけで芝生を蹴った。マークスはみるみる上昇し、あつという間に小さな点になった。

「だとき。僕たちの練習を見学したら、グリフィンドルの練習なんて温くて見ていられなくなるはずさ」

ドラコもそう言うなり箒に跨って、弾丸のように空へと繰り出していった。

迷いに迷ったが、結局モアはスタンドに戻って、午前中一杯をそこで過ごした。初めて見るクイディッチはルールの分からないところもあったが、それでも想像以上にエキサイティングだった。四つの

ボールの飛び交うさまはダイナミックだし、何より選手たちが空中で見せる曲芸にはひやひやさせられっぱなしだった。

昼休みになって戻ってきたロンは、時折ナメクジを吐き出す他は調子が良さそうだった。吐き戻すことを恐れて流石に昼食は抜いていたが、それでもリンゴジュースを飲んだり、それなりに皆との昼の時間を楽しめているようだった。

ドラコに酷い悪口を言われたハーマイオニーにしても落ち込んだ様子はなく、それどころか訪れたハグリッドの小屋で何か良いことがあったのか、ちよつとだけ上機嫌だった。

飛ぶように昼休みは過ぎ、約束の十三時がやってきた。モアは一人で保健室を訪れると、椅子に座って校医の先生がやってくるのを待った。

マダム・ポンフリーはすぐにやってきた。

「お待たせしてすみません、ミネルバと話し込んでしまつて」

「大丈夫よ。たつた今来たばかりだから」

マダム・ポンフリーは三角巾を結び直すと、てきぱきとした動きで杖を振るつた。すると、巻き尺やら注射器やらの道具がモア達の前に方々から集まつてきた。

魔力検査といつても確かに、身長体重をはかつたり、血液検査をしたりと、主だった事柄はロンの言う通り普通の健康診断と大差なかった。

強いて言えば手の平サイズの小さな風車に息を吹きかけたり、重りの沢山付いたばねを両腕からぶら下げたり、魔法陣のようなものが掘られた石板に裸足で乗つかったり、楕円形の透明な石を握り締めたりさせられたくらいで、これで何が調べられるのかはモアにはてんで想像が付かなかつた。

全ての検査を終えると、今度はマダム・ポンフリーによる問診が始まった。椅子に座って向かい合い、二つ三つ簡単な質問が続いた。

「では何か体に不調の所はありませんか。どんな些細なことでも構いません」

モアはちよつと考えてから答えた。

「小さい頃から鼻炎持ちではあるけど、最近は昔ほど酷くないし、それ以外は至って健康よ」

「鼻炎持ちですって？」

「そうよ。鼻が詰まっちゃって。ちよつと息苦しいくらいでそんなに不自由はしていないから別に良いんだけど」

マダム・ポンフリーは手元の問診表に何か書き付けた。

「魔法薬学の授業は上手く行っているんですね。上手く行かないのは杖を使う授業だけ？」

「ええ。今のところは」

長い息を吐いて、マダム・ポンフリーは問診表を膝の上に伏せた。

「検査結果はいずれも良好です。全ての検査で魔力をしつかり測定出来ましたし、寧ろ人より魔力は強いくらいです。これで魔法が発動しない理由は皆目見当が付きません」

モアはがっくりと肩を落とした。あのよく分からない検査の信憑性はともかくとして、全ての検査で魔力など検出されないのがモアの理想だったから、これは期待とは真逆の結果だった。

マダム・ポンフリーはメモ用紙にさらさらと何かを書き付けると、びりりと破いてモアに手渡した。

「取り敢えず、鼻炎の薬を出しておきます。まさか鼻詰まりが不調の原因ということはないでしょうけど、毎日服用するように」

「はあ」

メモ用紙には『一日二回、朝晩、小さじ一杯』とだけ書かれていた。マダム・ポンフリーが杖を振ると、薬棚の扉が開いて緑色の小さな小瓶がモアの元に飛んできた。モアが小瓶をキャッチすると、マダム・ポンフリーはこれでお終いとばかりに立ち上がった。

「薬がなくなった頃にまたいらしてください。それでは、良い午後を」  
「ありがとう、マダム」

モアは保健室を後にした。廊下をしばらく歩いて、それから深々とした溜め息と共に頂垂れた。そのままよろよろと廊下の壁に凭れ掛かる。

はつきり言つて、八方塞がりだった。

魔力検査の結果はモアが魔法使いでないことを証明するどころか、はつきりと魔力を検出していたという。このままでは前の学校に戻るどころか、ホグワーツに通い続ける羽目になってしまう。

今や、モアにとつては杖を使えないことだけが唯一の救いであり、希望だった。これを糸口になんとかして前の学校に戻れる方法を考えなければいけなかった。

だが幾ら考えても、モアが魔法使いではないと証明する方法は思い付かないのだった。

## (9) 退学届

モアがホグワーツに転入してから一ヶ月が経った。

モアはハーマイオニー指導の下、呪文学よりも難易度は高いが、途中成果の見えやすい変身術に絞って魔法の練習を重ねるようになっていた。しかし当然のように、一向に呪文の発動しない日々が続いていた。

どんなに魔法が上手く行かなくても、ハーマイオニーはモアを見放さなかった。それどころか、モアの失敗の原因を何とか多角的に分析しようとしている節さえあった。ハーマイオニーはマクゴナガル先生に負けず劣らぬ厳格な指導者に徹し、モアのどんな些細なミスにも修正を加え続けた。

一方のモアといえば、魔法の不発を重ねる度に自分が魔法使いでないことを証明できるような気がして、一生懸命に杖を振り続けていた。自分が魔法使いでないことを証明する術が何も浮かばない中で、モアは継るような思いだった。

そうしてこの日も、四十八回目の失敗を迎えた所でモアはふうっと息を吐いた。

「ほら、やっぱり変化しないわ!」

「どうしてなのかしら、発音も杖の振り方もこんなに完璧なのに、全く何も起こらないだなんて!」

「そんなの、答えは一つに決まってるわ。それは私が魔女じゃないからよ」

モアは得意満面になってそう言ったが、ハーマイオニーは懐疑的な態度で首を傾げた。

「スクイブってこと? でもあなたは魔法薬は上手に作れるし、それにスクイブなら組み分けの時に帽子が気付くはずだわ。何か他に原因があるはずよ」

ハーマイオニーは真剣な眼差しでモアの操っていた杖の先を見詰めていたが、やがて閃いたとばかりに右手で膝を打ち据えた。

「待って! もしかしたら杖が合っていないんじゃないかしら。相性の

悪い杖を無理矢理使おうとすると呪文が失敗するって聞いたことがあるわ。もっと単純に、杖が不良品ってこともあるかも知れないけど」

杖に何か不具合があると呪文が上手く行かないというのは、ロンの壊れた杖と惨憺たる魔法の成果を見て散々理解していた。というのも、ロンは壊れた杖の所為でこのところ授業の度に何かと問題を起こしていたからだ。

モアは不良品かも知れないと言われた自分の白い杖を睨み付け、それからふと思いついた。

「あー、残念だけど、それなら心当たりがあるかも知れないわ。杖選びの時にね、ちよつとした問題があったのよ」

モアはハーマイオニーの熱心さに根負けして言った。ハーマイオニーはすぐさまこれに食い付いてきた。

「問題ですって？ オリバンダーの店で買ったんじゃないの？」  
「ええ、そうよ。そうなんだけど……」

モアは言葉を濁らせた。ハーマイオニーは自分で不良品の可能性を持ち出した癖に、随分と驚いた様子で身を乗り出した。モアは溜め息を飲み込んで言った。

「ただ……その、何も起きなかったのよ。今みたいに」

「杖選びの時に何も起きなかった杖を買ったってこと？ そんなことってあるの？」

「何本も試したけどどれも駄目だったのよ。で、これしかないって言われて買わされたわけ」

ハーマイオニーは信じられないとばかりに目を丸くしたが、すぐに切り替えて明るい声を出した。

「じゃあ私の杖で試してみましよう」

「でもね、ハーマイオニー。これはつまり、杖の問題じゃないんじゃないかと思うの」

「試せることは何でも試さないと駄目よ、さあ！」

そろそろモアが魔法使いじゃないと認めてくれてもいい頃なのに、ハーマイオニーは俄然やる気を取り戻してしまったようだった。



ハーマイオニーは自分の杖とモアの杖を取り換えると、モアに杖を振るように促した。モアが杖を手にとると、何百回何千回と振り続けた自分の杖とは違って、手に馴染む感覚はなかった。それどころか、杖に細かく彫られた蔓のような文様がモアの手を拒絶しているように感じられた。

モアはマツチ棒を掲げると、呪文を唱えながら反対の手に持ったハーマイオニーの杖をゆっくりと振るった。ハーマイオニーは呪文が掛けられたと思いきマツチ棒を凝視した。

「あつ、見てモア！ マツチ棒が薄ら銀色になつてきた気がするわ！」  
「気の所為じゃないかしら。私にはただのマツチ棒にしか見えないんだけど」

「自信を持つよ！ 確か、自信の有無も魔法の成否に影響するって研究結果があつたはずだわ」

自信を持つと言われたところで、モアは自分に魔法が使えるなんて微塵も思っていないし、使いたいとも思っていないのだった。

結局この日も、モアの練習が実を結ぶことはなかった。近頃はハーマイオニーとの自主練を終え、何も魔法の現象が起こらなかったことにほっとして眠りにつくという日々が続いていた。

長い雨の日が何日も続き、ホグワーツにはハロウィーンが近付いていた。

ある土曜日、モアは魔法薬学の宿題を終わらせるべく、一人で図書室に籠ってレポートを書き続けていた。同じくまだ課題の終わっていないロンも誘ったのだが、ロンは大好きなクイディツチチームであるチャドリー・キャノンズの写真集を眺めて現実逃避するのに忙しいようだった。

モアが参考資料の本を捲っていると、頭上から男の子の声が降ってきた。

「真面目にやっているようだね」

顔を上げると、エミールが隣の椅子を引きながらモアのレポートを覗き込んでいた。モップ・トップの前髪がはらりと崩れて、目元を覆

い隠している。

「この考察は良い着眼点だと思うよ。薬の副次効果についても良く書けている」

「一体何の用？」

モアはつつけんどんに聞いた。エミールは大して気にした様子もなく口を開いた。

「フィネガンから、君が随分前から毎日談話室で魔法の練習をしているって聞いたんだ。それで、この間のことを謝ろうと思つて。格好悪いだなんて言つてすまなかつた」

エミールは素直な様子で言つた。モアは謝罪なんていらないとばかりにゆるゆると首を振るつた。

「別にやりたくてやつてるわけじゃないわ。あなたに言われたからやつてるわけでもない。熱心に見てくれるハーマイオニーの厚意を無碍にしたくないだけよ」

「それでも努力は努力だ。やりたくないことを続けることほど難しいことはないと俺は思うよ」

感心したように告げたエミールは、モアの書きかけのレポートを取り上げると興味をそそられた様子で本格的に目を通し始めた。エミールのマイペースな様子に呆れ返りながら、モアは自分のレポートを読まれるがままにした。

真剣にレポートを読み進めるエミールの横顔を眺めながら、モアはホグワーツでお世話になつている人達の顔を思い浮かべた。

「熱心な先生に熱心な友達……魔法使いになりたいのならこんなに恵まれたことはないんだろうけど、残念ながら私は魔女になつてなりたくないのよね。それに、どんなに自分は魔法使いじゃないって主張しても誰も聞き入れてくれないの」

「当然だろう、魔法使いじゃない人間はホグワーツに来られないんだから」

そこでエミールはレポートから顔を上げた。

「そもそもどうしてそんなに魔法使いになりたくないんだい。ここで生活もそんなに悪いものじゃないだろう？」

モアは凝り固まった筋肉をほぐすように腕を前に伸ばした。

「私はね、ずっと魔法のない世界で生活してきたの。小さい頃から一緒に、家族同然の友達に囲まれて楽しい毎日を過ごしてた。それをいきなり転校しろだなんて言われて、そんな勝手な話呑み込めるわけがないわ」

「つまり君は、魔女になりたいたくないんじゃないって前の学校に戻りたいのかい？」

「そうよ。その何がいけないって言うの」

エミールは瞳をぱちくりさせると、何が面白いのかふつと笑みをこぼした。

「君が何をそんなに複雑に考えているのかは知らないけれど、退学届を出せばいいだけの話じゃないのかな」

モアは一瞬言葉を発するのを忘れかけた。

「……退学届ですって？」

「ホグワーツを辞めたいだけならそれで十分だろう？ 退学して前の学校に戻れば良いじゃないか」

エミールはなんてことないとばかりに言った。

このひと月、モアは自分が魔法使いでないと証明することに気を取られすぎていて、退学届のことは頭からすっかり抜け落ちていた。エミールの言う通り、前の学校に戻るだけならそんなに難しいことではないのかも知れない。

モアは、目の前に光明が差してきたような気持ちになった。

「ありがとうエミール、本当にありがとう！ あなたってすつごく良い人ね！」

「君がこんな単純なことに気付かないことの方が驚きだよ」

モアはエミールの手からレポートを取り上げると物凄い速さでくるくると巻き、羽ペンやインク壺と一緒に鞆に押し込んで席を立った。

「レポートなんてやっていられない、私、早速退学届を書いてくるわ！

本当にありがとう！ 大好きよ、エミール！」

感情に任せてモアが叫ぶと、エミールは狐につままれた顔をしながら

らひらひらと手を振った。

モアは走りに走って閲覧席の間を抜け、図書室の出口を目指した。これを目撃した司書のマダム・ピンスはカウンター越しに「図書室で走らない！」と叱り飛ばしたが、モアの耳には届かなかった。

廊下を大急ぎでグリフィンホール塔に駆け戻ると、モアはベッドルームを目指した。談話室でレポートに取り組んでいたロンとハーマイオニーが呼び止めようとしていたのも気づかず、モアは大股で二人の横を横切った。

モアが扉を跳ね除けてベッドルームに飛び込むと、部屋の真ん中で背中を掻いていたブーティが驚いてカーテンの陰にさっと隠れた。モアはトランクを開けると、友達に手紙を書くために持って来た花模様の便箋を取り出し、机に向かって意気揚々と羽ペンを構えて――すぐに詰まった。

「退学届って何を書けばいいのかしら」

これまで退学届はおろか、誰かに提出する正式な書類の類を一切書いたことのないモアだ。こういつた時に何を書かなければいけないのかまるで分かっていなかった。まさか退学するなんてことを誰かに相談するわけにも行かないから、一人でうんうんと十分ほど悩んだ挙句、モアは思ったことをそのまま文章にすることにした。

「私、モア・クレイズは転校前の学校に戻るため、ホグワーツ魔法魔術学校を退学します……これで良いかしら」

便箋の右下にサインをしてから、淡い桃色の封筒に入れる。封筒の表には『退学届』と記載して、最後に便箋と同じ花模様のシールを封蝋の代わりに貼り付けた。

パーフェクトに可愛い仕上がりにモアは満足して頷いた。部屋が静かになった気配を察して、カーテンの裏からブーティが探るような足取りでゆつくりと出てきた。モアはこれを見付けると、嬉しくて堪らないという微笑みを浮かべた。

「あら、ブーティ。さっきは驚かせてごめんなさい。私、ちょっと校長室に行ってくるわね！」

ブーティはモアの顔をじっと見つめると、不意に視線を外してパー

バティのベッドの下に潜り込んだ。

前の学校に戻る。また皆と一緒に生活が送れる。モアの心は逸った。

退学届を手に大急ぎで螺旋階段を下り、今すぐ談話室を飛び出そうとしたが、すぐさまモアは立ち止まった。談話室を振り返り、隅のテーブルで羊皮紙を広げているロンとハーマイオニーを見付けると急ぎ足で歩み寄った。

ハーマイオニーはロンのレポートの面倒を見ている様だった。ロンの羊皮紙はまだレポートを書き始めたばかりといった感じで、ほとんど真っ白だった。

邪魔するのも悪いとは思ったが、モアは思い切って二人に声を掛けた。

「ねえ、校長先生のお部屋ってどちらにあるのかしら」

遅々として進まないロンのレポートに釘付けになりながら、ハーマイオニーがやや苛々した様子で答えた。

「校長室の入り口なら三階にあるって聞いたことがあるわ。ダンブルドアに何か用なの？」

「ううん、ちょっと聞いてみただけ。これだけ大きな学校だもの、校長室はさぞかし立派なお部屋なんでしょうね」

流石に退学届を出しに行くとは言い出せずに、モアは作り笑いを浮かべた。

退学届が受理されれば、ハーマイオニー達とは別れることになる。特にハーマイオニーには散々お世話になったのに、まだ何も返せていないことを思うとモアは胸が痛んだ。二人の遣り取りを眺めながら、モアは少しだけ寂しい気持ちに駆られた。

「二人ともありがとう、さようなら」

モアは小さな声で言い残して、二人に背を向けた。

グリフィンホール寮から階段を下って三階に辿り着いたモアは、またもや困り果てる羽目になった。どれが校長室の入り口かさっぱり分からなかったのだ。唯一分かったのはDADAの授業で使われる

教室とロックハートの部屋だったが、モアはこの二つを無視して廊下をうろうろした。

この廊下には、気味の悪いガーゴイル像がそびえているのが目に付いた。モアはその像を避けるように廊下を歩き回り、取り敢えず、目についた扉を一つ一つ開けてみることにした。しかし開けた扉のほとんどが空き教室や物置で、校長室らしきものは何処にも見当たらなかった。

モアが不安に駆られ始めた頃、運の良いことに、廊下の向こうから薄青色のローブを引き摺るようにしてダンブルドアが歩いてきた。

「校長先生！」

モアはそう叫んでダンブルドアに駆け寄った。何かを小脇に抱えたダンブルドアは、ガーゴイル像の前で立ち止まると何事かとばかりにモアを見詰めた。

モアは息を切らして言った。

「先生、私……私、校長先生にお話があつて」

「もしや、ずっとここで待っておったのかね」

「はい。と言つても、多分十五分くらいですけど」

ダンブルドアは深く頷くと、モアの背中に手を回した。

「それはさぞかし待ったことじやろう。入りなさい。ファイファイ・フィズビー！」

ダンブルドアが合言葉を言うと、突然ガーゴイル像が動き出した。像は左にびよんと飛び退き、その後ろにそびえていた石の扉が左右に割れた。こんなのが入り口だなんて分かるわけないとモアは思った。

壁の向こうには動く螺旋階段が伸びていた。モアはダンブルドアに続いてこれに乗り込むと、エスカレーターのようにオートメーションで上へと運ばれていった。

「校長先生はお出かけだったんですか？」

校長室に入るなり、モアはダンブルドアに問いかけた。ダンブルドアはゆつたりとした足取りで机を回り、背凭れの高い椅子に腰掛けた。

「いや、キッチンに出来立てのチョコレートファッジを貰いに行つた。

ところでのう。屋敷しもべ妖精たちの渾身の作じや。良ければ一つどうかね」

ダンブルドアは小脇に抱えていたガラス壺の蓋を開けると、モアに向けて差し出した。モアが大きな欠片を一つ摘まんで口に放り込むと、ファッジは口の中でほろほろと崩れた。鼻が詰まっていたので芳醇なチョコレートの香りはよく分からなかったが、それでも十分に美味しいと思えた。

ダンブルドアはファッジを頬張るモアを見て、満足したようにうんうん頷いた。

「さて、用件を伺おうかの」

「その、私、ホグワーツを退学したいんです」

「ほう。して、何故に」

「ホグワーツを退学して、前の学校に戻りたいんです」

モアはファッジを飲み込みながら言った。ダンブルドアは薄青の瞳をきらりと輝かせた。

「一つ小言を言わせてもらえば、わしの所に来る前に、まずは寮監であるミネルバの所に行くのが筋じゃったな」

「ごめんなさい。私、とにかく退学届を提出することしか考えてなくて」

モアが俯くと、ダンブルドアは柔らかい声で語り掛けた。

「なに、怒っている訳ではない、顔を上げなさい。退学届を見せてくれるかね」

モアは無言で薄桃色の退学届を差し出した。ダンブルドアはモアの退学届を受け取ると、微笑みを浮かべて封筒を様々な角度から眺め始めた。

「随分と可愛らしい退学届じやのう」

「そうでしょう！ そのレターセットはジョアンナと色違いで買ったものなの。私の一番のお気に入りなのよ」

モアは嬉しくなって言った。ダンブルドアは目を細めると、花模様のシールを剥がして便箋を取り出した。便箋には退学したい旨とモアの署名しか書かれていない。ダンブルドアが中身に目を通すのに

そう時間はかからなかった。

「気持ちのこもった丁寧な字じゃ。良く書けておる」

ダンブルドアは封筒と便箋を机の上に置くと、深い瞳でモアを見詰めた。

「しかし、残念だが、この退学届は受理できん。退学届は保護者の署名がないと受け取れんのじゃ」

「なんですって!？」

モアは衝撃のあまり、その場に崩れ落ちた。ダンブルドアは眼鏡を外して困ったように眉間を揉んだ。

「そんな！ あの人達、絶対に署名なんてしてくれないわ！ どうしよう、これじゃ絶対以前の学校に戻れない……!？」

床にうずくまりながら、モアは涙が込み上げてくるのを感じていた。やっとアレイヤ達の居る学校に戻れると思ったのに、こんなのはあんまりだった。ぼろぼろと大粒の涙をこぼし始めたモアは、堪えきれないとばかりに何度も目元を擦った。

ダンブルドアは気の毒そうな声色で言った。

「君に関しては幾つかの噂を聞いておる。さつき君が言ったように、前の学校に戻りたいそうじゃな。それから魔女になりたくないとも」「そうよ、前の学校には、家族みたいに大切な友達が沢山居るのに……」

モアは俯きながら言った。ダンブルドアは長い溜め息を吐いた。

「大切な友達と離れたくないという気持ち、それはよく分かる。わたしにも昔、離れたくないと思える友がおったものじゃ。結果的に仲違いしてしまっただが、今でも大切な友だっと思っている。ひと時でもそうした友と一緒に居られたことは人生の大きな収穫じゃ」

モアは同意を示すようにこくこくと頷いた。ダンブルドアは机の向こうからモアに優しく微笑みかけた。

「ホグワーツはの、ただ魔法を学ぶための学校ではない。魔術の授業を通して、持って生まれた自らの魔力をきちんとコントロール出来るようにすることも重要な目的の一つなのじゃよ」

「魔力をコントロール出来るようにする?。」



「そうじゃ。わしが思うに、君は高い魔法の素養を持っているが、まだ自分の力をコントロール出来ていない」

モアは涙を拭いながらダンブルドアを見上げた。

「私が魔法を使えないのは、自分の魔力をコントロールできていないからってこと？」

「ある意味で言えば、完璧にコントロール出来ているとも言えるのじゃが、それは今はよい。君は自分の魔力をきちんと操れるようになるべきじゃ、自分自身のためにのう」

ダンブルドアはそこで言葉を区切った。魔力を自在に操れるようになるとはどういうことなのだろう。ハーマイオニーのようにどんな魔法も使えるようになるということだろうか。

ダンブルドアはモアの疑問を見透かすような瞳を向けた。

「君がきちんと自分の持つ力の性質について理解することが出来た暁には、その時は正式にこの退学届を受け取ろう。勿論、ご両親のサインも込みでな。さあ、フアツジをもう一ついかがかね。落ち込んだ時には甘い物が良く効く」

「ありがとう、校長先生……お気持ちだけ受け取っておくわ」

モアは気持ちを立て直すようにゆっくりと立ち上がった。涙は次から次に溢れてきて留まることを知らなかったし、胸の痛みもなくなることはなかったが、それでもモアはお礼を言うと何とか校長室を後にした。

(10) 襲われた猫

退学届の不受理から何日か経って、ハロウインの日がやってきた。数日前から大広間はハグリッドの育てた巨大かぼちやのランタンで飾られ、生きたコウモリが天井から沢山ぶら下がるようになっていた。すっかりお祭りモードの学内は、浮足立った空気に包まれていた。

先日のことがあってから素直に浮かれる気持ちにはなれないモアだったが、それでも初めて過ごすホグワーツでのハロウインは煌びやかで、高揚感のようなものを感じていた。

ハリー達はほとんど首なしニックの開催する絶命日パーティなる物に出席するとかで、夜に開かれるハロウインパーティを欠席することだった。ハリーからはモアも一緒に行かないかと誘われたのだが、ゴーストだらけのパーティに違いないと聞いたのですぐさま遠慮した。

大広間のパーティでは、金色の皿にたくさんのかぼちや料理とそうでない料理が並んだ。モアは全ての料理を少しずつ取り分け、やけ食いとばかりに全部平らげた。ダンブルドアが余興に招いた骸骨舞踏団は不気味で好きになれなかったが、デザートのかぼちやパイやかぼちやジェラートはとても濃厚で美味しかった。

パーティがお開きになると、皆は満腹のお腹を擦りながら大広間を出た。沢山の生徒達がひしめき合いながら階段を上っていったが、三階に差し掛かった途端に人の列はちつとも前に進まなくなった。

列の後ろの方に居たモアは何が何だか分からずに首を伸ばした。渋滞の前の方から波が広がるように沈黙が広がり、三階の廊下は静寂に包まれた。

静寂に石を投げるようにして、誰かの叫び声が聞こえた。

「継承者の敵よ、気を付けよ！ 次はお前たちの番だぞ、『穢れた血』め！」

その言葉の意味はちんぷんかんぷんだったが、三階の廊下で何か事件が起こっているということだけは確かだった。

ハロウインの夜に何があったのか、噂話はすぐに回ってきた。ホグワーツに隠された『秘密の部屋』が開かれたとかで、フィルチの飼った猫であるミス・ノリスが何か恐ろしい魔法の力で石にされたというものだった。

ミス・ノリスは年老いた灰色の猫で、痩せた身体にぎらりと輝く金色の目の持ち主だった。生徒達からはあまり好かれていない様だったが、モアはあの猫のことをそんなに嫌いではなかった。何度か廊下で頭を撫でたことがあるし、ブーティとは違ったワイルドな魅力に溢れる猫だと感じていたからだ。だからモアは今回の事件をとっても残念に思った。

ハリー達がミス・ノリスの第一発見者ということで、噂話の中にはハリーを犯人ではないかとみる向きもあったが、モアはそれはないだろうと考えていた。この二ヶ月一緒に過ごしていて、そういう他者を傷つけるようなことをするタイプには思えなかったからだ。

噂好きな皆は次に誰が襲われるのだろうかと気にしていたが、モアが気にしたのも勿論そのことだった。

「猫が狙われるってことなの？　ねえ、私のブーティは大丈夫かしら」  
「多分大丈夫だと思うよ。だって君の猫は談話室から一步も外に出たことないんだから」

ハリーは気休めのように言った。

「ああ、どうしましょう、ブーティのことが心配で授業なんて受けてられないわ！　談話室に帰りたい、今すぐに！」

モアは授業の合間に必ずグリフィンホール寮に戻って、ブーティの無事を確認するようになった。そんなモアをロンやハリー達は過剰反応だと笑ったが、モアにとっては小さな子猫の生き死に関わることで、正しく死活問題だった。

火曜日の夜。ロックハートの補習を終えて寮の談話室に戻ってきたところ、モアは入り口のところで赤毛の監督生に呼び止められた。「ああ、よく戻ってきてくれた。君を待っていたんだ」

確か、彼はパーシーと言っただろうか。モアは、彼がロンや双子のフレッド、ジョージの兄だったように記憶していた。そのウィーズリーが一体何の用だろうか。何か規則に違反した覚えもないし、モアは監督生に待ち伏せされる理由がてんで思い浮かばなかった。

パーシーは周りをきよろきよろと見回すと、声を潜めて話し出した。

「ちよつと折り入って頼みたいことがあるんだが、構わないかな」

「別に良いわよ。まあ、内容にもよるけど」

モアは、小首を傾げながら言った。

「うちの妹って分かるかい？ 僕やロンと同じ赤毛で、お下げ髪の」

「ええ。ジニーでしょう、一年生の」

「そう、一年生だ。入学してまだたったの二ヶ月しか経っていない！」

パーシーは期待通りだとばかりにうんうん頷く。

「なのに、この間のハロウィーンではあんな事件があっただろう。すっかり落ち込んでしまっていてね……ジニーは昔から猫好きなんだ」

猫と聞いて、モアは真っ先にあの可愛い白長靴のことを思い浮かべた。

「もしかして、その、私にジニーを元気付けてほしいってこと？」

「ああ、全く以ってそうだ！ よく察してくれ！」

パーシーは待っていたとばかりに快哉を叫んだ。それから冷静さを取り繕うように眼鏡のブリッジをくいっと押し上げると、早口でまくし立て始めた。

「確か、うちの寮には黒い子猫を飼っている子が居たと思ってね、是非そいつをジニーに会わせてやってほしいんだ。それに君は年も近いし、きつと良い話し相手になれると思う。本当なら僕ら兄弟が励ましてやらなくちゃならないんだが、生憎、僕は監督生の仕事で忙しくてね。弟達は見てのとおりあんなだからあまりあてには出来ないし……」

マシングンのように発せられるパーシーの言葉を遮るように、モアは彼の腕を掴んだ。

「分かった、分かったわ！　そういうことなら引き受けてあげる」

正直に言えば、励まして欲しいのはモアの方だったが、妹を心配するパーシーの気持ちを思えば答えは一択だった。

一息に話して息切れしたのか、パーシーはふうと溜め息を吐いて再び眼鏡のブリッジを押し上げた。

「そうか、分かってくれて良かった。助かるよ。君も転校してきたばかりで何かと大変だろうが、時々ジニーを気に掛けてくれるとありがたい」

「ええ。私は一人っ子だから分からないけれど、兄弟を持つって結構大変なのね」

モアが苦労を押し量って言うと、パーシーは感激したようにモアの肩を叩いた。

「そう、そうなんだよ！　本当はまだ上に兄が二人居るんだが、ホグワーツでの最年長は僕だからね……ああ、すまない。夜だと言うのにすっかり引き留めてしまった」

「大丈夫よ。ロックハートの下らない授業の所為ですっかり眼が冴えちゃったところだから」

作戦は次の日の昼休みに早速決行された。というのも、大広間で食事を摂っているジニーを見かけたからなのだが、ジニーは顔が青白くて、見るからに塞ぎこんでいる様子だった。

一刻も早く励ましてやらなければと思ったモアは、ジニーの隣の席に腰掛けると彼女の顔を覗き込んだ。

「ジニー！　あなた、ジニー・ウィーズリーよね？」

急に知らない人から話しかけられたジニーは、びっくりして肩を竦めると恐る恐るといった様子でこちらに振り返った。

「何かしら。私に何か用でもあるの？」

「用、そうね。大したことじゃないんだけど、そろそろうちの子猫に餌をやる時間なの。良かったら食事の後でちよつと付き合えないかしら」

ジニーは思ってもみなかったとでも言うように瞳をぱちくりさせた。

モアは二年生のベッドルームにジニーを招き入れた。ジニーは初めて入る上級生の寝室にちよつと恐縮していたが、それもカーテンと窓の間で足を折り畳んでいるブルーティを見付けるまでの間だけだった。

愛らしい子猫を目にすると、ジニーはぱつと表情を明るくした。モアは満足げに餌の袋を取り出した。

「ブルーティはその場所がお気に入りみたいなの。鳥や舞い散る葉っぱみたいな外の景色に興味があるみたい」

「表には出してあげないの?」

ジニーは無邪気な表情でモアに問いかけた。

「まだ子猫だから寮の中だけね。もう少し大きくなったら学校の中を散策させてあげても良いんだけど、まだ心配だから。あんな事件もあつた後だし」

ミス・ノリスの一件を仄めかすと、ジニーは急に力を失くしたように俯いてしまった。モアは慌てて餌袋の封を切ると、ウェットフードを指に載せ、そのままブルーティの鼻先に差し出した。

ブルーティは何度か指先の匂いを嗅いだ後、舌を伸ばして指先についた餌を舐め取り始めた。

「これ、最近覚えたの! ブーティったらもう、この一生懸命食べる姿が物凄く可愛いでしょう?」

「うわあ……! ねえモア、私もやってみて良いかしら」  
「ええ、どうぞ」

モアはジニーの人差し指にもウェットフードを乗せた。ジニーが恐る恐る指を差し出すと、ブルーティはやっぱり何度か匂いを嗅いでかぱろぱろし始めた。この餌やりは落ち込んだジニーに効果てきめんで、すぐさまくすぐったそうに笑い声をあげた。

「あははっ! 何これ、凄く可愛い!」  
「そうですね! 私のブルーティったらもうとっても可愛いでしょう!」

「うん! 育ち盛りだからかしら、とっても食いしん坊なのね」  
一頻り笑い合った後、ジニーはふつと真面目な顔になった。

「ねえ、モア。あなた、パーシーの差し金ね」

モアは驚いてジニーの顔をまじまじと見詰めた。

「あら、どうして分かったの」

「ロンやフレッジョなら自分で励ましに来るもの。パーシーはそういうの得意じゃないから」

ジニーはパーシーのことを思い浮かべたのか、ちよつとだけ恥ずかしそうな笑みを浮かべた。モアは何だか心が温かくなって、ふふつと微笑み返した。

「そう、お兄ちゃんのことはお見通しつてわけね。でもパーシーは本当に、近頃あなたが落ち込んでるって酷く心配してたわ」

「分かってるわ。でも本当に、色々なことがありすぎて、どうしたらいいか分からないの」

弱々しく首を振るうジニーは、何か言いたくても言えない秘密を抱えているように思えた。モアは何とか力になれないかと思い、腕を伸ばしてジニーの両手を握り締めた。

「何でも良いから話したいことがあつたら言つて。胸のつつかえが少しは取れるかも知れないわ」

「ありがとう。最初は魔女になりたくないだなんて、なんて変な人だろうと思っていたけど、あなたって優しいのねモア」

ジニーはもう一度柔らかく微笑んだ。この笑顔を曇らせている原因が何なのか、モアにはまるで想像が付かなかった。

その日の午後、いつも退屈なはずの魔法史の授業は、ハーマイオニーが秘密の部屋について質問し始めたことで様相をがらりと変えた。これまでの授業で寝落ちしていた誰もが起き上がり、先生が何を言うかに集中し始めたからだ。

これを受けて、ビンズ先生は渋々といった様子でホグワーツの四人の創設者と『秘密の部屋』にまつわる話をし始めた。

今から一千年以上前、まだ魔法使い達が迫害されていた時代に、ホグワーツは魔法教育を目的として設立されたという。

初めこそ上手くいっていたが、ホグワーツの創設者である四人の魔法使いは次第に入学者の選別を巡って仲違いを始めるようになった。純粋な魔法族のみにホグワーツへの入学を許可するべきだとしたスリザリンに対し、他の三名はマグル生まれの者にも門戸を開くべきとしたからだ。

両者は——中でもスリザリンとグリフィンドールは激しく対立し、結局スリザリンは学校を去った。ここまですが歴史に残る事実だという。

スリザリンの去ったホグワーツにはある空想的な伝説が残された。それはスリザリンが他の創設者たちの知らぬところで学校に『秘密の部屋』なる物とスリザリンの怪物を残したというものだった。

スリザリンの思想を継承するものが現れるまで秘密の部屋は封印され続け、継承者が現れた暁には、スリザリンの怪物がホグワーツで学ぶに相応しからぬ者達を追放するというのだ。

この伝説を受けて、高名な魔法使いたちが何度もホグワーツを探索したが、そうした隠し部屋の類は見つからなかったのだという。

その後も秘密の部屋に関連して生徒からの質問が幾つか続いたが、ビンズ先生は馬鹿馬鹿しいとでも言わんばかりにそれらを切って捨てた。後はいつも通りの退屈な授業で、モアは頬杖を突きながら秘密の部屋について考えた。

秘密の部屋とその怪物がホグワーツに相応しくない生徒を追放するための装置なら、ミセス・ノリスは何故襲われたのだろう。モアは、魔法史の教室に来る途中で見掛けた、事件現場の落書きを思い返す。

壁の高い位置に赤のペンキで書かれた文字は『秘密の部屋は開かれています。継承者の敵よ、気を付けよ』だった。継承者の敵とは何を指しているのだろう。ビンズ先生の話から単純に考えれば、マグル生まれを指しているように思える。だが、襲われたのは生徒ではなく無辜の猫だったのだ。

今回の事件はただの脅しで、全ての幕開けに過ぎないということなのだろうか。



授業一杯考えても上手い答えは見つからず、釈然としない思いを抱えながらモアはグリフィンドール寮に戻った。

ただ、もし狙われるのが猫ではなくマグル生まれの生徒なら、ブーティの身は危なくないのかも知れない。モアは不謹慎ながらもちよつとだけほつとしたのだった。

## (11) 決別

転入から二ヶ月少々が経ち、すっかり学校生活に慣れてくると、モアは一人で行動することが増えてきた。授業の合間はブーティの安否確認に忙しかったし、ハリー達三人は最近何だかこそこそしていて、空き時間の度にモアに隠れて何かやっているようだったからだ。

一体何をしているのか一度尋ねてみたが、秘密の部屋を開いた犯人を捜していると教えてくれただけで、具体的に何をしているのかは教えてくれなかった。

秘密の部屋と言えば、今話題になっているのはコリン・クリービーのことだった。

スリザリン対グリフィンドールのクイディッチの試合があった土曜夜、何者かに襲われたコリンはミセス・ノリスと同様に石化させられてしまったのだ。今は医務室に安置されており、スプラウト先生が育てているマンドレイクの成長を待っているという。コリンはマグル生まれの生徒で、だからスリザリンの継承者に狙われたのではないかと専らの噂だった。

呪文学でコリンと隣の席だったジニーは特別酷く落ち込んでいた。「ねえジニー、大丈夫よ。マンドレイク薬が出来ればすぐに元気になるって、マダム・ポンフリーが言ってたじゃない」

「うん、分かっているわ。でも……」

今のジニーにはどんな気休めも効果がないようだった。

相変わらずハリーを犯人だとする噂がちらほら聞こえたが、モアはハリーが犯人ではないという確信を持っていた。確かにハリーはコリンを鬱陶しがってはいたが、事件のあったその日の夜、ハリーは腕の骨を再生させるために医務室に居たからだ。

スリザリン対グリフィンドールのクイディッチの試合で、ハリーはブラッジャーに狙われて腕の骨を折る大怪我を負ってしまった。そこへ現れたロックハートが、馬鹿なことに、治療と称してハリーを文字通りの骨抜きにしまったのだ。

医務室に運ばれたハリーは骨生え薬を飲むのにかなり苦心したが、

水をチェイサーにして何とか流し込むとベッドに潜り込んだ。マダム・ポンフリーに絶対安静を申し付けられていたので、医務室の外に出て行くなんてのはあり得ないことだった。

こんな状況では、もし生徒の誰かを襲いたくても襲えるわけがないだろうというのがモアの見解だった。

思えば、ハリー達がモアを差し置いてこそそし始めたのはこの頃からだったかも知れない。ハーマイオニーは相変わらず折を見てモアの世話を焼いてくれていたが、それでも一緒に過ごす時間は格段に減っていた。ハリー達が何を計画しているかなんて、モアは知る由もなかった。

ハリー達のことに加えて、このひと月、モアとパンジの仲もいまいちだった。

モアが廊下ですれ違った時に挨拶をしても、パンジは中々返事を返してくれなくなっていた。近頃は更に事態が悪化して、ちらつとこちらを見るだけで無視される日々が続いていた。

ここまで徹底して知らん振りされる心当たりのなかったモアは、それでも懸命に声をかけ続けた。モアが友達のことでもこんなに頑張ったのは、一昨年ミルと喧嘩して口を利いてももらえなくなった時以来だった。

十二月も半ばに差し掛かると、マクゴナガル先生はクリスマス休暇に学校に残る生徒の調査に回ってきた。モアは当然のように学校には残らず、誰も居ない自宅に帰るつもりだと伝えた。理由は勿論、マグルの学校に通い続けている皆のことが恋しかったからだ。

モアはベッドルームのカレンダーにバツ印を付けて、クリスマス休暇までの日にちを数え始めた。皆に送る手作りのクリスマスカードの準備も始めた。モアは段々と忙しくなり、ハリー達と一緒に過ごす時間が減ったことも気にならなくなってきた。

そんなある日、魔法薬学の授業で事件は起きた。

その日の課題は膨れ薬の作成だった。授業も終盤に差し掛かると、多くの鍋が火に掛けられ、地下牢は噓せ返るような熱気に包まれた。

スネイプ先生はスリザリン生の見回りを終えると、グリフィンドール生の鍋の間を回って粗探しをし始めた。スネイプ先生はハリーの作った薬を見て濃度が薄いとケチを付けたが、隣のモアの鍋を覗き込んでも何も言わなかった。フグの目玉を丁寧に磨り潰した甲斐あって、モアの薬は均一なテクスチャに仕上がっていた。

スネイプ先生がネビル・ロングボトムの鍋を検分しようとしたらに背を向けたその時、それは起こった。

モアは大鍋の陰に屈み込んだハリーが立ち上がるのを見た。ハリーが振り上げた指先から火花を散らす何かが飛んでいき——グレゴリー・ゴイルの大鍋の中にぼとりと落下した。

一瞬、何が起きたか分からなかった。

ただ、鍋の中身が盛大に爆発して教室中に飛び散ると、そこからはもう阿鼻叫喚だった。

ゴイルの鍋の近くに座っていた生徒達は膨れ薬の飛沫をまろに浴び、鼻や唇、肩など体の一部をみるみる肥大させていった。目玉が風船みたいに膨らんだ者、腕が丸太ほどに腫れ上がった者など被害は種々様々で、教室は悲鳴に包まれ大混乱の様相を呈していた。

被害は主にスリザリンの生徒に集中していたが、グリフィンドールの何名かも膨れ薬の影響を受けて不格好な身体を引き摺っていた。人間とは思えないほどの奇形となった生徒たちの姿は、見るにおぞましいものがあつた。

「静まれー！ 薬を浴びたものにはペしゅんこ薬を配る、ここへ並べー！」スネイプが怒鳴ると、スリザリンの生徒達がこぞって先生の机に集まり始めた。モアは、ドラコやパンジーが列に並んでいるのを見た。ドラコは鼻が小玉メロンほどの大きさに腫れてしまっているし、パンジーに至っては耳が象の耳くらいに肥大してしまっていた。パンジーは涙目になりながら、恥ずかしそうに左耳を押えていた。

あまりにも痛々しい姿に目を逸らしたモアがふとハリーを見ると、ハリーはドラコ達を見詰めて笑いを堪えるかのようにお腹を押さええているところだった。

モアの見間違いでなければ、ゴイルの鍋に何かを投げ込んだのはハ

リーだった。ハリーが何かを投げ込んだ瞬間に鍋が爆発したのは確かだった。

どうしてこんなにも笑っていられるのだろうか。モアにはハリーがこんな酷いことをする理由がまるで分からなかった。

薬を被った皆がぺしやんこ薬を飲み終えて事態が鎮静化すると、スネイプ先生は爆発した鍋の底からちりちりになった花火の消し炭を掬い上げた。スネイプ先生は苦り切った表情で言った。

「犯人を見付けた暁には、我輩が必ずそいつを退学にする。心しておくように」

ハリーは平然とした顔で、一体誰が犯人だろうとでも言うように地下牢をきよろきよろと見回していた。モアはそのあまりにも悪びれない態度に驚き、ひよつとしたら自分が目撃したのは間違いで、何かの勘違いだったんじゃないかとさえ考えかけた。

次の授業も、その次の日もハリーは何事もなかったかのように過ぎ続けた。まるで自分のした質の悪い悪戯が誰にも気付かれていないとも思っているかのようだった。

どうしてハリーはこんな馬鹿な真似をしたのだろうか、それもよりによって魔法薬学の授業で。陰険なスネイプ先生を一泡吹かせてやろうというつもりだったのだろうか。それとも折り合いの悪いドラコ達を辱めてやろうというつもりだったのだろうか。

ハリーのことは温厚なタイプだと思っていたのに、モアはすっかり裏切られたような気持ちだった。

モアは自分が目撃したことを先生に話すべきか迷った。たつぷり一日ハリーを観察しながら悩んだ挙句、モアはハリー本人に真意を問う質すことに決めた。

「ねえ、ハリー。ちよつと話があるんだけど良いかしら」

「どうしたの、モア」

「その……ここじゃあれだから、場所を変えましょう」

夕食後の大広間は生徒で溢れかえっていて、人に聞かれたくない話をするには不向きだった。

モアは食事を終えたばかりのハリーを連れ出して、校舎内をうろつ

いた。しかし何処も生徒達で一杯で、二人は人気のない場所を求めて  
ホグワーツ城の外に出た。禁じられた森の近くまで行くと流石に生  
徒達の姿は見えなくなり、モアは「ここで良いわ」と言っただけに  
向かい合った。

「ねえ、ハリー。正直に答えて。スリザリンのゴイル君の大鍋に花火  
を投げ込んだのはあなたね」

ハリーは一瞬顔を強張らせたが、いつもの穏やかな態度を維持し  
た。

「えつと……何かの見間違いじゃないかな、モア」

「見間違いじゃないわ。あなたが大鍋の陰から立ち上がって、ゴイル  
君の鍋に何かを投げるところを見たのよ。ねえ、どうしてあんなこと  
したの。あなたの規則破りの悪癖ってこういうことなの？」

モアは努めて冷静に問い掛けようとした。ハリーは首を横に振っ  
た。

「モア、僕じゃない。僕じゃないんだ」

それは自分自身に言い聞かせるような言い方だった。この期に及  
んで白々しい嘘を吐くハリーに、モアは我慢し切れず金切り声を上げ  
た。

「でもあなた、ドラコを見て笑ってたわ。いくら仲が悪いからって、あ  
んな酷いことしなくてもいいじゃない！」

「待って、これには事情が……話を聞いて！」

「本当になんてことしたのよ、ねえ。やって良いことと悪いことがあ  
るっていうことが分からないの!？」

モアはハリーの左胸を強かに突き飛ばした。ハリーはちよつとだ  
け痛そうな顔をしてよろけたが、なんとかその場に踏みとどまった。

「スネイプ先生は犯人を見付けたら退学にするって言ってたわ。私が  
話せばあなたは退学なのよ！」

モアは泣けるものなら泣きたい思いだった。ハリーがまたも規則  
破りをしたとハーマイオニーが知ったらなんて言うだろうか。空飛  
ぶ自動車事件の時にあれほど心配していたのだ、きつと今度もまた心  
を痛めるに違いない。ハーマイオニーを思うと、モアの心もズキズキ

と痛んだ。

ハリーは黙り込んでいたが、やおら口を開いた。

「モアは、僕をどうしたいんだい」

「一緒に謝りに行きましょう。自分から正直に謝れば、退学は免れるかも知れないわ」

だが、ハリーは頷かなかった。

「嫌だ、僕、スネイプになんて謝りたくない」

「どうしてよ、あなたがそんな態度なら私はスネイプ先生に話しに行くしかないわ！ それで良いの!?!」

モアは懇願するような思いだった。ハリーは面食らったように目を丸くしたが、一転して強気に出た。

「へえ、そうかい。告げ口するつもりかい。僕を退学にしたいならそうすれば良い！ どうせ僕がやったっていう証拠はないんだ、話したければ話せばいいんだ！」

それはほとんどやけくそのように聞こえた。

モアはハリー・ポッターという人間が分からなくなり始めていた。穏やかで正義感が強いはずの少年が、どうして人の大鍋に花火を投げ込むなんて馬鹿な真似をしたのだろう。人の困っている姿を見てあんな風に笑いを堪えるだなんて、これは普段一緒に過ごしてきたハリーの様子からは考えられないことだった。

それとも、モアが今まで見ていたハリーの姿は幻で、こっちが本当のハリーの姿なのだろうか。自分の過ちを謝りたくないというのが本心なのだろうか。

「あなたのこと友達だと思ってたのに、信じてたのに……こんなのはあんまりだわ。さようなら、ハリー・ポッター」

モアはハリーを残して、ホグワーツ城へと戻った。モアはハリーが追い縋って「やっぱ一緒に謝りに行く」と言ってくれることを期待したが、ハリーは追い掛けては来なかった。

それからのモアはハリー達を避け、本格的に一人で行動するようになった。ハーマイオニーはモアから何があったのか聞き出そうとしたが、モアは徹底して口を割らなかつた。

幾ら悪いことをしたからとはいえ、一時でも友達だと思っていた相手を売るのは心苦しいものがあつた。モアは丸々二日間悩み続け、だが月曜日の夜、このままなかつたことにしてはいけな思つてスネイプ先生の地下牢を訪ねた。

「スネイプ先生、モア・クレイズです。お話があります」

扉を開けると、スネイプ先生はまるで親の死に目にも会つたような仏頂面でモアを迎え入れた。部屋に入るなり、モアは早速話を切り出した。

「先生。この間の膨れ薬の事件について、私、犯人を見ました」

スネイプ先生は、片眉を上げた。

「誰だ」

「ハリー……いえ、ポッターです。私、ポッターが花火を投げる所を見ました」

スネイプ先生はたつぷり十秒は沈黙した後、絞り出すような声を発した。

「何故すぐに我輩に報告しなかつたのかね」

「それは、何が起つたのか自分できちんとか確かめたいと思つたから……」

モアは言葉尻を弱めながら俯いた。スネイプ先生は苛立つた様子で組み合わせた自分の腕をタップした。

「ほう、優秀なクレイズ殿は自分の手で事件を解決したかつた、そういう訳か。その場で証言してくれさえいけば、直前呪文を使って花火に火を点けたかどうか調べるといふ手があつた。だが、何日も経つてしまつた今となつてはどうしようもない」

「そんな……」

「ポッターが憎いことこの上ないが、被害者はこのまま泣き寝入りということになる。これは勿論、貴様の所為だ。グリフィンボールから十点減点。これに懲りたら次はもっと迅速に申告するように、分かつたかね」

ことが明らかになつていたら十点の減点どころじゃすまなかつた



はずだ。だからこれはきつと、スネイプの慈悲だった。

正直なところハリーがお咎めなしと聞いて、モアは自分がほっとしていることに気が付いた。けれど告げ口をしたのは事実だし、前みたいに一緒に過ごす気にはなれなくて、なるべくモアは一人で居ることを選んだ。モアとハリーが何か酷い喧嘩をしたという噂だけは他の生徒の間に広まっていて、急に疎遠になったことを深く追及されることはなかった。

モアはじきに来るクリスマス休暇を待ち望んでいた。早くアレイヤや皆に会いたくて堪らなかった。

クリスマス休暇まで残り一週間となった頃、一階の掲示板には決闘クラブなる物が開催されるとの張り紙が掲示された。多くの生徒達はこれに盛り上がっていたが、魔法使い式の決闘に何の興味もなかったモアはこれをスルーした。

決闘クラブの次の日になると、どういう訳かハリーがスリザリンの継承者に違いないという話が学校中に広まっていた。

なんでも決闘クラブで、ハリーがハッフルパフのジャステイン・フィンチーフレッチリーに魔法の蛇をけしかけたらしい。その際にハリーは蛇語を話したとかで、蛇と会話する能力はホグワーツ創始者であるスリザリンの持ち合わせたものなので、同じ能力を持つハリーがスリザリンの継承者に違いないという話だった。

ハリーのことがよく分からなくなっていたモアは、最早ハリーが潜めた悪意を以って蛇にジャステインを襲わせたと言われても疑えなくなっていた。

さらに次の日になると、噂はいよいよ真実味を帯びてきた。件のジャステインがミセス・ノリス達と同様に石化させられたのだ。事件現場にはまたしてもハリーが居合わせたらしく、噂話の中ではハリーはすっかり犯人として扱われていた。

今回の事件では既に死んでいるはずのほとんど首なしニックまでもが一緒に石化させられたとかで、皆の恐怖は最高潮に達していた。

モアはすっかりハリーのことを信じられなくなっていた。二度も

事件現場に居合わせるといふのはただ事ではない。ハリーに完璧なアリバイがあるコリンの事件だって、秘密の部屋の怪物を使えばどうにか出来るような気がし始めていた。

考えれば考えるほど強烈な自己嫌悪に見舞われて、モアはベッドの中で頭まですっぽりとブランケットを被った。ブルーティが甘えるように前脚でモアの二の腕を何度も踏んだが、これに応じてやる余裕すらなくなっていた。

考えているうちに、段々と腹が立つてきた。

何故モアがハリーのことでごんなに気を病まなければならぬのだろうか。元はと言えば、あんなに質の悪い悪戯をしたハリーがいけないのだ。地下牢に居た皆に嫌な思いをさせて、しかも謝りたくないだなんて相当な悪だった。

「ああ、なんでこうなっちゃったのかしら。いつそのこと嫌いになつてしまえたら良いのに！」

すると突如、それは天啓のように降ってきた。

なんてことはない。ハリーのことを本当に嫌いになつてしまえば良いのだ。大切な相手ならいざ知らず、嫌いな相手のことならばうじうじと気に病む必要もない。

モアにとつて、これはとても良いひらめきに思えた。

「ハリーなんて嫌い、大嫌い」

モアは自己暗示でも掛けるように口にしてみる。具体的な言葉にして吐き出すと、途端に胸の内がすつとするような気がした。

「ハリーの馬鹿、分からず屋、おたんこなす、あほんだら」

今までの人生では皆と仲良くすることばかり考えていたので、特定の誰かを嫌いになろうとする事はモアにとつて初めての経験だった。モアは次々にハリーを貶める言葉を探した。

「あんぽんたん、トンチキ、眼鏡小僧、ぼさぼさ頭のすつとこどつこい！」

言葉を重ねていくうちに、何故だろう、モアは段々と気分が晴れやかになってきていた。これはモアが十一年生きてきて初めて気付いた感覚だった。

モアはこの晴れ晴れとした気持ちに身を任せることにした。

「決めたわ、私はハリーが嫌い！ だからもう、あいつのことでこれ以上悩まない！ これでおしまい！」

モアはブランケットを剥いで寝返りを打つと、横で丸くなっていたブーティの頭を思いつきり撫でた。ブーティはやつと応えてくれたとばかりに頭を摺り寄せると、もつと撫でてとても言うように寝転がってお腹を見せた。

一頻りブーティと戯れると、モアは久方振りに気分よく眠りに着いたのだった。

## (12) クリスマス休暇

モアが待ちに待ったクリスマス休暇がやってきた。

キングズ・クロス駅から電車を乗り継ぐと、モアはまずダイアゴン横丁へ向かった。アレイヤにもらった腕時計を直してもらったためだ。

時計屋は簡単な魔法を掛けて、モアの腕時計がホグワーツでも使えるようにしてくれた。他にも魔法動物ペットショップに立ち寄って、ブーティへのクリスマスプレゼントに新しいおもちゃを買い込んだ。ダイアゴン横丁は相変わらずへんてこな街だったが、ホグワーツでの生活で耐性の出来たモアはもうあまり気にならなくなっていた。

それから地元に戻ると、モアの胸には何とも言えない喜びが広がった。皆と同じ町に居ると考えただけで、モアの気持ちは浮き足立った。

家々は真つ白な雪に覆われ、静かな眠りに就いているようだった。今年もホワイトクリスマスになるだろうと思って、モアは頬が緩むのを感じた。

自宅の近くまで行くと、家の前に見覚えのある人影が見えた。

「アレイヤー！」

玄関のポーチにアレイヤが座り込んでいた。四ヶ月ぶりに会ったアレイヤは伸びた髪をポニーテールにしてビロードのリボンで留めていた。服装はいつものボーイッシュなスタイルで、暖かそうな臍脂のセーターの上にオーバーオールを履いていた。

モアが駆け寄って再会のハグを交わすと、アレイヤの快活な瞳がきらりと輝いた。

「どうして手紙をくれなかったのよ。私、ずっと待ってたのに」

「ごめんなさい、アレイヤ。勉強がとても忙しくて」

まさか魔法界の郵送手段がふくろうだったから送るわけにはいかなかった、だなんて口が裂けても言えなかった。モアが魔法使いの学校に通っているだなんて微塵も知らないアレイヤは、ちよつとだけ怒った素振りで片頬を膨らませた。

「もう、忘れられちゃったのかと思ったじゃない」

「忘れるわけないわ、会いたくて会いたくて堪らなかったのに！」

モアはアレイヤの両手を取るときぎゆうつと握り締めた。寒い中こうしてモアのことを待っていてくれたことがとても嬉しかったのだ。

「良かったら今年もクリスマスディナーを食べに来てよ。ママったらモアが来るって張り切ってるのよ」

「毎年お邪魔して申し訳ないわ」

「水臭いことは言いっこなしよ。モアはうちに来てディナーを食べる、オーケー？」

「オーケーよ、アレイヤ」

アレイヤは満足したように笑顔を浮かべると、モアの背中を叩いた。

「さ、お家に上げてちょうだい。紅茶はストレートでね」

モアの家上がったアレイヤは、ブーティを見るなりすっかり夢中になった。アレイヤはモアが今日買ってきたばかりのおもちやを散々広げて、ブーティの気を惹いたりからかったりして楽しんだ。ブーティの方も満更ではないようで、新しいおもちゃで遊んでくれるアレイヤにすっかり懐いてしっぽを巻き付けた。

「休みの間しか戻って来れないのにペットなんて飼って大丈夫なの？

「学校は全寮制なんでしょう？」

「一緒に連れて行くのよ。あの学校はペットを連れてきても良い決まりがあるから」

「へえ、柔軟なのね。なんていう名前の学校だっけ、確かオプアーツ？」

「あー、それより皆は元気かしら。シャロンは今月誕生日だったわよね」

モアは露骨にホグワーツの話題を避けた。深く突っ込まれるとボロが出るのが分かっていたからだ。聡いアレイヤのことだ、些細な事柄から何かに気付いたとしてもおかしくなかった。

シャロンについて聞かれたアレイヤは、とっておきの秘密を明かす時のようにふふふつと微笑んだ。

「シャロンと言えば彼女、最近ヤンセンと付き合い始めたのよ」

「嘘でしょう、あんなに仲が悪かったのに！」

「ヤンセンがシャロンに意地悪してたのはずっと好きだったからなんですって。男の子って馬鹿よね」

その後もヒューイがついにテストで一番になったとか、ジョアンナがモデル事務所にスカウトされたとか他愛もない話が無限に続いた。アレイヤとのお喋りは楽しくて、気付けばモアは紅茶を三倍もお代わりしていた。

遊び疲れたブーティは、ダイニングの椅子の上ですっかり丸くなっていた。モアは眠るブーティの毛並みを指先で梳きながら、やっぱり皆と一緒にこっちの学校に通いたいと強く思った。

アレイヤが帰ると、段々と寂しさが身に染みるようになってきた。クリスマス休暇を終えたらまた離れ離れになってしまう。明日はクリスマスだというのに、モアはすっかり悲しくなっていた。

喜びに満ちたクリスマスの朝。モアはこつこつと叩く硬質な音で目を覚ました。眠たい目を擦って起き上がると、白と茶色の二羽のふくろうが嘴で窓を突いているところだった。

モアは窓を開けた。真冬の冷たい風とふくろうが部屋に舞い込んできた。二羽のふくろうは部屋の中を旋回すると、モアの膝の上にならずしりと重たい何かを墜落させた。モアは荷物が骨に激突した痛さにうめき声を上げた。

「うーっ、こんな朝からなんなのよ、もう！」

モアが痛い膝を擦っていると、茶色のふくろうが早く荷物を外せとも言うようにモアの腕を突いてきた。ゆるゆるとした動作で荷を解くと、ふくろう達はやっと解放されたとも言わんばかりに勢いよく窓の外へと飛び立っていった。

ふくろう達の運んできた包みは二つあった。一つは手の平にちよこんと載るほどの小さいサイズで、もう一つはそれより二回り以上大きくて重たい代物だった。モアの膝を打ち付けたのは勿論後者だ。この重たい荷物を運ぶためにふくろうが二羽も駆り出されたのだから。

モアは小さい方の包みを無視して、ずっしりと重たい方の包みを開き始めた。モアの膝を痛めた原因が何か確かめずには居られなかったからだ。

緩衝材で嚴重に包まれたそれは、直径十二センチほどある水晶玉だった。

これを見て、モアは直感した。

「この水晶玉、まさか父さんから私に!？」

モアは水晶玉に添えられたカードに目を通す。当たりだった。

——メリークリスマス。来年の選択科目はもう決めただろうか。君が占い学を取ることを期待して、私が目利きした中でも特に美しいこれを送ります。

モアの父親は、毎年何かと自分の眼鏡に適った石を送りたがるのだった。去年は確かローズクォーツ製の数珠だったし、その前の年は縞瑪瑙のコースターだった。どうせなら可愛いブローチやアクセサリをくれれば良いのに、そうはいかないのがモアの父親だった。

モアに届いた水晶玉は、小ぶりながらも透明で純度の高い代物だった。石にうるさいモアの父親のことだから、これはガラス製の模造品ではなく、多分天然物のはずだ。きっとモアの想像以上の値段がするのは間違いなかった。

お金がかかっている割りにあまり嬉しくならないプレゼントというのは不思議なもので、モアはこれを丁寧に包み直すともう一つのプレゼントを解き始めた。

茶色い包装紙の下から出てきたのは小さなジュエリーケースで、今度こそ期待が持てそうだった。

モアがケースを開けると、中には赤い石のペンダントトップが収められていた。小指の先ほどの小さなサイズで、石を分割するようにして白っぽい十字の模様が浮かび上がっている。

モアは箱に添えられたカードに目を通した。先程の水晶玉と同じく、父親の字で書かれていた。

——君の母さんから君がホグワーツに入ったら渡すようにと預かっていた。スターガーネットのオーバルカボションカットだ。四

条光アステリズムの美しさは筆舌に尽くしがたい。

モアが母親からプレゼントを貰うなんていうのは、初めての経験だった。というのも、モアの母親は父親と違ってこれまでクリスマスも誕生日も何もくれたことがなかったからだ。

モアは初めてのこのプレゼントを、どうしたものかすっかり迷ってしまった。貰って嬉しくない訳ではないのだが、何となく自分で身に付けるのが癪に感じられたのだ。

丁度その時、ブーティが廊下から扉の隙間を抜けて部屋に入ってきた。モアはちよつと据わりの悪い気持ちを感じながらペンダントトップを取り上げると、見比べるようにブーティの目の前に掲げた。「ねえ、この大きさなら首輪につけたら素敵じゃないかしら。私には水晶玉があるし、あなたにあげるわねブーティ」

モアはブーティを抱え上げると、首輪の金具の所にペンダントトップを取り付けた。赤い石は黒い毛並みによく映えた。モアは満足げに笑って、ブーティの頭をくしゃくしゃと撫でた。

リビングに降りると、モアは届いたクリスマスカードのチェックを始めた。アレイヤ、ジョアンナ、ジャンにミル。シャロンにヒューイ、それからハーマイオニー、他にも沢山。

学期中あんなに素っ気ない態度を取っていたパンジーからもきらきら光るクリスマスカードが届いた。これにはモアは大喜びだった。

昼頃になると、モアはアレイヤの家のクリスマスディナーにお呼ばれして行った。

アレイヤのお母さんはアレイヤに似た美人で、料理が上手だった。若い頃はバーミンガムのブリティッシュレストランで料理人をしていたらしい。素朴な家庭料理が大得意で、モアのイメージする母親の味と言ったら専ら彼女の料理だった。

アレイヤのお父さんは手先の器用な木工職人で、今年はモアに小さな天使の木像をプレゼントしてくれた。恰幅の良い優しいおじさんで、ブーティの話をしたら来年は猫の木像を作ってくれと約束してくれた。

アレイヤの家族と一緒に食べるディナーは最高だった。



自家製のクランベリーソースは甘酸っぱくて七面鳥にぴったりだったし、マスタードを利かせた芽キャベツのソテーはとてもさっぱりして美味しかった。デザートのカリスマस्पディングは食べる前に火を点し、アルコールがすっかり飛んでからホイップクリームをたっぷり掛けていただいた。

デイナーの後はアレイヤ達とボードゲームをして楽しんだ。アレイヤが一番になり、景品のママお手製トライフルを手に入れた。モアは最下位だったのだが、気を利かせたアレイヤから一口味見させてもらうことが出来た。

幸せな一日は飛ぶように過ぎ去っていった。

次の日はモアのために元クラスメイト達が集まった。

皆が集まった学校のグラウンドは一面真っ白で、校舎の屋根にも分厚い雪の層が出来ていた。まだ転校してから半年も経っていないのに、モアはこの景色を随分と長いこと見ていなかったような懐かしい気持ちに誘われた。

モア達は二手に分かれて雪合戦をした。

リチャードは抜群の運動神経を生かして幾つもの雪玉をかわし続けたし、ジョアンナは最初は服が濡れるからと乗り気でなかったが、最後には雪塗れになって誰よりも多くの雪玉を投げた。ジャンは積極的に雪玉にぶつかりに行き、滑稽な当たり方で皆を大いに笑わせた。ミルとは味方同士なのに雪玉をぶつけただのぶつけていないだのと久々に口喧嘩をしたら、途中から段々愉快になってきて二人で大口を開けて笑い合った。

皆で散々雪に塗れて、体の芯まで凍えながら、でも心はとても温かかった。

遊び終えて一人と一匹の家に帰ると、案の定途端に寂しさが染みしてきた。連休が明けたらホグワーツに戻らなければならないことを考えると、モアは恐ろしい憂鬱に囚われそうになった。まだ休暇は何日も残っていたが、残りの日数をこんな気持ちで過ごさなければならぬなんて信じがたい痛苦だった。

モアはストーブの傍で温まっていたブルーティを抱え上げると、ぎゅつと抱き締めた。猫特有の高い体温が染み渡り、孤独の闇をじんわりと溶かしていくように思えた。

モアにとつて、ブルーティは最後のよすがだった。

「私、やっぱりみんなと一緒にの学校に通いたい。魔法なんて使えなくていい、ただ皆と一緒に居たい……!」

モアはしゃくり上げた。抑えても抑えても涙がぼろぼろ零れてきた。ブルーティは首を伸ばすと慰めるようにモアの頬を一舐めしたが、モアの気が晴れることはついぞなかった。

楽しい冬休みは矢のように飛び去り、ホグワーツに戻る日がやってきた。キングズ・クロス駅に行くモアの足取りは軽やかという訳にはいかなかったが、それも荷物を片手に列車に乗り込もうとしているパンジーを見付けるまでだった。

モアはパンジーを見るなり急に元気になって、意気揚々と声を掛けた。

「パンジー! お久しぶり、この間は素敵なクリスマスカードをありがとう」

パンジーは驚いた亀のように首を竦めてこちらを見た。

「うっ……モアじゃない。あれは義理で出しただけだからね。お願いだから学校ではあまり声を掛けないでちょうだい!」

「なら、あなたは義理堅いってことね。本当にカード嬉しかったわ!」

モアはパンジーにひらひらと手を振ると、空いている扉から車両に乗り込んだ。発車時刻が近いこともあり、車内はどこも生徒達で一杯だった。座れるところを探して車両を渡り歩きながら各コンパートメントを覗き込んでみると、中程の車両で本を開いていたエミールと目が合った。

エミールは本をベンチの上に伏せると、立ち上がってコンパートメントの戸を開けた。

「やあ、モア。席を探しているなら座っていくかい?」

これは思ってもみなかった展開だったが、モアは快く受け入れた。

「良いの？ 折角のお誘いだし、じゃあお邪魔しようかしら」

モアは誘われるがままにコンパートメントに滑り込むと、エミールの了承を得てキャリーの中から可愛い子猫を出してやった。

やがて発車時刻を迎え、九と四分の三番線から列車は走り出した。様々な喜びや悲しみを乗せ、列車はホグワーツに向かう道程を辿り始めた。

(13) お喋りな紙切れ

新学期開始から数日。ハーマイオニーの姿が見えないことで、校内には様々な噂が流れていた。最も有力なのはスリザリンの継承者に襲われたという奴で、他には事件を心配した両親に退学にさせられたとか、実はハーマイオニーが継承者でバレて学校に居られなくなっただとか、とにかく根も葉もないのが色々飛び交った。

あのハーマイオニーが授業を欠席しているだけでなく女子寮にも戻ってこないとは、何かただ事でないことが起こっているのだけは確かだった。冬期休暇の間は学校に残っていたようだから、そこで何かがあったのは間違いなかった。

噂の真偽を確かめられないでいると心配は膨らむもので、辛抱ならず、遂にモアは仲良し三人組の残り二人に聞いてみることにした。モアは長テーブルの端で夕食を摂っていた二人の所まで歩いていくと、ハリーを無視してロンに話しかけた。

「ねえ、冬休み明けからハーマイオニーの姿を見てないんだけど、何かあったの？ あなたなら知っているでしょう？」

「あー、彼女、いま体調が悪くて医務室に居るんだ」

ロンはポークソテーを口に捻じ込みながら言った。モアはびつくりして口をあんどぐり開けた。

「医務室ですって？ 大丈夫かしら、お見舞いに行かなくちゃー！」

「いや、お見舞いは止めておいた方が良いと思うよ」

「どうして？」

「問いかけると、途端にロンは言葉を濁した。」

「あー、ほら、アレだよ。えーと、その」

「感染るといけないから」

横からハリーが助け舟を出した。モアはちらりとハリーを一瞥したが、すぐにロンに向き直った。ロンは誤魔化すような笑い顔を浮かべた。

「つまり、アレだ、質の悪いインフルエンザなんだよきつと」

「そうだったのね、可哀想に。それじゃあお見舞いは止めておくわね」

「僕もそれが良いと思うよ、うん」

「教えてくれてありがとう、ロン。あなたも体調には気を付けて」

夕食を終えて女子寮に戻ったモアは、トランクをひっくり返して荷物の中からポストカードと可愛いシールを探し始めた。ハーマイオニーにお見舞いカードを書くためだ。

ハーマイオニーを心配している旨、早く良くなってほしい旨などを二言三言書き綴ると、モアはメッセージの周りを囲うようにシールを一杯貼り付けた。

このシールは冬休みにファンシーショップで仕入れたばかりの新作で、赤毛の猫と栗毛の女の子が温かみのあるタッチで描かれたものだった。女の子がちよつとハーマイオニーに似ているから買ったというのは内緒だ。早速お披露目出来ることになってモアはちよつとだけ嬉しく思った。

最後に笑った女の子の顔を天辺に貼り付け、お見舞いカードは完成した。会心の出来だった。

出来たばかりのカードと一年生の教科書を持つと、モアは急いで医務室に向かった。補習授業まであまり時間がなかったのだ。まずはカードを届けて、その足で補習授業に行くつもりだった。

階段を下る途中、モアは三階の廊下からやってきたロックハートに出会わした。ロックハートはそのままモアと一緒に階段を下ると、医務室の扉の前まで着いてきた。

扉の前で二人は立ち止まり、ようやく気付いた風でロックハートが声を掛けた。

「おや、ミス・クレイズ。医務室に来るとは、どこか体調でも悪いんですか?」

「いえ、私はハーマイオニーにお見舞いカードを渡しに来たところで……」

するとロックハートは喜んだ様子で大きさに頷いて見せた。

「奇遇ですね! 私ミス・グレンジャーにお見舞いカードを届けに来たところですよ」

ロックハートは片手に持った金色のカードをぴらぴらと振って示

した。モアはロックハートと発想が一緒だったことに軽いショックを覚えながら、曖昧な愛想笑いを浮かべた。

「特定の生徒に肩入れするのはあまり良くありませんが、療養中のミス・グレンジャーを励ますくらいは許されると思います。おつと、私のサイン入りカードが欲しいからと言って仮病を使つてはいけませんよ。まさかとは思いますが、念のため、ね」

モアは自分の愛想笑いが固まるのを感じた。これに気付かない様子のロックハートはモアに向かって大きく一歩詰め寄った。

「カードですが、君さえ良ければ私が一緒に渡しておきましょう」

要らぬ氣を利かせたロックハートが頂戴の形で手の平を出した。

「えーっ!? えーと、それじゃあ……お願いします」

マダム・ポンフリーにカードを預ける氣だったモアは、補習まで時間もないとはいえ、渋りながらロックハートにお見舞いカードを渡した。受け取ったロックハートは任せろと言わんばかりにウインクを飛ばすと、医務室の扉を開け、扉の隙間に身を滑り込ませながらモアに手を振った。

顔だけ見れば格好良いはずのロックハートだが、それを自覚した振る舞いがモアにはどうにも鼻について堪らなかった。ハーマイオニーはロックハートに心酔しているようだが、あれの何処が良いのか全然分からないモアだった。

だが、ロックハートの見舞いで少しでもハーマイオニーが元氣になるのならそれに越したことはないだろう。

モアは肩を竦めると、急ぎ足で天文台に向かった。

次の朝、モアは朝食までの時間をブーティのブラッシングに費やしていた。ブーティはこの頃遊び盛りで、夜中になると談話室中を一杯駆け回っているようだった。疲れて丸くなっているブーティの毛を猫用ブラシで梳いていると、不意に手元に影が射した。

「モア・クレイズ?」

ブラシを動かしていた手を止めて、顔を上げる。声を掛けてきたのはジニー・ウィーズリーだった。低血圧の氣でもあるのだろうか、今

朝は何時にも増して青白い顔をしていた。

「どうしたのジニー」

「モア、これを受け取ってほしいんだ」

モアはジニーが差し出した、四つに折り畳まれた紙切れを受け取った。手紙か何かかと思いい、促されるがままに広げてみる。それは真っ白な、何も書かれていないただのノートの切れ端のようなものだった。

モアは小首を傾げた。

「これは一体何なのかしら。ただの紙切れにしか見えないけれど……」

ブラックライトを当てたり火で炙ったりしないと読めない手紙なのかと思いいながら、モアは紙を光に透かしてみた。矢張り、何か書かれているようには見えない。

ジニーはにっこりと微笑んだ。

「書き込んでみれば分かるよ。但し、誰にも見られないように気を付けて。いいかい、一人の時に使うんだ」

「よく分からないけど、分かったわ、ジニー」

モアは夕方になってから、図書室の奥の閲覧席でそれを開いた。というのも、それまで魔法史の課題レポートに取り組んでいたのだが、すっかり煮詰まってしまうていたのだ。

ジニーから貰った謎の紙切れが良い気分転換をもたらしてくれることを期待して、モアはペン先をインク壺に漬けた。

周囲に誰も居ないことを確認し、書き込んでみれば分かると言われる通りにそっとペン先を下ろしてみる。何を書こうか迷っている間にペンを置いたところからはじわじわとインク染みが広がり、しかし、不思議なことにそれらはすぐ紙面に吸い込まれるようにして消えた。

それだけでも不思議なのに、さらに不思議なことが起こった。今しがた吸い込まれたばかりのインクが、几帳面な文字となって紙面に浮かび上がってきたのだ。

『君がモア・クレイズかい？』

モアはびっくりして羽ペンを取り落とす。紙の上にインクが飛び散ったが、それも紙の中に吸い込まれて消えてしまった。

モアは恐る恐るペンを手に取ると、紙に書き込んでみた。

「あなたは誰？」

すぐさま返事が返ってきた。

『僕は五十年前に残された記憶です』

「五十年前？」

『かつて秘密の部屋の開かれた時期、と言えば分かり易いでしょうか』

モアは驚いて紙切れを二度見した。この紙は何かとんでもない秘密を知っている、そんな気がした。

モアは逸る気持ちを押えながら、ペンを走らせた。

「秘密の部屋は前にも開かれたことがあるの？」

『ええ。でもその話は置いておきましょう。僕は君に興味があります。君とお喋りがしたくて、ジニーに僕の日記の切れ端を君に渡してもらいました』

得体の知れない紙切れに興味を持たれていると知って、モアはちよつとだけ怖い気分になった。

「私のこと、どうして知っているの？」

『ジニーから聞きました。自分を励ましてくれた優しい上級生が居ると』

「ジニーともこうしてお喋りをしていたの？」

『はい。この半年、僕はジニーの相談に乗ったり、他愛ないお喋りをしていました。どんなことを話したかはジニーと僕との秘密なのでお教えすることは出来ませんが、とても仲良くさせてもらっています』  
人のプライバシーを気にする程度の配慮はあるらしい。モアは納得しながら書き込んだ。

「あなたは何者？」

『先程も言った通り、記憶です。日記に封じ込められたある学生の記憶が僕の正体です』

さつき彼は、この紙切れが日記の切れ端だといった。ジニーは誰かの記憶が封じ込められた日記の切れ端をモアに寄越したということ



らしい。人の記憶を保存するなんて、そんな魔法があるものなのかとモアは感心した。

紙切れは先程からモアの質問に素直に答えてくれているし、これがただの人の記憶ならそんなに悪いものではないのかも知れない。モアはちよつとだけ勇気を出してみることにした。

「あなたのお名前は？」

『名乗るのが遅くなりましたね。僕はトム・リドルです。ジニーは気軽にトムと呼びます』

「よろしく、トム。どうして私に興味を持ってくれたの？」

『僕の仲の良い後輩にもクレイズが居ます。君が彼の孫だと知り、ぜひ仲良くなりたいと思ったのです』

モアはこれに食い付いた。

「私のおじいちゃんのこと知ってるの!? 私、おじいちゃんには会ったことないの！ 物心ついた時にはもう亡くなっていたから」

『彼のことはよく知っていますよ。ドーレンスは優秀な後輩でした。僕はスリザリン、彼はハツフルパフでしたが、僕達は寮の隔たりを超えて仲良くしていました』

モアの祖父はドーレンスというらしい。モアは生唾を飲み込んだ。トムは更に言葉を続けた。

『彼は僕より二学年下ですが、そうとは思わせないほどの才気に溢れていました。僕はよく彼に勉強を教えていましたが、僕の方が教わることも多くありました。とてもいい友を得られたと感謝しています』  
「おじいちゃんはどんな人だったの？」

モアはわくわくしながら質問を書き込んだ。トムはちよつとだけ悩んだように時間を置いてから、また文字を浮かび上がらせた。

『穏やかで人好きのする性格である一方、学問に対する追求力が人一倍強い少年でした。僕は、彼がハツフルパフであることを忘れそうになることがよくありました。ドーレンスがレイブンクローやスリザリンでないことを惜しく思いながらも、時折見せる彼のハツフルパフらしさに驚かされたものです』

レポートのことなどはさっぱり忘れて、モアはこのお喋りな紙切れ

にすっかり夢中になっていた。おじいちゃんの得意教科はなんだったとか、好きな食べ物は何だったの、モアはロックハートの最初のテストを馬鹿に出来ないほど下らない質問を幾つも幾つもした。けれどトムは飽きもせず、一つ一つに丁寧な答えを返してくれた。

気付けば一時間近く経っていて、夕食のために大広間に向かわなければならぬ頃になっていた。

「そろそろ夕食だから行かなくちゃ。色々なことが聞けて楽しい時間だったわ、ありがとう」

『君が喜んでくれて幸いです。でも、ジニーには僕とこんなに喋ったことを話さないでください』

「どうして?」

『君と僕が仲良くなったと聞いて、ジニーが焼きもちを焼いたらいけませんから』

モアはちよつとだけ逡巡してから書き込んだ。

「分かったわ」

トムは更に付け加えた。

『それから、他の人にも僕の話は伏せておいてください。悪用されたら困りますから。君さえ良ければまたお話ししましょう』

「ええ、勿論」

モアはすっかり満たされた気分だった。会ったことのないおじいちゃんの学生時代の話は、家族について知っていることの少ないモアにとって大きな収穫となった。軽い足取りで大広間に向かい、グリフィンドールのテーブルにジニーを見付けると、モアは喜んで隣に座った。

「ジニー、素敵なプレゼントをありがとう、本当に嬉しいわ!」

「モア、一体何の話?」

モアはうつかりしていたとばかりに手を打ち鳴らした。

「そういえばこの話は内緒だったんだわ。とにかくありがとうが伝えなかったの、それだけよ」

「よく分からないけど、どういたしまして」

ジニーは止めていた手を動かして食事に戻った。モアはうきうき

した気分で、ほうれん草のオムレツを皿に取り分けた。

モアはジニーからの贈り物をすっかり気に入っていた。トムのお陰で、モアの知らないおじいちゃんイメージがモアの中でどんどん膨らんでいた。おじいちゃんは卵料理が好きで、一番好きな料理はオムレツだったらしい。今日の夕食なんて特に喜ぶんじゃないだろうか。

考えながら、モアはフォークを口に運んだ。今日は特別食事が美味しく感じられた。

次の日は、新しく出た魔法薬の宿題に追われて一日が過ぎ去った。更に二日が経った頃、モアは例の紙切れにこんな文字が浮かび上がっているのを見付けた。

『良ければまた僕と少し話しませんか』

これに気付くと、モアは申し訳ない気持ちに駆られた。初めてトムと知り合ってからもう三日も話していなかったことになる。モアは慌てて言い訳を書き連ねた。

「ごめんなさい、魔法薬の宿題が大量に出て大変だったの。それに、この間長いことお喋りしてた所為で、まだあの時書いてたレポートが終わってないのよ！ 申し訳ないけれど、また今度にしてもらっても良いかしら」

トムは機嫌を損ねた素振りもなく、すぐさま返事を書いて寄越した。

『何のレポートですか？』

「魔法史よ。輸送手段としての箒の導入についてまとめなくちゃいけないんだけど、全然捗ってなくて」

『それなら、この本が良いと思います』

浮かび上がった文字がさっと消え、新しく幾つかの書籍名と著者名が並んだ。モアはびっくりしてこれを二度見し、空いているスペースに走り書きをした。

「あなた、もしかして勉強ができる方なの？」

すると、どう答えようか迷った時のようにちよつと間をおいて、ま

た文字が浮かび上がった。

『自分で言うのもなんですが、ホグワーツでは首席でした』

『首席ですって?! 私は凄い人を味方につけたかも知れないわ!』

『君さえ良ければ幾らでも味方しますよ。君も僕にとってはドーレンスと同じ、大切な後輩のようなものですから』

『ありがとう、トム! とっても心強いわ!』

ハーマイオニーの助力がない今では、トムの存在は本当に頼もしく感じられた。

その後、モアはトムに相談しながらレポートを書き進め、一人で書いていた時とは比べ物にならない速さで完成まで漕ぎ着けた。モアのレポートは完璧とはいかなかったが、それなりの評価を得られそうな見込みが見えていた。

『あなたってジニーの勉強も見てあげているの?』

『いえ、記憶になってから誰かの勉強を見るのは初めてです。こうして人に教えるのは楽しいものですね』

レポートが終わると、モアはまたトムとのお喋りに興じた。

気が付けば、モアは魔女になりたくないことや魔法が使えないこと、両親との仲が疎遠なことなどを洗いざらい話していた。トムはこれを聞いて大層驚いていたが、モアの気持ちを尊重して受け容れてくれた。

トムの方も、幾つか自分のことを話してくれた。孤児院で育ったということ、両親についてよく知らないということ、居場所が学校にしかなかったこと。

何となく共通点のようなものを感じて、モアはもうすっかりトムに心を開いていた。アレイヤにも話せなかった魔法界の事柄だって、トムには自由に話すことが出来た。これはモアにとって大きなストレス発散になった。

その後もトムは、時折こうして話を望むようになった。五十年前から残っている日記の一部だ。長いこと人と関わるのが遠退いていた所為で、会話に飢えているのかも知れないとモアは思った。

その後もモアはトムと図書室で、談話室で、女子寮で語り合い、親

交を深めていった。どんな本心を言ってもトムは優しく受け止めてくれて、モアはこの信頼のおける友人を決して疑うことはなかった。

(14) 万能吸水ペーパー

二月の初めになると、ハーマイオニーが女子寮に戻ってきた。質の悪いインフルエンザだとは聞いていたが、それにしてはちよつと復帰に時間のかかりすぎた印象だった。

戻ってきたハーマイオニーはまず、この一ヶ月全く疎遠だったハリーとモアの仲を取り持とうとした。ハーマイオニーは呪文学の授業を終えて談話室に戻ろうとしていたモアを教室に引き留め、周りに誰も居なくなつてから話を切り出した。

「ハリーから全部聞いたわ。あなた、ハリーが授業中に膨れ薬を爆発させたことを怒ってるんでしょう。あれにはね、ちよつとした事情があつたのよ」

「事情ですつて?」

そういえばハリーもそんなことを言っていたような気がする。モアはちよつとだけ話を聞いてみようかと思つて、腕を組んだ。ハーマイオニーは何を言おうか迷つた様子で、唸りながら言葉を捻り出した。

「その、なんて言うのかしら。私達には薬を爆発させてでもやるべきことがあつたのよ」

ハーマイオニーのこの告白に、モアは耳を疑った。

「ちよつと待つて、まさかハーマイオニーも絡んでたの!? なんてこと、信じられないわ!」

まさかハーマイオニーもグルだったなんてモアは思つてもみなかった。この様子ならきつとロンも一件に関わっているに違いない。何も知らないのはモアだけだったというわけだ。

モアは失望を胸に教室を去ろうとした。ハーマイオニーが追い続つた。

「お願いだから話を聞いて、モア」

「言い訳なんて聞きたくないわ! あなた達がすべきなのは今すぐスネイプ先生の所へ行つて、謝ることなのよ」

どんな理由があるのかは知らないが、それで人を傷つけて良い理由

にはならない。そんな当たり前のことが分からないだなんて、モアはハリーだけでなくハーマイオニーにもがっかりだった。

その後もハーマイオニーは事ある毎にモアを引き留めて話をしようとした。ハーマイオニーは何とかモアを説き伏せようとしたが、どれだけ言葉を尽くしてもモアは耳を貸さなかった。次第にモアはハーマイオニーまで避けるようになり、冬休み前は毎日のように二人でやっていた魔法の練習もすっかりご無沙汰になっていた。

ハーマイオニーの次はハリーだった。

ある日廊下で出会ったハリーは、モアの行く手を塞いでどうにか話し合いを持とうとした。

「聞いて、モア。僕、モアと仲直り出来ないかと思って」

「仲直りですって？ 馬鹿言わないでちょうだい、きちんと謝るのが先よ」

「ごめん、モアには心配かけて悪かったと思ってるよ」

「全然違う！ 私に謝ったって意味ないわ。もう、あなた全然分かってない！」

モアは意地になっていった。このところはもう、絶対にハリーを許すものかという気分で日々を過ごしていた。

モアはこの憤懣をトムの日記の切れ端に書き綴った。

「なんであんなに分からず屋なのかしら！」

トムは至って冷静に、モアを宥めようとした。

『一度、監督生に相談してみるのはどうですか。きちんと指導してくれるかも知れませんよ』

「パーシーはいつも忙しそうにしているの。こんなことで手を煩わせるのは申し訳ないわ。ああ、もう。ハリーが反省して先生と皆に謝れば済むだけの話なのに！」

『友達の過ちを正そうとする君の志は立派だけど、あまり意地を張り過ぎないようにね』

「ありがとう、トム。でも一つだけ訂正させて。あんな分からず屋、もう友達なんかじゃないわ！」

ハリーはモアと何とか元の関係に戻ろうとして、頻繁に話しかけて

くるようになった。授業の前に教室で、食事時に大広間で、空き時間には談話室で。ハリーはモアとの間に他愛ない会話を持つとうとした。

「やあ、モア。薬草学のレポートは終わったかい？」

「私のレポートがどうだろうと、あなたには関係ないでしょう！」

「ああ、モア。今日の変身術は特に難しかったよね。僕のは全然上手く行かなくて緑色に変わったただけだったよ」

「それ私に対する嫌味なのかしら!？」

モアはハリーを必死にあしらおうとし続けた。けれど、ハリーはめげずに何度も話しかけてきた。モアに言わせれば、今のハリーはコリン・クリービー並みのしつこきだった。

「おはよう、モア。最近の君、ちよつと顔色が悪いよ。目の下にクマが出来てるし、ちゃんと寝てるの？」

「うるさいわね、放っておいてちょうだい！」

このところはベッドに寝そべりながら深夜遅くまでトムと話すことが増えていたから、ハリーの言うことは凶星だった。モアは凶星を指された悔しさに憤り、またトムの紙切れに書き綴った。

木曜日の午後。魔法薬学の授業を終え、モアが地下牢に残って大鍋を洗っていると、後ろから近付いてきた誰かがモアの肩を叩いた。

「ねえ、モア」

「何よー」

またもやハリーかハーマイオニーと思いきや、振り返った先に居たのはパンジーだった。反射的に刺々しく返してしまったが、今日は珍しくパンジーの方から声を掛けてきてくれたのだった。

あれだけ学校では話しかけないで欲しいと言っていたのにどうしたのだろう。モアはきよとんとしてパンジーを見詰めた。

「ねえ、あなた、この所ずつと顔色が悪いみたいだわ。本当は具合でも悪いんじゃないの」

パンジーはモアの顔を覗き込むと、腕を伸ばして頬に手を当てた。モアはパンジーのひんやりした手が気持ち良くて、くすくすと笑い声を上げた。

「心配してくれてありがとう。でも、全然元気なのよ。多分、二月の寒



さが身に堪えてるだけだわ」

パンジーは疑い深い眼差しでモアを観察していたが、やがて小さな溜め息を吐いた。

「そう、何でもないなら良いの。まだしばらく寒いんだし、体調には気を付けなさいよね」

それだけ言い残すと、パンジーは先ほどとは打って変わってつんとした態度で地下牢を出て行った。パンジーが心配してくれたことが嬉しくて、モアはたわしで大鍋を擦る手に力が入るのを感じた。

二月も半ばに差し掛かったある朝、モアは大広間の扉を開けて大層驚くことになった。

大広間の壁中が派手なピンクの花々で飾り付けられ、天井からは大量の紙吹雪が降り注いでいる。モアが手元に落ちてきた紙吹雪を拾い上げると、それは可愛らしいハート形をしていた。

一体何のイベントだろう。考えたモアは、教職員席でシヨツキングピンクのローブを纏ってにこにこしているロツクハートを見て、今日がバレンタインデーだということを強制的に思い出させられた。

「バレンタインおめでとー！」

ロツクハートが叫んだ。

「私の所には四十六枚のカードが届いています、ありがとうございます！ 事件で落ち込んだ皆さんの気持ちを励まそうと、このようにさせていただきました……しかし、これだけに留まりません！ さあ、私の愛すべき配達キューピッド達です！」

キューピッドという割に可愛げのない小人が、そろそろと十人ほど大広間に入ってきた。全員が全員、背中に金色の羽根を背負い、手には小さなハープを携えていた。

ロツクハートの言葉によれば、今日一日かけてこの小人達がバレンタインカードを配るとのことだった。これを聞いてたちまち顔色の曇った生徒達がいることを見るに、一日かけて一体何をやらかしてくれるのか、今から心配に感じた者がちらほらいるようだった。

調子に乗ったロツクハートは、他の先生達をこのノリに巻き込もう

として『愛の妙薬』や『魅惑の呪文』について師事するよう生徒たちに呼びかけた。だが、話題に上げられた当の先生達は話に乗って来るどころか恥ずかしそうに顔を覆ったり、憎々しげな顔を浮かべただけだった。

ロックハートのセンスはいまいちだが、発想自体は悪くないと感じたモアだった。事件で暗くなった学校の雰囲気は何とか明るくしたいという考え自体はそう間違ってもいないだろう。大広間の飾りつけにしたって、壁の花をもっと柔らかい色合いに変えて、ここに更に天井から淡いピンクのリボンを下げたらとても可愛いのではないかとモアは空想した。

隣でトーストにいちごジャムを塗っていたラベンダーが言った。

「こういうイベントは毎年やれば良いのにね」

シエーマスはロックハートを眺めながら吐き気を催す真似をした。

「ロックハートが居る限り、毎年やるんじゃないか？ おえー」

浮かれ切った大広間の飾りつけはともかく、このキューピッドに扮した小人達というのが厄介だった。小人達はメッセージを届けるために授業に乱入したり、机によじ登ってステージ代わりにしたりと、やりたい放題だったのだ。

小人達の所為で嵐のような一日が過ぎ、グリフィンドールの二年生達が本日最後の授業である呪文学の教室に向かおうとしていた時、それは起こった。廊下の向こうから人波を押し退けてやってきた小人が、ハリーに向かって大声で叫んだのだ。

「オー、アリー・ポッター！ あなたに歌のメッセージがあります！」  
これを聞いて、廊下に居た誰もが興味津々といった様子で立ち止まった。モアも釣られて立ち止まった。

ハリーはなんとか小人から逃れようとしたが、小人が回り込む方が遙かに早かった。

「歌のメッセージです、アリー・ポッター！」

小人は小さな体を目一杯伸ばしてハリーの鞆をむんずと掴んだ。

「やめて、お願いだからやめて！」

ハリーが鞆を力一杯に引っ張り返した時、大きな音を立てて鞆が

真つ二つに裂けた。裂け目から零れた教科書や羊皮紙などが散乱し、その上に赤のインク壺が落下して割れた。辺りは荷物とインク塗れになり、廊下に行く生徒たちの大渋滞を引き起こした。

「何をしてるんだい」

通りがかりのドラコ・マルフォイがモアの肩越しに様子を覗き込んだ。

「この騒ぎは一体何事だ？」

パーシー・ウィーズリーもやってきた。

小人のキューピッドは渋滞に嵌まった大勢の生徒達を良いオーデイェンスとでも思ったのか、荷物をかき集めていたハリーを引き倒すと踝の上に乗っかり、問答無用でハープを掻き鳴らし始めた。

あなたの目は緑色、青い蛙のピクルスのよう

あなたの髪は真つ黒、黒板のよう

あなたが私の物なら良いのに。あなたは素敵

闇の帝王を打ち負かした、あなたは英雄

ロックハートが考えたのだろうか、このうすら寒い歌にはモアを含めた誰もが大笑だつた。モアの隣ではドラコも引き付けを起こしそうなほどに笑い声をあげていた。ハリーも皆と一緒に必死に笑っていたが、顔がやや引きつっていた。

歌が終わると、パーシーがその場を仕切るように両手を鳴らした。

「始業のベルならもう五分前に鳴ったんだぞ。さあ、行つた行つた」

パーシーに追いつかれた下級生の一部は、名残惜しそうに教室へと向かつて行つた。居合わせた上級生達も、あなたの目は緑色——を口ずさみながら各々の教室へと歩いて行つた。

ドラコはモアの横を抜けると、散乱した荷物の中から黒革の小さな手帳を拾い上げた。

「さて、ポッターはこれに一体何を書いたのかな」

「それを返すんだ、マルフォイ。君も授業があるだろう！」

パーシーが厳しい声で言った。ドラコはどこ吹く風と言つた様子

で、挑発するようにハリーの目の前で手帳を掲げた。

「ちよつと見るくらい良いだろう?」

手帳の表にはダイアリーと書いてある。ハリーの日記かと思いきや、書いてある年が五十年近く前だったことにモアは何となく引つかるものを覚えた。

モアが引つ掛かりの正体について思いを巡らせる間もなく、ハリーが杖を抜いて一言叫んだ。

「エクスペリアームズ、武器よ去れ!」

すると日記がドラコの手から離れ、綺麗な放物線を描いて飛んでいった。着地点に走り込んだロンが、見事にこれをキャッチした。

これにはパーシーはおかんむりだった。

「廊下での魔法の使用は禁止されている。これは報告しなくてはならないぞ、ハリー!」

ハリーは気にした様子もなく、ドラコを睨み付けた。ハリーにしてやられたドラコは怒り心頭で、近くで事の成り行きを見守っていたジニー・ウィーズリーにそれをぶつけた。

「ポッターは君のバレンタインが気に入らなかったみたいだぞ」

これに怒ったのはロンだった。ジニーは両手で顔を押えて教室に駆け込んでしまおうし、ロンは折れた杖を取り出して今にもドラコを攻撃しかねない調子だった。ハリーが押し止めなければこのまま呪文の一発でもかましていたことだろう。

授業も終わり、紙吹雪舞い散る大広間でのんびりと夕食を摂っていたモアは、すっかり油断していた。まさか大広間の扉をばつと押し開いて、例のキューピッドが自分の元に駆け込んでくるとは思ってもみなかったのだ。

小人はモアを目がけて一直線にやってくると、景気付けとばかりにハープの弦を弾いた。

「モア・クレイズ! あなたに、今日届ける最後のメッセージです!」

「えっ、私?」

周囲にいた人間は軒並みモアと小人に注目した。小人は食事が並

ぶテーブルの上によじ登った。皆の取り皿を蹴飛ばし、自分が立てるだけの場所を作ると、金色のハープを構え、じやらじやら掻き鳴らし始めた。

誰もが知ってるあの一族

でも本当の所はだーれも知らない

オー、クレイズ。今日も元気に呪文をミス

そんなあなたはミス・ミステリアス

散々メツセージを届けてネタ切れでもしたのだろうか。無理矢理韻を踏もうとして失敗したような詩だった。ハリーに届いた『あなたの瞳は緑色——』の方が笑えるという意味では遥かに傑作だった。

モアが曖昧に笑ってありがとうを告げると、小人が仰々しくお辞儀した拍子に背中の羽根をぶつけて、ネビルのオレンジジュースをひっくり返した。

モアは慌ててポケットから引っぱり出したハンカチでジュースを拭き——気が付いた。みるみる水分を吸収するが、これはハンカチではない。トムの記事の切れ端だ。

これに、近くに座っていたハリーが何故か目を付けた。

「モア、君の持つてるその紙って……」

「うるさいわねポッター！　ば、万能吸水ペーパーよ！　ダイアゴン横丁で買ったの！」

思わず言ってしまったが、言ってしまったからには拭くしかない。モアはトムに申し訳ないと思いながら、記事の切れ端でテーブルの上を綺麗にした。

この杜撰な扱いに、トムは初めて機嫌を損ねた。

『君があんなことをするなんて思ってもみませんでした』

「ごめんなさい、うっかりしていたのよ」

モアは素直に謝った。

「でもねえ、トム。私、気が付いたんだけど、この紙とっても便利なんですよ！　インクや飲み物をこぼした時に拭くのに使えば水滴も残さず

綺麗になるし」

『君は僕を何だと思っっているんですか?』

「大切な友達よ」

『その友達の扱いがちよつとぞんざい過ぎやしませんか?』

モアは慌てて釈明しようとした。

「そ、それとこれとは別だわ! あなたの正体は日記の紙そのものじゃなくて、日記に閉じ込めた記憶なんだから」

すると何か思いを巡らせたときのようになちよつとだけ間が開いて、また文字が浮かび上がった。

『……君のそういう所はドールンスと似ているかも知れませんね』

「そうなの!? 嬉しいわー!」

『喜んでいるところ悪いけれど全く褒めてないですよ。さっきも言いました、僕はちよつとだけ怒っています』

「ああ、ごめんなさいトム。もうしないから許してちょうだい!」

トムの不機嫌はちよつとと言いながらそれから三日続いた。ことある毎に台拭き代わりにしたことを持ち出して、モアを針のようになちよつと苛んだ。

## (15) 第四の事件

イースター休暇がやってきた。日も長くなり暖かい日が増えてきたが、モアはのんびり過ごすという訳にはいかなかった。三年生の選択科目を決めなければならなかったからだ。

来年もホグワーツに通わなければならないと思うと気持ちに影が射すモアだったが、トムにも相談して占い学、数占い学、古代ルーン文字学を選択することにした。

中庭の噴水に腰掛けながら申請用紙に記入をしていると、モアは渡り廊下を行く見覚えのある姿を見止めた。

「あら、エミールじゃない!」

モアは大声で呼びかけた。エミールは気付いたように片手を挙げると、大股でこちらに歩いてきた。

「中庭で日光浴かい?」

「いいえ、さつきまで選択科目についてちよつと悩んでたの」

モアはトムの日記の切れ端を鞆にしまいながら言った。エミールはモアの膝の上に置かれた用紙を覗き込んだ。

「へえ、モアは占い学を取ったんだ。数占い学もある。占いに興味があるの?」

「ちよつとだけね。それにこの間のクリスマスプレゼントに父さんから水晶玉が送られてきたのよ。ただ持っただけでも勿体ないでしょう」  
するとエミールは驚いたように声を上げた。

「きつと君のお父さんは占いが好きなんだろうな。そうでなきゃ水晶玉なんて送ってこないよ」

「さあ、どうかしら。どちらかと言えば占い学の時間を、水晶を鑑賞する時間か何かだと思っっているんじゃない?」

モアは皮肉げに笑って肩を竦めた。あの父親のことだ、本当にそう思っていたとしても不思議ではないとモアは思った。

「ねえ、あなたは何を選択したの?」

モアが問いかけると、エミールはモアの隣に腰掛けながら言った。「うちの家族は代々癒者なんだ。両親は聖マング魔法疾患傷害病院に

勤めてる。でも俺、本当は動物癒師になりたいんだ、魔法生物の病気を診る癒者に。だから来年は魔法生物飼育学と古代ルーン文字学を選択しようと思ってる」

「あなたたっでもう将来のことを考えてるのね、見習いたいけど見習えないわ」

「君には何かになりたいものはないの？」

エミールに問われたモアは考え込んでしまった。将来のことなんて考えたこともなかった。モアにとっては今を生きることとで精一杯で、その先どうしたいかなんてことに頭を巡らせる余裕はなかったのだ。

「うーん、出来ることならマグルの生活に戻りたいけど……」

エミールはモアの顔をじっと見詰めていたが、やがて我慢できなくなったように口を出した。

「この頃は暖かくなったことだし、君、今日みたいに陽に当たった方がいいよ」

「どうして？」

「肌が白すぎて顔色が悪く見える。少し焼いた方が良い」

モアはエミールのこの助言に懐疑的な様子で首を傾げた。

「ああ……この所よく言われるのよね、顔色が悪いって。そんなことないと思うんだけど」

「少し気にした方が良いと思うよ。何か大きな病気の前触れってこともあるかも知れないし」

「そうね、気を付けるわ。ありがとう」

ジャステイン・フィンチーフレッチリーが石にされて以来、秘密の部屋に関する事件の発生はすっかり遠退いていた。生徒達の中には事件が収束したとみる向きもあつたが、嵐の前の静けさにも感じられるし、未だに犯人の手がかりさえ見つからないことでも気味の悪さを残していた。

ロックハートは犯人が自分に見つかることを恐れて事件を起こさなくなつたと考えているらしく、方々でそんなことを言い触らしてい



た。

イースター休暇が明けると、また授業に課題にと忙しい日々がやってきた。モアは闇の魔術と防衛術の授業でハリーがロックハートの相手役をさせられているのを眺めながら、頬杖をついてぼんやりと事件について考えた。

これまで襲われたのは猫が一匹に、生徒が二人、ゴーストが一体。当初のモアの思い込みとは違って、別に猫だけが狙われるという訳ではないようだ。

いずれの被害者も石にされただけで、命に別状はないという。犯人は一体何がしたいのだろう。マグル生まれの生徒達はすっかり怯え切っているが、石にされてもマンドレイク薬で治るのならそれほど脅威には感じられない。学校閉鎖でも狙っているのだろうか。

それよりも秘密の部屋に関して、何か重要なことを忘れている気がする。けれど、それが何だったのかモアはまるで思い出せないのだった。

授業を終えたモアがグリフィンホール寮に戻ろうと廊下の角を曲がった時、出会い頭に誰かとぶつかりそうになった。

「君、前を向いて歩けよ」

「ごめんなさい、ちよつと考え事をしていて」

顔を上げると、そこに居たのはドラコだった。次の授業に移動するところだったのか、後ろにはいつもの二人を従えていた。

「なあ、君。ポッターがDADAの授業の度にロックハート直々の演技指導を受けているって噂を聞いたんだけど、本当かい？」

真偽を確かめる良い機会とでも思ったのだろう。ドラコは悪意の入り混じった興味を押し隠しもせず尋ねた。モアは正直に答えた。「本当よ。いつも本の一場面を再現するんだけど、相手役はいつもハリーなの。二人の滑稽な演技は退屈な授業の中で唯一笑える場面かも知れないわね」

するとドラコはおどけた口調になって言った。

「何と言ってもポッターはロックハートのお気に入りだからね。バレンタインの熱烈な歌のメッセージを聞いただろう？ あなたが私の

物なら良いのに——」

ドラコがキューピッドに扮した小人そっくりに歌い上げたので、モアは思わず嘖き出してしまった。ドラコの後ろでグラップとゴイルものっそりと笑った。

これを見たドラコは得意になって言った。

「ポッターの奴、そのうちロックハートに弟子入りして本でも出すんじゃないか？」

閃いたモアは指を鳴らした。

「ならタイトルは、そうね、アリー・ポッターと小人の歌が良いわ」

「はははっ、そりゃ最高だ！ 君、思ったより中々センスがあるじゃないか」

ドラコが気に入ったとばかりにモアの肩をばしばし叩いた。モアもちよつと得意になって、また新たな思い付きを口にした。

「あら、お褒めに与り光栄だわ。ちなみに物語の冒頭ではハープを持った大量の小人がアリーの家に押し掛けるはずよ」

「オウ、そこで奴らが勿論歌い出すんだろう？ あなたの髪は真っ黒——」

「そうそう、それよそれ！ あなたの目は蛙のピクルスのよう——」

四人で一頻り笑って、モアはふと思いついた。

「でも案外、ポッターのことは誰かがもう本にしようとしているかも知れないわね。ハリー・ポッターと秘密の部屋、だなんて尤もらしいタイトルを付けちゃったりして」

モアが冗談交じりに言うと、ドラコは忽ち機嫌を悪くした。

「君も秘密の部屋を開けたのがポッターだなんて言うのか。あんな奴がスリザリンの継承者に選ばれるなんて有り得ない——断固有り得ない！」

「ちよ、ちよつと、一体どうしちゃったのよ」

「前言撤回する。君のセンスは最低最悪だ！ 魔法センスも最悪なスクイブはそうやってポッティ坊やに怯えてるが良いさ、精々真の継承者に殺されないよう気を付けることだな！」

そう言い残すと、ドラコはモアの脇を抜けてずんずんと歩いて行っ

てしまった。その後ろを慌てた様子でグラップとゴイルが小走りに着いていった。

「ドラコったらいきなり不機嫌になったりして……何なのかしら」

男の子って分からないわ、と思いながら、モアもグリフィンドール寮に向けて急ぎ足で廊下を行くのだった。

それからしばらくは平穏な日々が続いた。誰かが襲われることも、石にされることもない。日々の変化と言えば授業の内容と食事のメニューくらいのもので、モアは穏やかだが少し退屈な日々を送っていた。

何か事件が起こってほしい訳ではないが、刺激が欲しいのも確かだった。

そんな時、モアの欲求を満たす最適なイベントがやってきた。クイデイツチだ。

土曜日の朝は爽やかな青空が広がる晴れ模様で、申し分ないクイデイツチ日和だった。大広間で朝食を摂っていたモアは、ウッドが選手達を激励しているのを聞いた。

「さあ、朝食をちゃんと食っておけよ。試合中に腹が減ったら大変だからな」

グリフィンドールの選手達はウッドに盛られた山のようなスクランブルエッグを平らげながら、試合に向けて士気を高めているようだった。

試合開始の十一時が近付くと、皆は大広間から流れるようにクイデイツチ競技場に移動した。

クイデイツチ杯の二戦目となるグリフィンドール対ハツフルパフの試合を控え、競技場は緊張と興奮に包まれていた。ロックハートのバレンタインはその役目を果たせなかつたが、皆、事件で鬱屈とした空気を吹き飛ばす何かを待ち侘びていたのだろう。今日の観客席は試合前から殊更に盛り上がっていた。モアもスタンドに座りながら、試合開始を今か今かと待っていた。

やがて選手達が割れんばかりの拍手の中入場し、競技場を飛び回っ

てウォーミングアップを始めた。ハツフルパフの選手たちは円陣を組んで最後の作戦会議に臨んだ。主審を務めるマダム・フーチは専用のケースからボールを取り出す準備を始めた。

モア達が試合開始を今か今かと待っている、マクゴナガル先生がグラウンドにきびきびした急ぎ足でやってきてメガフォンを構えた。誰もが固唾を呑んで試合開始の号令を待っていたが、先生の口から発せられたのは正反対の言葉だった。

「この試合は中止です！ 全生徒は急いで寮の談話室に戻りなさい、各寮監から詳しい話があります」

これを聞いた生徒達が一齐にブーイングの嵐を巻き起こしたが、そんなことをしている場合ではないとモアは感じ取った。またしても事件が起こったということは間違いなかった。

その日、グリフィンホール寮にハーマイオニーは戻ってこなかった。他にもない、襲われたのはハーマイオニーだったのだ。一緒にレイブンクローの女子生徒も石にされたとかで、二人は例に漏れず医務室に運ばれて横たわっているとのことだった。

すし詰め状態の談話室にやってきたマクゴナガル先生は、通達の書かれた巻紙を広げて今回の事件について説明すると、午後六時以降の外出を禁止すると言った。更に、今後は授業に行くにもトイレに行くにも引率の先生を一人付ける厳戒態勢を取ることを表明した。それから一切のクラブ活動や補習授業も暫く中止にすると告げた。

生徒達は黙って先生の言葉に耳を傾けていたが、先生が居なくなる途端にざわざわと喋り始めた。

ソファの上で立ち上がった三年生のリー・ジョーダンが、疑うべきはスリザリンだ、という演説を始めたのを尻目にモアは女子寮に戻った。

こんなことになるなら、突き放したりせすにもっとハーマイオニーに優しくしてあげれば良かった。後悔が波のように押し寄せ、モアを苦しめた。空っぽのベッドを眺めながらモアが心境を日記の切れ端に書き綴ると、意外なことにトムはハーマイオニー達に厳しい態度を

取った。

『君は優しすぎますよ。スリザリンの怪物に襲われたからといって、彼女達のやったことが消える訳じゃないんですから。今回のことは天罰だとも思えば良いのでは？』

「でも……」

『マンドレイク薬が出来ればすぐに元気になるのでしょうか。そんなに深刻になることはないと思いますよ』

モアはトムが何とかモアを励まそうとしてくれているのだと感じた。トムの優しさが身に染みて、モアはありがとうを書き込んだ。

次の日の朝、生徒達の間には衝撃が走った。秘密の部屋にまつわる事件が四件も続いた結果、あのダンブルドアが理事会の命令で停職になったのだ。これまで学校を庇護してきたダンブルドアの不在は、忽ち生徒達に不安を呼び起こした。ダンブルドアが居なくなった今や、マグル生まれが次々に襲われ始めてもおおかしくないと見る向きもあった。

ダンブルドアは不思議な包容力のある老人だったが、これほどまでに影響力が大きいとは思ってもみなかったモアだった。モアは退学届を出しに行った時の、優しくして深い眼差しを思い返した。生徒達を見守るあの眼差しがなくなるという事実は、確かにモアにも心許なさを感じさせた。

ダンブルドア停職と同時に、学校内ではもう一つのニュースが広まっていた。ハグリッドが魔法省に連行されたのだ。なんでも五十年前に秘密の部屋を開いた犯人がハグリッドだという話で、彼はアズカバンと呼ばれる恐ろしい監獄に収容されるらしい。

もしハグリッドが犯人なら、三階の廊下の壁にメッセージを残したのもハグリッドということになる。そして、ハーマイオニーを襲ったのも。モアにはあの毛むくじやらのハグリッドがそんなことをするとは思えなかった。

確かに図体も大きいし、靴もコートもぼろぼろでぱつと見は不審に見えるが、それ以上に気の良い人物だということをもアは知ってい

た。だから、今度のことは何かの間違いだと信じていた。

悶々としながら午前中の授業をやり過ぎていたモアは、変身術の授業の最中、忘れていたことが何だったのかを唐突に思い出した。トムだ。確かトムが、五十年前にも秘密の部屋が開かれたことがあると言っていたのだ。

昼休みを迎えたモアは、誰も居ない女子寮に引っ込むと、トムの日記の切れ端に急いで書き込んだ。

「ねえ、トム。あなた、前に五十年前にも秘密の部屋が開かれたことがあるって言ってたわよね？」

『どうしたのですか、モア』

「何か知っていることがあるのなら話してほしいの。真犯人に繋がる手掛かりになるかも知れないわ」

すると、トムはちよつとだけ時間を置いて、躊躇うように文字を浮かび上がらせた。

『僕の知っていることは多くありません。可哀想な女子生徒が一人亡くなったこと、ルビウス・ハグリッドが秘密の部屋を開けた犯人として退学処分になったこと、精々その程度です』

「嘘よ！・初めて話した時のあなた、何か知ってる風だったわ」

『君は今回の事件のことで気を張りすぎです。友達が襲われたからって犯人捜しだなんて危険なこととは止めて、勉強に励むべきですよ』

「ねえ、お願いトム。このままじゃハグリッドが犯人になっちゃうわ」  
けれどもトムはそれ以上のことを話してはくれなかった。本当に知らないのかも知れないが、何か情報を伏せているという可能性も捨て切れなかった。もし情報を伏せているのだとしたら、きっとモアが危険なことに首を突っ込むのを止めさせるために違いはない。この時ばかりは、トムのモアを案ずる気持ちかもどかしく感じられた。

## (16) 秘密の部屋

この頃のモアは勉強に明け暮れていた。というのも、試験があるということがつい三日ほど前に発表されたからだ。

事件続きのこの状況下でもテストがあるというのには驚きだが、あるというのなら仕方がない。杖を使って行う実技テストは捨てざるを得ないにしても、その分を筆記テストでカバーしないといけないことが分かっていたから、モアはこれに対して真剣に取り組んでいた。

本当は、テストが落第ならそれを口実に前の学校に戻ることが出来るのではないかとも思ったのだが、モアからテストがあると聞いたトムが真面目に勉強を教えてくれるのでこの案は没になった。

トムは実に良い教師で、授業におけるモアの疑問を解消してくれるだけではなく、苦手分野に絞った想定問題まで出してくれた。お陰でモアは、みるみると弱点を補強することが出来、ホグワーツの首席が伊達でないことを存分に思い知らされたのだった。

五月も四週目を迎えて、秘密の部屋事件は収束に向かっていた。というのも、ついにマンドレイクが収穫できるようになったからだ。た。

マンドレイクをとろ火で煮込んで薬にすれば、今夜にでも石にされた被害者達を蘇生させることが出来るという話だった。目覚めた被害者達から事件解決に繋がる何らかの証言を得られるのではないか、というのがマクゴナガル先生の見込みだった。

その日、闇の魔術に対する防衛術の授業が終わると、ロックハートはモア達を次の魔法史の教室まで引率しながらずっとハグリッドの悪口を言っていた。ロックハートが言う、目覚めた被害者が犯人としてハグリッドを名指しするはずだの、あいつがやると思っていただのを聞きながら、モアは胃がむかむかするのを感じていた。

「ハグリッドは捕まったのですよ。全く、マクゴナガル先生がまだこんな警戒措置が必要だと考えていらっしやるのには驚きますね」

「その通りです、先生」

唐突にハリーがロックハートに同調したので、近くで聞いていたモ

アは眉をしかめた。

ハリーはハグリッドと仲が良かったはずなのに、ハグリッドを信じていないのだろうか。もしハグリッドを信じているのなら、犯人は別に居るといふ説を支持することになるはずだから、ロックハートの樂觀には同調できないはずだ。なぜロックハートに言わせたままにさせておくのか、モアにはまるで理解できなかった。

「私達先生というものは、色々やらねばならないことがありますね。生徒達を次のクラスに送ったり、一晩中見張りに立ったりしなくても手一杯ですよ」

ロックハートが愚痴のように言うと、何故かロンまで同調し始めた。

「その通りです。先生、引率はこちらまでにしてはいかがですか。僕達、後は廊下を一つ渡るだけなんですから」

「そうですね。では、そうすることにしましょう」

ロンの提案に乗ったロックハートは深く頷くと、次の授業の準備があるなどと言いながらグイフインドール生徒達を廊下に残して足早に去っていった。

ロックハートの無責任振りには驚かされたモアだが、それよりも今は他に気になることがあった。ハリー達だ。モアは、ハリー達の不審な動きを見たのだった。

ハリーとロンの二人は徐々に歩く速度を落としかかと思うと、魔法史の教室に向かう生徒達の一番後ろまで下がった。やがてじわじわと列から離れると、どういう訳か、廊下を脇の通路へと一目散に走り始めたのだ。

モアは二人のこの逃走劇を見逃さなかった。

この非常時に、また何か良からぬことを企んでいるのではないか。そう思ったモアの行動は速かった。靴紐を結び直す素振りでも床に屈み込み、他の生徒達を先に行かせてから、ハリー達同様に列を離れたのだ。

ハリーとロンは、上の階へと続く細い階段を上っていった。前の授業の教室にでも戻るつもりなのだろうか。例えば教室に忘れ物をし



たとか——それなら素直に申告すれば良い。それともやつぱりハグリッドへの悪口を根に持つていて、先に戻ったロックハートに何か仕掛けるつもりとか——それにしても隠れる様子もない堂々とした進み方だ。

ハリー達の企みについて考えながら三階の廊下に差し掛かった時、モアは自分達を見咎める厳しい声を聞いた。

「あなた達、そこで何をしているのです！」

一瞬、自分が見つかつたのかと思つて身を竦めたモアだが、杞憂だつた。マクゴナガル先生がハリー達を見付けたのだ。モアは丁度曲がり角の向こうに居たので、マクゴナガル先生からは死角だつた。

モアは様子を窺おうと曲がり角からそつと顔を出した。

「僕達——あの、僕達、様子を見に——」

ロンがもごもごと口籠もつたが、すぐさまハリーが引き継いだ。

「——ハーマイオニーの様子を見に」

ロンがびつくりしたようにハリーを見詰めた。

「つまり、僕達、こつそりハーマイオニーのお見舞いに行こうと思つてたんです。その、もうすぐマンドレイク薬が出来るから安心して良いよつて」

ハリーは何とか言い逃れしようとしたようだが、これは実に苦しい言い訳だつた。本当に医務室に向かいたいのなら、三階の廊下をうろつく必要性がないからだ。

けれど、マクゴナガル先生は気付いた様子もなく声を震わせた。

「ええ、そうでしょうとも。事件のことで一番辛い思いをしているのは友達です」

モアの位置からはよく見えなかつたが、もしかしたらマクゴナガル先生は泣いているのかも知れない。取り出したハンカチで目元を押える姿は、ハリーのほら話に感動した一人の女性そのものだつた。

マクゴナガル先生は咳払いをして声を整えると、気丈な様子で言つた。

「良いでしょう、面会を認めます。ビンズ先生には私から授業に欠席する旨を伝えておきます。マダム・ポンフリーには私から許可が出た

と言いなさい」

ハリーとロンはマクゴナガル先生に連れられて階段を下って行った。結局ハリー達が何を企んでいたのかは分からず終いだっただが、マクゴナガル先生が見ているのだ、そう悪いことは出来ないだろう。モアはほっと息を吐いて曲がり角から出た。

三階の廊下は人気がなく、静かだった。始業のベルが随分前になっていたことから、もう授業は始まっているのだろう。授業に参加する生徒達の声が遠くに聞こえた。モアはこれから遅刻して授業に参加することを考えたが、遅刻の言い訳を考えるのが億劫に感じられた。

どうしたものか迷いながら廊下をぶらぶら歩いていると、向こうから見慣れた赤毛のお下げが歩いてくるのが見えた。

「何をしているのジニーー！ 一人で出歩いちゃ駄目なこと知ってるでしょう」

ジニーはモアを見るなり、とびきり嬉しそうな顔を浮かべて歩み寄ってきた。

「それは君もだよ、モア。君みたいなスクイブもどきが一人でこんな所をうろついているなんて、スリザリンの継承者に狙われても文句言えないんじゃないのかな」

「私は訳あってハリー達を追跡していたところなのよ……居なくなっちゃったけど。で、これから退屈な魔法史の授業を受けに行くところ」

今日はいつにも増して青白い顔をしていたジニーだが、この笑顔を見るにそれほど調子は悪くないようだった。寧ろ、顔色に反して態度が普通過ぎて心配になるくらいだった。

モアがジニーの様子を観察していると、ジニーは飛び切りの思い付きをしたかのように手を打ち合わせた。

「なら、このまま退屈な授業と一緒にサボタージュするっていうのはどうか」

「サボタージュ？ あなたと？」

「前に、話があったら何でも言つてとジニーに言ったんだらう？ 丁度良い機会だ、是非親睦を深めようじゃないか」

ジニーは運良く出会えた話し相手を逃がさないとしても言うようにモアの腕を取った。

確かにジニーと仲良くなりたい気持ちはあった。だが、それ以上に何となく、このままジニーを一人にしておいてはいけないような気がして、モアは腕を握り返した。

「良いわ、一緒にお喋りしましょう」

モアが頷くと、ジニーは喜色満面になった。ジニーは早く行こうとでも言うようにモアの腕を引いた。

「誰にも邪魔されず、二人つきりで話せる良い場所があるんだ。案内するよ」

ジニーは何処へ行くのかと思いきや、近くにあった女子トイレに入った。このトイレは変なトイレだった。床は水浸しで、誰かのしくしく泣く声が延々と響き渡っている。不穏なものを感じたモアは、ジニーの肩口を掴んで引き留めようとした。

「ねえ、ここ、何か居るんじゃないかしら」

「気にすることないよ。嘆きのマートルっていうしみつたれたゴーストが居座っているだけだから」

ゴーストと聞いたモアが体を強張らせていると、個室の一つからヒステリックな喚き声が聞こえた。

「何よ、あなた達！ 私のことを笑いに来たの!？」

「違うよマートル。僕たちは君みたいなのに興味なんてない」

ジニーが冷たく言い放つと、泣き声は一層激しく喚き出した。

泣き声を見殺したジニーは、洗面台に取り付けられた銅製の蛇口の一つに向かい合うと、歯の間から空気を漏らすようにシューシュー言い始めた。

「何をやってるの?」

「秘密の部屋のぐ開帳さ」

「秘密の部屋って……えっ、冗談でしょう?」

モアが驚いている間にも蛇口が白い光を放ちながらくるくると回り始めた。洗面台が沈み込んだかと思うと、洗面台のあった場所にモ

アの座高より一回りくらいはありそうな大きな配管が現れた。配管の先端、洞のようにぽっかり空いた穴がこちらを向いている。

「冗談かどうかはその目で確かめてみればいい、そうだろうか？」

何だか物凄い仕掛けを見てしまった気がして、モアは目をぱちくりさせた。現れたトイレの配管を覗き込んでいたモアは、ジニーがパイプの縁に足を掛け始めたのを見て、慌てて再びその肩を掴んだ。

「ねえ、ジニー……ここを進まなきゃ駄目？ 何だかローブがとつても汚れそうな気がするんだけど」

「それくらいなら後で呪文で綺麗にしてあげるよ。さあ、おいで」

今日のジニーはいつもより積極的だった。ジニーはモアより先にパイプに入ると、そのまま滑り降りるようにして姿が見えなくなつた。

モアは致し方なくパイプに近付き、パイプの縁を握り締めた。触つたところが何処となく湿っている。思わずローブで手を拭い、それから恐る恐るパイプの穴によじ登った。

パイプの先は下り坂になっているみたいだった。真つ暗で分からないが、よもや直滑降はしないでだろう。モアは勇気を振り絞ると勢いをつけ、ジニー同様に滑り降り始めた。

滑り落ちながら、配管の繋ぎ目でお尻が弾んだり、よく分からない粘性のある液体に触れたりと居心地の悪い時間が続いた。配管には幾つか分岐している箇所があったが、モアは一番太いパイプの中を滑り降り続けた。このパイプはかなり深くまで伸びているみたいだった。

あまりにも長い下り坂なので、いつまで経っても地面に辿り着けないのではないかとモアが不安になり始めた頃、傾斜が緩やかになり、モアは出口に辿り着いた。

配管から這い出ると、ジニーがルーモスを点して待っていた。深さ的に考えて、ここはホグワーツの地下に当たるとはだろうか。杖先に灯る小さな光の向こうには石のトンネルが続いていた。

ローブもスカートもべとべとで気持ちが悪い。モアは期待の籠つた眼差しでジニーを見詰めたが、ジニーは魔法で綺麗にしてくれると

いう約束をすっかり忘れた様子で先を歩き始めた。モアは唯一の灯りを見失うまいと慌ててジニーの後に続いた。

トンネルはカーブしており、あちこちに小動物の骨と思しき破片が沢山散らばっていた。モアはこれを何度か踏み付けたようで乾いたパリンという音が何度も聞こえたが、考えると怖くなりそうだったので聞かなかったことにした。

五十メートルほど歩くと、カーブの向こうに何かが見えた。何か大きな物が横たわっている。モアが怖々近付くと、ルーモスの光を受けるざらざらとした表面が見えた。

「怯えなくても良い。ただの蛇の抜け殻だよ」

ジニーが言った。だが長さ六、七メートルはありそうな大きさで、とてもただの蛇の抜け殻には思えない。世の中にこんな大きな蛇が居るだなんて今日まで考えたこともなかったが、これに全く怖じ気付かないジニーをモアは頼もしく思った。

それからしばらくはまだトンネルが続いた。このトンネルは地を這う蛇のようにぐねぐねと蛇行していて、何度も角を曲がった所為で、自分がどの方角からやってきたのかモアは分からなくなり始めていた。

やがて、二人は行き止まりのような場所に辿り着いた。平らな壁の中心に、下から上へと絡み合う一對の蛇のレリーフが彫られている。蛇の目に当たる部分には緑色に輝く大粒の宝石が埋め込まれていて、モアは自分の父親ならこれを喜んで鑑定するだろうと思った。

ジニーは慈しむような手付きでレリーフに触れると、トイレの蛇口にそうしたようにまたシューシュー言い始めた。

『開け』

ジニーが何を言ったのかは分からなかったが、ジニーの命令で何か起きようとしていたのは間違いなかった。絡み合う二匹の蛇が生きているかのように解けると、真ん中で二つに割れた壁が左右にスライドしながら見えなくなった。ジニーのシューシューはさながら「開け、ゴマ」のようだった。

「おいで」

ジニーはルーモスの明かりを消すと、モアの手を取って今しがた開いたばかりの扉を潜った。

その不思議な部屋は奥に向かって伸びていた。光源もないのに薄明かりが射しており、頭上を見上げると天井は遙か遠い暗がりには隠れていた。蛇を模った彫刻の柱が左右に幾つも並んでいる。こんな場所が学校のトイレの先に隠されているだなんて、モアは思ってもみなかった。

「ここ、本当に秘密の部屋なの？」

「そうだよ。美しいだろう、サラザール・スリザリンの残した遺構は」  
ジニーは腕を伸ばすと、柱にあしらわれた蛇の彫刻をそつと撫でた。小さな鱗まで彫り込まれた彫刻は手が込んでいて、格調の高さを感じさせた。

「ここが本当に秘密の部屋だってことは分かったわ。でも、ねえ。まさか、ジニーがスリザリンの継承者だっただなんて言わないでしょう？」

「その質問の答えはノーだ。愚かなジニーは操られていただけさ——  
そう、僕にね」

その言葉を聞いた瞬間、得体の知れない恐怖が沸き起こり、モアはジニーに握り締められていた手を振り解こうとした。しかし、がつつちりと握り締められた手は、解けるどころかますます強くモアを掴んできた。

モアは恐怖に駆られながら叫んだ。

「あなた、ジニーじゃないわ……あなたは、誰!？」

「今頃気付いても遅いよ、モア。君がもう少し利口だったら、こんな所へ来なくても良かったのにね」

モアに振り返ったジニーはうつそりと笑った。

(17) 秘密の部屋②

ジニーの姿を騙る誰かは、モアの手を引くと秘密の部屋の奥へと歩き始めた。利き手にはジニーの杖を握り締めていて、モアはいつどんな呪文を使われるか分からないと気が気でなかった。

「モア・クレイズ、初めて君の存在を知った時から君には興味があった。あのドーレンスの孫と言うからには、さぞかし面白い能力の持ち主なんだろうと思ってるね」

「ドーレンスですって?」

モアの知る限り、モアのおじいちゃんのことを知っているのは一人しかない。モアは恐る恐る声を掛けた。

「ねえ、あなた、もしかしてトムなの?」

「そうだよ。君の親愛なる友人、トムだよ」

「どういうこと、どうやってジニーに乗り移ったの!?!」

秘密の部屋の一番奥まで辿り着くと、ジニー——いや、トムはようやくモアの手を離れた。部屋の奥には人の姿を模った巨大な石像がそびえていた。ダンブルドアよりも遥かに長いあごひげを持ち、ローブを纏った姿の石像は、おそらく誰か高名な魔法使いの姿を残したものだだろう。モアは、それが秘密の部屋を作ったというサラザール・スリザリンのものではないかと思った。

「ジニーはこの一年、目に見えない友人と楽しいお喋りを続けてきたのさ。他愛ない悩みや心配事を僕の日記帳に書き綴り、僕はそれを受け容れ続けた……」

トムは杖を指先でくるくると弄び始めた。

「僕は、ジニーの恐れや不安を糧に大きくなった。僕はジニーに自分の魂を少しずつ注ぎ始めた。やがてジニーは自分でも自覚のないままにスクイブの飼い猫やマグル生まれの生徒達を襲い始めた」

「秘密の部屋を開けたのはジニーだって言うの!?!」

「そうだよ。尤も、スリザリンの継承者は僕だけだね。学生時代に成し遂げられなかったことを五十年越しに成し遂げようとしたわけだ」

段々とトムを持つ底知れない恐ろしさのようなものが身に染みてきて、モアは腕を抱えた。トムの記事の切れ端に色々と書き込んでいたのはモアも同じだ。もしかしたらジニーと自分は紙一重のところにいるのかも知れない。そう考えたモアは胃がきゅつとなるのを感じた。

「ねえ、あなた、私のおじいちゃんとは本当に仲が良いのよね？」

「勿論。寮は違えど、彼は僕の忠実な後輩だ。僕がこの日記を残した時、可愛い彼は丁度三年生だった。気性は穏やかで、どんな人の心も開かせてしまうような不思議な少年だったよ」

そこで言葉を区切ると、トムは面白いことでも思い出したかのよう  
に笑い声を上げた。

「ああ、そう言えば学生時代にハグリッドの飼っていたアクロマン  
チユラ——化け物蜘蛛について知らせてくれたのはドーレンスだっ  
たね。そのお陰で、僕はハグリッドに濡れ衣を着せて安全に隠れるこ  
とが出来た」

「わ、私のおじいちゃんがハグリッドを嵌めたってこと!？」

「嵌めただなんて人間が悪い。同級生が怪物を育てるだなんていう  
いけない遊びに嵌まっているのを知って、善意の気持ちから仲の良い  
監督生に報告してくれただけさ。彼は善良なハツフルパフ生だから  
ね。尤も、それを知った僕がどうするかくらい、彼は理解していたは  
ずだけど」

つまり結局は嵌めたということじゃないか！ モアはおじいちゃ  
んに対する大きな失望を感じた。

卵料理が好きで、変身術が苦手な、笑うと可愛いえくぼが出るお  
じいちゃんは、結局のところトムがハグリッドに罪を着せるきつかけ  
を作ったのだ。モアは牢獄で辛い日々を過ごしているだろうハグ  
リッドに対して申し訳ない思いを感じた。

トムは唇を噛み締めるモアを涼しい目で眺めながら、モアの周りを  
闊歩し始めた。

「この一年、僕の関心の半分は君に在った。魔法界に名高いクレイズ  
の生まれだ。どんな能力を隠しているのかと期待していたが、君と



いったらこの一年、碌な魔法を使えやしないで、やることと言ったら杖を使わないお勉強ばかり」

「仕方がないじゃない！　だって私、魔女じゃないんだもの！」

「本気でそう思っているなら君は相当な幸せ者だ。素養のない者にホグワーツの学びの扉は開かれななんだよ、モア。君がこの学校に来た時点で、君は確実に魔術の素養を持ち合わせているということが証明されているんだ」

「嘘よ、何にだって間違いはあるはずだわ！」

トムは立ち止まってくつくつと笑い声を上げると、弄んでいたジニーの杖を構え、杖先をモアに向けた。

「モア、君の力を僕が目覚めさせてあげよう」

「何を言ってるのよ！　だから、力なんてあるわけじゃない」

「君のおじいさんには空き時間を使ってよく魔法のコーチをしてあげていたんだ。心配せずとも指導力はお墨付きだと思うけどね——  
デイフィンド、裂けよ！」

目も眩むような光線がモアの脇腹を掠めた。モアが脇腹を見ると、ローブがぱっくりと裂けて制服のベストが覗いていた。

「ちよつと待って、止めて、トム！」

「モア、僕に対抗してごらん。呪文を唱えるんだ。杖の使い方は分かるだろう」

「無理言わないで、私に魔法が使えないことを知っているでしょう!」  
しかしトムは、モアの訴えなど聞こえない様子で再び杖を振るった。

「レダクト、粉々！」

モアの近くにあった柱が砕け、大きな碎石がばらばらと降り注いできた。モアは必死に頭を庇いながら柱の下から逃れた。

「インセンディオ、燃えよ！」

炎がモアの左肩に灯った。あまりの熱さに、モアは慌ててローブを脱ぎ捨てた。すると炎は途端に広がって、地に落ちたローブはちりちりと燃え縮んでいった。もう少し脱ぐのが遅ければモアが丸焦げになっただろう。

何故トムはこんな意地悪をするのだろうか。モアは涙が滲むのを感じた。

「トム、お願いだからもうやめて！ 私達、友達でしよう!？」

「君の友達を演じるのは退屈凌ぎにしては中々面白かったよ、モア。素直なのは君の一番の取り柄だけど、もう少し疑うことを覚えた方が良いね」

「私、あなたのこと本当に——本当に慕ってたのに!」

「だからこそさ。これは君のためなんだよ、モア。こういうのは昔から伝統的な方法があつてね。命が懸かれれば否が応でも目覚めざるを得ないだろう。さあ、モア！ もっと必死になるんだ、君の力を僕に示してくれ!」

そう叫ぶなり、トムは立て続けに呪文の光線を飛ばし始めた。モアは必死になって逃げ続けた。トムの呪文は何度もモアの体を掠めたが、うまくコントロールされているのか、どれも致命的な傷を与えるには至らなかった。

こんな状況で魔法なんて使えるとは思えないし、もし使えたとしてもこんな時にどうやって戦えばいいのかなんてまるで分からなかった。

何より、トムはジニーの体に取り憑いているのだ。下手にやり返せば、それはジニーを傷つけることになる。どうしたらジニーを助けられるのか分からず、モアの頭はパニックになった。

「お願い、止めてトム、お願いよ……!」

逃げ惑いながらただ懇願することしか出来ず、モアは自分の無力さに打ちひしがれた。

こんなことなら駄目元で決闘クラブに参加しておけば良かった。こんなことになるのなら、トムと仲良くならなければ良かった。今更どうしようもないことだが、モアの胸の中は後悔で一杯になった。

トムはジニーの姿で笑い声を上げながら、何度も何度もモアに杖を向けた。モアの知らない呪文が幾つも飛び交い、さながら呪文の見本市のような有り様だった。

「見様見真似で良い。まずは杖を構えるんだ、モア」

「無理よ！ 出来ないわ!」

「無理と決めてかかるから出来るものも出来ないんだよ、違うかい」  
「だって私、魔女じゃないのに——！」

呪文の光線を交わしながら何分駆けずり回っただろう。過呼吸になりそうなほどの息切れの後、段々重くなってきた身体を引き摺っているトムが仰々しい溜め息を吐いた。

「少し休憩を入れようか」

その言葉を合図に、雨のような呪文の攻勢が止んだ。モアは床に崩れ落ちると、そのまま大の字になった。酸欠で肺が悲鳴を上げている。体中が小さな切り傷や打ち身だらけでじくじくと痛んだ。

トムは天井を仰いで寝転ぶモアの傍までやってくると、隣に膝を突いた。ジニーの姿で微笑むトムは悪魔のようだった。

「モア、駄目じゃないか。まずは杖を構えないと」

モアはたっぷり時間をかけて呼吸を整えると、絞り出すように声を出した。

「……お生憎様だけど、杖を構えても魔法なんて使えないわよ。あなたにも話したと思うけど、杖振り練習ならそれこそハーマイオニーと何百回も何千回もやったんだから。それでも魔法が使えないってことは、私が魔女じゃないってことの証拠に違いないわ」

「モア、残念だけど、それって前提条件が間違ってるよ。魔女じゃないから魔法が使えないんじゃない、使いたくないから使えないんだ」

トムは哀れなものを見る目でモアを見詰めた。

「魔法の発動には心の状態が強く影響するんだ。魔法薬を作る時点で、君はスクイブなどではなく立派な魔女だ。なのに君は自分が魔女じゃないと思いついてる。まずはその思い込みを解かないといけない」

モアにとっては耳の痛い話だった。この一年、魔法薬は問題なく作れるという都合の悪い事実から目を背け、杖を使えないことだけを理由に魔女ではないと主張してきたのだから。

でも、モアは本当に自分に魔法が使えるだなんて思えないのだ。それにモアは何故こんなに魔法が使いたくないのか、自分でもよく分からないのだった。

「本当は分かっているんだろう。君は魔女だ」

「違うわ」

「魔女だという自覚を持つんだ」

「違うつたら違うの！」

「どうしてそんなに認めがらないんだい。前の学校に戻りたいから？  
違うだろう。君はもう戻れないということをやんと分かっているはずだ」

「理由なんてなんでも良いわ！ 前の学校も関係ない！ とにかく魔法なんて馬鹿げたものは使っちゃ駄目なのよ！」

これを聞いたトムは、何か興味深いものを引き当てたかのようにモアを覗き込んだ。

「どうして？」

「それは……分からないけど、とにかく駄目なのよ！」

モアが拗ねた子供のように言うと、トムはこれ以上ないくらいほど面白そうに口の端を歪めた。

「ああ、そうか。君は自分が『クレイズの血を引いている』ということをやんと分かっているんだね」

トムは納得した様子で頷いた。

「何を言っているの」

「でもそれは悪あがきという物だよ、モア。いずれ君は目覚める。それが早いか遅いかの違いでしかないんだ」

「だから、何を言っているのかさっぱり分からないわ！」

モアは思わず起き上がって子犬のように吠えた。何処吹く風のトムは、杖の先でモアの乱れた髪を掻き上げた。

「やっぱり君は、ここできちんと目覚めておくべきだ。僕の手によってね」

杖の先をモアの髪に何度も通しながら、トムは薄い笑みを浮かべた。

「さあ、休憩はお終いだ。楽しい鬼ごっこの再開だよ」

それからのモアは何時間走らされたか分からない。こんなに走ら

されたのは前の学校で開かれたハーフマラソン大会の時以来だったが、トムは容赦ない攻撃をかわさなければならぬ分こちらの方が遙かにハードだった。

始めは掠めるだけだった呪文も段々と命中するようになってきて、二の腕が裂けたり、太腿を撃ち抜かれたりして、モアは次第に身動きをするのすら辛くなってきた。

トムは時折追い立てるような言葉を言ったが、返事をする必要も出来ずにモアは秘密の部屋を駆けずり回った。散々追いかけて回されて、モアは心が折れそうだった。

足を引きずりながらも逃げ続けていた時、モアは呪文で砕けた床の小さな窪みに蹴躓いた。体が前のめりに倒れ、頬から床にダイブする。ジンジンした痛みが頬から全身へと広がり、すぐに起き上がって逃げなければと思うのに、モアはどうしても起き上がることが出来なかった。情けなくて悔しくて、また涙が滲んだ。

追いついたトムはモアの身体を跨ぐと胸ぐらを掴んで引き起こし、そのまま荒い呼吸を吐く口の中に杖先を突っ込んだ。

「君は僕のことを舐めているのかな。本気になれと言っただろう。手を加えているからと言って、手を抜いて良い訳じゃないんだよ。言っておくけど、君を捻り殺すくらいなら僕は簡単に出来るんだ」

トムは恫喝するかのよう胸ぐらを掴んだ手を揺さぶった。

「このまま脳を撃ち抜かれないかい？」

杖を喉の奥まで差し込まれ、思わず嘔吐きそうになる。モアはぼろぼろと涙を零しながら首を振った。

「じゃあ頑張るんだ、モア。僕は本気だよ。この状況下で生き残るためには何が必要かな……答えは出ているだろう。そう、魔法だ。魔法を使うんだ、モア！」

その時、部屋の入り口の方から誰かの足音が近付いてきた。

「モアー！」

モアの名前を呼ぶと、足音は慌てた様子で駆け寄ってきた。しつこいくらいに何度も聞いたから声で分かる。ハリーだ。助けが来てくれた。モアは安堵感からまた涙が込み上げてくるのを感じた。

トムはハリリーの顔を見るなり、モアの胸ぐらを掴んでいた手を離した。急に解放されたモアは支えを失くし、床にしこたま頭を打ち付けた。

「ジニー、何をしてるんだ！ どうしてモアに杖なんか向けて……」

ハリリーは愕然としてトムに呼び掛けた。モアは痛みでガンガンする頭を持ち上げると、必死になってハリリーに向かって叫んだ。

「ジニーじゃないの！ トムなの、トムなのよ！」

「トムって誰だい？ もしかして……トム・リドル!?」

ハリリーが何故トムの名前を知っているのか、とモアは驚いた。トムの日記のことはジニーとモアだけの秘密だと思っていたのに。モアはどういうことか問い詰めた気持でトムを見詰めた。だがトムはモアには目もくれず、ハリリーに釘付けになっていた。

「ハリリー・ポッター、生き残った男の子」

トムは構えていた杖を下ろしてハリリーに向き直った。ねっとりとした視線でハリリーの全身を見回し、それから背筋が寒くなるような笑みを浮かべた。

「ああ、君と話す機会をずっと待っていた。この一年、僕の関心の半分はモアにあったが、もう半分は君にあったんだよ、ハリリー。こうして会える時を楽しみにしていた」

「どうしてジニーに取り憑いているの、ジニーは無事なの!？」

ハリリーは叫んだ。

「本当は同じことを二度説明するのは面倒なんだけど、まあいいだろう。今の僕は機嫌が良い」

トムは先程モアに話したのと同じように、ジニーが日記に不安や悩みを書き続けていたこと、ジニーの注いだ魂を元にトムが強くなっていったことなどを掻い摘んで話した。ハリリーは初めこそよく分からない顔をしていたが、ジニーがトムによって食い物にされていたことが知れてくると、どんどん表情が強張っていった。

「学校の雄鶏を絞め殺したのもジニー、壁に脅迫文を書いたのもジニー。血にも見紛うペンキに塗れて立ち尽くすジニーは傑作だった。スクイブの飼い猫や四人の穢れた血にスリザリンの蛇をけしかけた

のも……あとは言わなくても分かるだろう？ まあ初めのうちは本人も全く自覚していなかったのだけれど」

ハリーは言葉を失ったように呆然とジニーの姿で語るトムを見詰めた。

「ジニーが僕を疑うようになるまで随分時間が掛かった。ジニーは時々自分の意識がなくなったり、秘密の部屋事件を想起させるような痕跡が自分に残っている原因が僕にあるんじゃないかと考え、僕の日記を捨てようとした」

そこでトムは、ようやく思い出したかのようにモアに振り返った。

「モアは知らないだろうけど、ハリーはジニーが捨てた僕の日記を拾ってくれた張本人なんだ。これは喜ばしい偶然だった。僕が会いたい、話したいと思っていた相手が拾ってくれたわけだからね」

それを聞いてモアはピンときた。バレンタインの日にハリーの鞆から零れ落ちてドラコが拾い上げた黒い手帳がトムの日記だったのだと気が付いたのだ。道理で表紙に書かれた年が五十年前の物だったわけだ。

「けれどハリーが日記を拾ったのを見て、ジニーは僕がジニーの秘密を大好きなハリーに暴露するんじゃないかと怖くなったのさ。グリフィンボールの男子寮を荒らして日記を取り返したジニーは、最後の言葉を書き込んだきり、これ以上日記を使うまいとした。でも、もうすべては手遅れだったのさ」

ハリーはジニーの姿で語るトムをじっと見詰めていた。余程怒っているのだろう、身体の横で握り締めた拳がわなわなと震えていた。「ジニーのことは良い。僕の最大の関心事はずばり、特別な力も持たない赤ん坊が闇の帝王の手を掻い潜ってどうやって生き延びたのかと言うことだ」

「どうしてそんなことを気にするんだ。ヴォルデモート卿は君より後に出てきた人だろう」

「ヴォルデモートは僕の過去であり、現在であり、未来なんだよ……」

トムは杖を振るった。空中に十六文字のアルファベットが輝きながら浮かび上がり、トムの名前を綴った。

『TOM MARVELO RIDDLE』

トムはもう一度杖を振るった。トムの名前を形作っていたアルファベットがばらばらの文字となり、自由に動いて並び変わった。

『I AM LORD VOLDEMORT』

私はヴォルデモート卿だ。その名を明かしたトムは悠然として笑みを湛えていた。



(18) 秘密の部屋③

ハリーが愕然としているのを横目で見ながら、モアは怖ず怖ずと片手を挙げた。

「ねえ、話の腰を折って悪いんだけど、さつきから話に上がっている闇の帝王とかヴォルデモート卿って有名な人なの？」

するとハリーは絶望的な表情で叫んだ。

「モア、まさか君、例のあの人を知らないの!？」

何だか馬鹿にされた気がしたモアは、失敬なと頬を膨らませた。

「それって、名前を言っただけにはいけないあの人のことでしょうか？ 闇の魔術に取り憑かれたものすごく悪い魔法使いだっただけなら知ってるわ！」

「だから、トムはその人なんだよ！ そしてそいつを二回倒したのが僕！」

ハリーは遣り切れないとばかりに叫んだ。モアはびっくりしてトムを二度見した。

「えっ、嘘でしょう？ 赤ん坊にやられちゃったっていう間抜けな魔法使いの正体がトム!? あり得ないわ！」

トムは自身が貶められたことに気付いて、器用に片眉を上げた。「君は僕を貶したいのかい？ それともそれで買ってくれているつもりなのかな」

「気分を害したなら謝るわ。でも信じられないのよ、だってあなたってあんなに頭が良いのに……本当に例のあの人なの？」

ハリーは呆れ返りながら、困ったように頭を掻いた。

「モア、ヴォルデモート卿についての話は誰に教わったんだい」

「ハグリッドよ。でも仕方ないじゃない、ハグリッドの説明って全部、偉大とか恐ろしいとかそんな抽象的な表現ばかりでよく分からなかったんだもの！ 大体そんなに回りくどい呼び名が沢山ある方がおかしいわ、皆が素直にトムって呼んでくれていたら私だってトムのことを警戒できたのに！」

モアは憤然として訴えた。ここでぶちまけても意味のないことだ

が、トムに騙されたのはきちんと教えてくれなかった皆の所為だと言いたい気持ちで一杯だった。

トムは正体を知っても恐れる様子のないモアに生温かい視線を送ると、気を取り直すように肩を竦めた。

「ヴォルデモートというのは僕が自分で付けた名だ。汚らわしいマグルの父親から継いだ名前をいつまでも使いたくなかったのさ。僕は在学中からドールレンスも含め、親しい人間にはこの名を明かしていた。いつか魔法界の全てが口にすることを恐れる名を。僕は知っていたのさ、僕が世界一偉大な魔法使いになるその日が来ることを！」

ハリーは鋭い視線でトムを睨み付けた。

「違うな。君は世界一偉大な魔法使いじゃない。その名が相応しいのはアルバス・ダンブルドアだ。それに君は在学中も、そして今でもダンブルドアを恐れている！」

「黙れ！　ダンブルドアは僕の記憶に過ぎないものによって追放された！」

「ダンブルドアは君の思っているほどそう遠くへ行っていないぞ！」

その時、何処からともなく音楽のようなものが聞こえてきた。この世のものとは思えない不思議な旋律の音楽は段々と大きくなって、こちらへ近付いてくるようだった。モアはゆっくりと立ち上がり、頭上を見回した。

すぐそばの柱の天辺から炎が燃え上がった。白鳥ほどの大きさの鶏が深紅の翼を羽ばたかせて現れた。金色の長い尾羽が優雅に揺れている。

鳥はハリーの足下に運んできたぼろぼろの黒い塊を落とすと、そのまますいーっと飛んでハリーの肩に止まった。

ハリーが問いかけた。

「フォークスかい？」

鳥は返事をするように黒い瞳を瞬かせた。トムはこれらを凝視すると、勝ち誇ったように高笑いをした。

「不死鳥に、組み分け帽子……ダンブルドアが味方に送ってきたのはそんなものか！　さぞかし心強いだろう、ハリー！」

ハリーは言葉を返せず黙りこくっていた。モアも黙り込んだ。この綺麗な鳥とおんぼろな帽子で何ができるのかまるで想像が出来なかったからだ。

「ではハリー、本題に入ろうか。これまで闇の帝王は二度も君を殺し損ねた。君はどうやって生き残ったのかな。お聞かせ願おう」

ハリーは答えを探しあぐねたかのようにしばらく口を閉ざしていた。が、やがて何を言うべきか迷った時のように曖昧な口調で話し始めた。

「正直……僕にも分からない。でもなぜ君が僕を殺せなかったのかは分かる。母が僕を庇ったからだ。母は普通の、マグル生まれの母だ」  
言いながら恐ろしくなってきたのか、或いは母を殺された怒りのためか、ハリーは震え始めた。ハリーは気持ちを強く保つたためにか、身体の脇で拳を二、三度振り下ろした。

「母が食い止めてくれたんだ。僕は去年、本当の君の姿を見たぞ。何かに寄生しなければ生き残れない残骸を！ 君の力のなれの果てだ。醜くて、汚らわしい！」

ジニーの可愛い顔が歪んだ。挑発するかのようなハリーの言葉は効いていた。トムは先程モアに貶められた時より遙かに怒っていた。トムは怒りに支配された、凄絶な笑みを浮かべた。

「そうか。庇って死ぬ、それは呪いに対する強力な反対呪文だ。なんだ、君自身に特別なものは何もないのか。期待外れだよ、ハリー・ポッター。何しろ僕たちは不思議と似通っている。混血で、孤児で、マグルに育てられた。二人とも蛇語使いで、見た目も何処か似ている。だが、君が僕の手を逃れたのは、幸運の賜物に過ぎなかったというわけだ」

もう十分だとばかりに首を振ると、トムはジニーの杖を投げ捨てた。

「ああ、散々魔力を使った所為か、ジニーの体力が落ちてきた。ジニーの体はもう長くは保たないだろう。でも、そろそろ新しい肉体を得るのに良い頃合いだとは思わないかい？」

「新しい肉体だって？」

「ジニーは僕に心を注ぎすぎた。でもそのお陰で僕は肉体を得られるというわけだ。だけどジニーだけではない。心を注いだのは君も同じじき、モア。特に君のは極上だった。みるみる力が漲るのを感じたよ」

「私の身体も乗っ取るって言うの!?!」

「乗っ取りはしない。ジニーと君とで十分に魔力は得た。今の僕は日記を抜け出すことも可能だが、目指すのはそれ以上だ」

トムは見せ付けるかのように両手を広げた。

「僕は実体を得る。闇の帝王の復活だ」

ジニーはそう言ったきり、糸を切られたマリオネットのように崩れ落ちた。モアとハリーは慌ててジニーに駆け寄り、彼女の体を揺さぶった。

「ジニー、ジニー!」

モアとハリー、どちらからともなくジニーの名前を呼び続けた。けれどジニーは返事を返すことなく、青白い顔を更に青白くしてぐったりしていた。

「ああ、力がみなぎるのを感じる! 全身が針のように痛い、生きている痛みだ! はははっ、最高の気分だよ」

トムは高揚しきった声でそう叫ぶと、またシューシュー言い始めた。地を這うような、何か重たいものが動く音が聞こえた。モアは実体化したトムには目もくれずジニーの肩を揺さぶり続けていたが、ハリーに腕を掴まれて動きを止めた。

「モア、ジニーのことをお願い。僕はあいつを何とかしてみる。君は目を閉じて、絶対に開けないでいて」

「どうして?」

「いまリドルが呼び出した秘密の部屋の怪物——バジリスクは視線で人を殺すんだ。見たら殺される、だからだよ」

トムがいつの間にも秘密の部屋の怪物を呼び出したのかはよく分からなかったが、モアはこくと頷いた。ハリーは腰から自分の杖を抜くと、勇気を振り絞るように力を込めて立ち上がった。勝ち目の薄い戦いに挑もうとするハリーだが、その姿はモアに頼もしく見えた。

モアはジニーの体を引き摺って、何とか安全な場所に逃れようとした。たつぷり時間をかけて部屋の壁際に辿り着いたモアは、必死になつてジニーに取り縋ると身体を擦り続けた。

どんどん身体が冷たくなっていく。背後でトムの高笑いが聞こえたがモアは聞いちやいなかった。どうにかこれ以上ジニーの体温が下がらないようにしないと聞かなかったからだ。

モアはジニーに覆い被さるようにしてその冷たい身体を抱き締めた。ハリーに言われた通りに目を閉じる。そのままじつとしていると、弱々しい心臓の音が響いてきた。ジニーはまだ生きている、それだけがモアの頼りだった。体中がずきずきと痛んだが、今はそんなことは気にならないくらいにジニーの鼓動に集中していた。

どうん、と床が振動した。それからずるずると地面を這うような音が聞こえた。モアは秘密の部屋に来る時に見た巨大な蛇の抜け殻を思い出した。秘密の部屋の怪物、バジリスクが何なのかは分からないが、あの巨大な抜け殻を残した蛇に違いないとモアは思った。

「ステューピファイ、麻痺せよ！ ステューピファイ！」

「何処を狙っているんだい、ハリー。目を閉じたままで闇雲に打った呪文が当たると思うのかい？」

トムは高々と笑い声を上げた。ハリーは奮戦しているようだったが、一方でジニーの身体はどんどん熱を失っていった。この戦いが終わるまでジニーを保たせたかったモアだが、もうあまり時間は残されていないようだった。このままではジニーが死んでしまう。考えるだけで涙が込み上げてきた。

どうにかしてジニーの体温がこれ以上下がらないようにしないと聞けなかった。たくさん掛け物をしてあげること考えたが、モアのローブは燃えてしまったし、ブランケットみたいな気の利いたものが冷たいこの部屋にあるはずもなかった。

何か閃かなくては、ジニーを救う手立てを考えなければ。モアは必死に頭を巡らせた。だがどんなに考えてもジニーを温める方法なんてモアの脳みそからは出て来やしないのだった。

モアは涙で緩くなった鼻を吸り、ジニーを助けたいと強く願った。

このままではいけない。せめて自分の温もりを分けてあげられたら。モアは泣きながら鼻頭を擦った。

どうしたら良いか分からず小さな身体に縋っていると、モアの身に不思議なことが起きた。まるで熱でも出たかのようにモアの身体が熱くなってきたのだ。と言うより、考えすぎて本当に知恵熱でも出たのかも知れない。身体中がお日様になったかのようにぽかぽかしている。

よく分からないが、これならジニーを永らえさせることが出来るかも知れない。モアはジニーを強い力で抱き寄せた。そうしていると、ジニーの微かな鼓動がより近くに感じられた。

大丈夫、まだ大丈夫だ。

モアは自分に言い聞かせた。

ジニーを抱き寄せたモアは、ジニーのローブのポケットに何か硬いものが入っていることに気が付いた。モアは手探りでそれを取り出すと、こつそり薄目を開けてみた。日記だった。あのトムの日記だ。

モアは日記をじつと見詰めると、思い切つて後ろに向かつてぽーんと放り投げた。ジニーを苦しめ、裏切つた日記を、ジニーの傍に置いておきたくなかつたのだ。

「ステューピファイ！ ステューピファイ！」

ハリーは相変わらず走り回りながら失神呪文を乱れ打ちしているようだった。こんなことで本当に勝てるのだろうかとモアが不安に感じ始めた時、今日何度目になるか分からない、モアは自分の身体が魔法の光線に撃ち抜かれたのを感じた。

感電したような激しい痺れが背中から急速に広がり、指先、足先にまで広がっていく。トムのツボに入ったような笑い声が聞こえる。ハリーが何度も名前を呼んでいる。痛みにも似た痺れが頭の天辺にまで達した時、モアはジニーの上に重なるように倒れ込み、それつきり意識を手放した――。

次に目覚めた時、モアが見たのは医務室の天井だった。誰かがモアの手を握り締めている。モアはゆるゆると頭を横に向けた。ハリー

だった。両の手でモアの右手を握り締めて、祈りでも捧げるかのようにじっと俯いている。

「ハリー？」

一瞬ハリーが寝ているのかと思ったモアは、囁くような声で呼び掛けた。ハリーはモアの声にすぐ顔を上げると、ほっとしたように柔らかい笑顔を浮かべた。

「良かった、気が付いて。僕、モアに失神呪文を当てちゃった時は本当にどうしようかと……」

モアは起き抜けの耳を疑うとばかりにあんぐりと口を開けた。

「ちよつと待って、嘘でしょう？」

「わざとじゃないんだ！ バジリスクに当てようとしたら、たまたまモアに当たっちゃって」

聞き捨てならない言葉だった。トムの呪文の所為でぼろぼろだったモアにとどめを刺したのが、味方であるはずのハリーの呪文だったのだ。モアはまず啞然として、それからすぐに飛び起きて立腹した。

「信じられないわ！ 今回のことで私、あなたのことちよつぴり見直しかけてたのに！」

「ごめん、モア！ わざとじゃないんだ！ 僕、もう必死で……」

「私だつて必死だったわよ！ あなたはいつまでも逃げ回ってばかりだし、その間にもジニーはどんどん冷たくなっていくし！ どうしたら良いか分からなくて大変だったんだから！」

「ごめん、本当にごめんって！」

「謝つたつて許さないわよ！ 許さないんだから！」

モアは腹立たしい思いをぶつけるようにハリーの肩を両手でぽかぽかと殴った。されるがままのハリーにしばらく当たっていたモアだが、はたと気が付いて手を止めた。

「そう言えばジニーはどうなったの？ トムは？」

「ジニーは無事だよ。リドルも何とかやつつけられた」

「やつつけたつて、どうやつて？」

ハリーはフォークスがバジリスクの目を潰してくれたこと、組み分け帽子からグリフィンドールの剣が出てきたこと、その剣でバジリス

クの喉を裂いたこと、モアが投げ捨てたトムの記事にバジリスクの牙を突き立てたことなどをたつぷりと時間をかけて話した。

話を聞いたモアには、今回のことが結局実力というよりトムの言うように運で勝ち得た勝利のように感じられたが、どんな形であれ生き残っているのなら良かったことだと思っただけで口には出さないことにした。

「じゃあトムは消滅してしまったのね」

「モアはどうやってリドルと知り合ったの？」

「日記の切れ端をジニーに渡されたのよ、書き込んでみて。私のおじいちゃんはトムと随分仲が良かったみたいなの、それで私に興味を持ったみたい。でも今思えばあの時のジニーはトムに操られていたのかも知れないわね。普段と態度が違ったもの」

「君がジニーみたいにならなくて良かったよ」

「本当にね。こんな風を利用されるのはもうこりこりだわ」

ハリーにはそう告げたが、トムが居なくなってほっとした反面、モアはトムが居なくなつたことをちよつぱり残念に思う自分が居ることになり気が付いた。ジニーを操って好き勝手していたトムだが、モアに対しては今日まで頼れる友人で居続けたのは事実だったからだ。

魔力や魂を吸い上げるためという目的があつたにせよ、多分、トムはもともと人付き合いが好きなタイプなのだろう。冗談を交えながら下らない話にも付き合い合ってくれたし、学生時代のおじいちゃんの話もよくしてくれた。楽しかったあの時間の全てが嘘だとは考えたくなかつた。トムには勉強でもお世話になつていたことだし……。

勉強。そこでモアはとんでもないことを思い出してしまった。

「そうだ、期末テスト！ ああ、どうしよう。私、この半年間勉強はトムが頼りだったのに！ もうあまり日がないのに変身術の理論部分の追い込みが終わつてないのよ！」

「君、闇の帝王に勉強を教わつてたのかい!？」

「そうよ。教え方も上手いし、その気にさえなればきつと良い先生になれたと思うんだけど」

ハリーは信じられないとばかりに目を丸くしたが、すぐに気を取り



直して言った。

「勉強ならまたハーマイオニーに教わりなよ。ずっとモアと仲直りしたがつてたから、喜んで教えてくれると思うよ」

「そうね、考えておくわ」

言葉を交わしながらモアの意識がすっかりしていることを認めたハリーは、元氣よく椅子から飛び降りた。

「今日は事件解決のお祝いにこれから宴会があるんだって！ マンドレイク薬で甦生した人達はもう大広間に向かつてるんだ。だから多分僕達が最後だよ」

「そうなの!? 早く行かなくちゃ!」

ブランケットを剥いだモアがベッドから足を下ろしたその時、シャツと音を立ててベッドを囲っていたカーテンが開いた。マダム・ポンフリーだった。厳めしい表情でモアを見詰めるマダムは、腰に手を当てて壁のように立ちはだかった。

「そんなに傷だらけで宴会に出られるかと思っているのですか」

「嘘でしょう!? 私だけパーティに出ちゃいけないなんてことある!?」

モアが絶望を込めて言うと、マダム・ポンフリーは数秒間の沈黙の後に相好を崩した。

「冗談ですよ。楽しんでいらつしやい。但し、怪我から来ていたと思われる高熱も引いたばかりですし、身体中生傷だらけなのですからはしやぎすぎないように」

最後の言葉を強調して言うと、マダム・ポンフリーはカーテンを全開にして去っていった。今や医務室に並んだどのベッドも清々しいくらいに空っぽだった。

思い出したかのように身体中が傷だらけの痣だらけでじくじくと痛んだが、パーティを前にしたモアはそんなこと気にならないくらいにわくわくしていた。

「ありがとう、マダム! 行ってくるわ!」

モアはベッドから降りた。ハリーがモアの手を掴んで急かすように引つ張った。二人は医務室を飛び出すと、賑やかな喧騒が遠くに聞

こえる廊下を駆けて、大広間へと急いだ。

大広間に入るなり、待っていたとばかりにわつと歓声が上がった。ロンとハーマイオニーが立ち上がり、モア達を出迎えた。拍手に迎えられながら、二人はグリフィンボールのテーブルに向かった。モアはハリーと顔を見合わせた。二人とも笑顔だった。

さあ、楽しい宴会の始まりだ！